



公益社団法人日本環境教育フォーラム

清里ミーティング2012

報告書

日 時：2012年11月17日(土)～19日(月)

場 所：公益財団法人キープ協会 清泉寮
八ヶ岳自然ふれあいセンター

主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム

後 援：環境省、文部科学省、国土交通省、林野庁
山梨県、日本環境教育学会

協 賛：アサヒビール株式会社、
NTTジーピー・エコ株式会社、
J-POWER電源開発株式会社、
公益財団法人損保ジャパン環境財団、
株式会社日能研

参加者：177名



公益社団法人日本環境教育フォーラム
清里ミーティング 2012

目次

開催趣意	1
スケジュール	2
清里ミーティング これまでの実績	3
1日目 開会式・全体会1	
開会式	10
全体会1	
基調講演	11
パネルディスカッション	14
2日目 3.5時間ワークショップ	20
全体会2	
2-1 +ESDプロジェクトについて(環境省)	45
2-2 「JEEFってなに?何が出来るの?JEEFに期待します」 ..	46
オプションプログラム	
環境教育プレゼンテーション	49
早朝ワークショップ	55
当日募集ワークショップ	56
3日目 全体会3・閉会式	
全体会3 全員参加型 全体ディスカッション	59
閉会式	62

開催趣意

今年で通算26回目となる「公益社団法人日本環境教育フォーラム清里ミーティング2012」を、今年も11月17日(土)～19日(月)の3日間にわたり、公益財団法人キープ協会清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に開催した。

このミーティングは、主に以下の2点を全体のテーマとした。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育がある。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切である。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人（または団体）がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要である。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPO など環境教育の現場で働く人々同士のつながり＝ネットワークを大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えている。

そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、本ミーティングを開催した。

清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であること。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持っていること。

今年の特徴

今年のメインテーマは、「アジアの一員として、日本が今できること ～think global act local: 『リオ+20』の年に考える～」

1992年の地球サミットから20年。6月には「リオ+20」国際会議が開かれた。中国・韓国はじめアジアの各国でも環境教育が注目、広がりを見せている。日本全国の各地域での様々な切口での実践を共有しながら、地域発でアジア・世界の中で、日本が果たしていく役割を考えた。

全体会では、荒木光弥氏（株式会社国際開発ジャーナル社代表取締役）を中心に、「リオ+20」について、ジャーナリストからの報告、中国・韓国・インドネシア・ブータンでの実践の報告がされた。

また、「環境教育プレゼンテーション」では、たっぷりと時間をとって、皆様から活動の最新情報を発表していただいた。各地で環境教育を実施している企業や行政や自然学校の中で、今何を最も大事な環境教育のテーマとしているのか、どんな課題、新しい挑戦があるのかを発表しあい、共有された。そして、それぞれの活動を理解し、刺激を受け合いながら、これからの環境教育活動につなげていただくことを目標とした。

スケジュール

●1日目：11月17日（土）

10:30～	受付開始
11:30～12:15	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画（自由参加）
13:00～15:30	開会式 全体会1 「アジアの一員として、日本が今できること～『リオ+20』の年に考える～」 ●基調講演 「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」 ●パネルディスカッション
15:30～16:20	休憩・チェックイン
16:20～18:00	環境教育プレゼンテーション 1日目夕方の部
18:30～20:00	夕食
20:00～20:30	休憩・移動
20:30～	環境教育プレゼンテーション 1日目夜の部 情報交換会 「人と組織の紹介処」開設

●2日目：11月18日（日）

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ（自由参加）
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	休憩・移動
9:00～13:00	3.5時間ワークショップ 午前の部（昼食含む）
13:00～13:30	移動
13:30～17:00	3.5時間ワークショップ 午後の部
17:00～17:30	移動
17:30～18:30	全体会2-1 「+ESDプロジェクトについて」（環境省） 2-2 「JEEFってなに？何ができるの？JEEFに期待します！」
18:30～20:00	夕食
20:00～20:30	休憩・移動
20:30～	環境教育プレゼンテーション 2日目夜の部 情報交換会 「人と組織の紹介処」開設

●3日目：11月19日（月）

7:00～ 8:00	ポールラッシュ記念センター早朝特別開館（自由参加）
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	チェックアウト
9:00～11:30	当日募集ワークショップ
11:30～11:45	移動
11:45～12:30	全体会3・閉会式「全員参加型 全体ディスカッション」
12:45～13:45	さよならパーティ
14:00	解散

「清里ミーティング」これまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】 ①環境教育について（考え方とその論理）
 - ②自然観察の中に今後とりこんでいきたいもの
 - ③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
 - ④施設運営とコーディネーターの在り方について
 - ⑤自然観察の有料化について
 - ⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子（小池しげんの子）

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／山梨県
- 【分科会】

前半 ①学校と環境教育	後半 ①地域・開発と環境教育
②地域社会と環境教育	②施設と環境教育
③施設と環境教育	③人づくりと環境教育
④自然観察と環境教育	④市民・行政・企業・学校の協力
⑤企業と環境教育	⑤環境教育の目的と方法
	⑥学校と環境教育
	⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ（元ヨセミテ国立公園管理事務所長）

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】 ①小中高における環境教育カリキュラム
 - ②若い世代に楽しいプログラムとは
 - ③環境教育をうまく経営していくためには
 - ④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
 - ⑤環境教育で村おこしができるか
 - ⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ（元マリン・ディスカバリーズ専務理事）

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】 ①学校教育 ②事業化
 - ③プログラム ④人づくり
 - ⑤施設 ⑥地域開発・村おこし

※この年4月より上記6つの研究部会が発足。

- ゲスト：ジョセフ・コーネル（ネイチャーゲーム考案者）

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】 ①学校 ②事業化 ③プログラム
 - ④人づくり ⑤施設 ⑥地域社会
- ゲスト：ステイブン・メドレー（ヨセミテ・アソシエーション会長）

*1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足

*1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【紹介WS】 ①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
 - ②New School of Conservation における環境教育
 - ③ペンギンリザーブ活動報告
 - ④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
 - ⑤フィールドミュージアムごっこ
 - ⑥環境教育国際セミナーに参加して
 - ⑦成城学園における「散歩」「遊び」
- 【体験WS】 ①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
 - ②エコロジーキャンプつまみぐいハイク
 - ③ネイチャーゲーム入門
 - ④もしフィールドでけがをしたら
 - ⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】 ①学校での環境教育 ②地域に根ざした環境教育
 - ③エコツーリズムの可能性とその問題点
 - ④環境教育のプログラム教材開発
 - ⑤指導者養成について ⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】 ①ネイチャーゲーム ②死の準備教育の試み
 - ③マインドクロッキー ④パートナーシップへの挑戦
 - ⑤究極の自然観察会 ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】 ①プログラム ②施設 ③学校
 - ④人づくり ⑤企業 ⑥地域・自治体
 - ⑦エコツーリズム ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ（ストーリーテラー）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】 ①ネイチャーゲーム ②ファイブ・トリック
 - ③森の宝箱をつくろう ④地球救出作戦
 - ⑤枯れ木に花を咲かせましょう ⑥清里・冬物語
- 【分科会】 ①企業 ②エコツーリズム ③都市環境教育
 - ④ネイチャートレイル ⑤自然学校
 - ⑥ネイチャーライティング ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー（ミドルベリー大学英語学・環境学教授）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】 ①自然学校としての施設づくり ②行政・自然学校
 - ③自然学校の経営を考える ④自然学校の人材育成
 - ⑤自然学校のプログラム
- 【WS】 ①写真で環境教育 ②あなたにとって出会いとは何ですか
 - ③環境教育を企画・プロデュースする
 - ④ソフトクリーム姉ちゃんをねえ！
 - ⑤未知なる可能性を求めて
 - ⑥キープ・フォレスターズ・スクールズのプログラム体験
 - ⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
 - ⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
 - ⑨アース・アート ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算 10 回)

■日時：1996年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：174人

■主催：日本環境教育フォーラム

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】 ①自然学校の「事業化」
 ②自然学校でのプログラム
 ③地域振興と環境教育
 ④環境保全活動がそのまま環境教育
 ⑤エコツーリズムの様々な可能性
 ⑥JEEFの法人化など今後の可能性

【ワークショップ】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②ネイチャーエクスポアリング
- ③清里での川の環境教育を考える
- ④「子供であそぼう」についての御紹介⑤元気がでる自然観察
- ⑥環境教育の本質を考える
- ⑦環境教育を企画・プロデュースする
- ⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
- ⑨自然をテーマにしたスライドショー
- ⑩自分への気づきと NGO
- ⑪清里インターネット通信社へようこそ
- ⑫森だくさんの自然体験
- ⑬まちを遊ぼう
- ⑭未知なる可能性を求めて
- ⑮エコビレッジを作ろう
- ⑯アクティビティの“パクリとアレンジやローカライズ”

※1997年4月 環境庁主管の法人格を取得、

社団法人日本環境教育フォーラム設立**(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算 11 回)**

■日時：1997年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：170人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】 ①環境教育の指導者養成
 ②環境教育の新しいプログラム開発
 ③環境教育とまちづくり
 ④環境教育の情報の発掘と提供
 ⑤企業や行政とどのように組むのか？
 ⑥新しい交流集会のスタイル

【WS】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②自然と心・心とひとのコミュニケーション
- ③環境教育の服装計画を考える
- ④出たとこ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
- ⑤環境教育を企画プロデュースする
- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インタープリティブサインをつくろう
- ⑧ディープエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくろう！
- ⑯野外における企業研修の実際とその可能性

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算 12 回)

■日時：1998年11月14日(土)～16日(月)

■参加人数：176人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】 ①公共事業における環境教育の役割
 ②森林・里山における環境教育と地域振興
 ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
 ④動物と関わる環境教育
 ⑤日本型エコツーリズムについて
 ⑥メディアと環境、その先にあるもの

【ワークショップ】

- ①環境教育個人商店を考える
- ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
- ③21世紀のインタープリテーションを求めて
- ④おきらく やまんばの部屋
- ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
- ⑥エコマネーのすすめ
- ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
- ⑧ネイチャーエクスポアリング
- ⑨エコスピリチュアルワークの試み
- ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
- ⑪これまでの50年とこれからの50年
- ⑫川を設計してみよう
- ⑬「おもしろ」を「かたち」はじめの一歩
- ⑭自然学校でめしが喰えるか

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算 13 回)

■テーマ：「学ぶ心・育つ力」

■日時：1999年11月13日(土)～15日(月)

■参加人数：185人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】 ①自然学校の運営を考える
 ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
 ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
 ④森から見つめる川と海
 ⑤エコツーリズム一歩前へ
 ⑥見つめよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
 ⑦チルデンを越える！
 ⑧教育を考える

【早朝 WS】

- ①カラスのきもち
- ②朝のティータイム
- ③きもちとキモチをつないだら
- ④五感で感じよう清里の自然
- ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算 14 回)

■テーマ：「原点を見つめよう」

■日時：2000年11月11日(土)～20日(月)

■参加人数：171人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

【体験 PRG】

- ①野外での救急法を覚えよう
- ②ネイチャーウォッチング in 清里
- ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
- ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
- ⑤竹を使ったものづくり
- ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
- ⑦自分という自然に出会う
- ⑧Frog (カエル)
- ⑨プロジェクト・アドベンチャー

- 【分科会】 ①自然体験活動における体験学習法
②ゆったり楽しむ ノスタルジーワーク
③虫を知る・入門
④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
⑤学校ビオトープの可能性
⑥五感を使って楽しみながら自然探検
⑦環境教育とスピリチュアリティ
⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
⑨自然学校のPR活動を考える
⑩Out of Treasure Boxes
⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」

- 【早朝 WS】 ①野遊び手遊び発見隊
②センス・オブ・ワンダーの体験
③地球と私の合作づくり “1枚の葉”
④見て、聴いて、感じて…朝の森でネイチャーゲーム
⑤早朝ジョギングワークショップ
⑥キモチときもちをつないだら

■スライドプレゼンテーション

■JEEF 理事による3分トーク

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算 15回)

■日時：2001年11月17日(土)～19日(月)

■参加人数：192人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/農林水産省/林野庁/山梨県

- 【体験 PRG】 ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
③秋の味覚を楽しもう！
④「ほっ♪」となるたき火講座
⑤身体感覚講座
⑥The Bear (ひぐまの生き方、暮らし方)
⑦プロジェクト・アドベンチャー
⑧やまねミュージアムへ行く

【分科会】

- ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きもの)に関連するもの」を活用する
②「いまだき」の子ども・「いまだき」の親 改造計画！
③博覧会を環境教育という視点から評価する
④ゆったり過ごすやまねば流ネイチャーワーク
⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
⑦小さな子どものための環境教育の“技”をさぐる
⑧地域の昔話を中心にした環境教育
⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
⑩Environmental Education in English
⑪北九州博、きら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
⑫テロ・戦争に関してわかちあう
⑬環境教育基礎講座
⑭GEMSの体験プログラム
⑮自然学校で働くこと
⑯センス・オブ・ワンダー
⑰ネイチャーエクスプロアリングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
⑱田んぼから生まれる日本型環境教育

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ

②早朝ジョギングワークショップ

■スライドプレゼンテーション

■参加者による3分トーク「ここが変だよ！環境教育」

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算 16回)

■テーマ：「胎動」

■日時：2002年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：182人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

■環境教育ミニレクチャー

■ヨハネスブルグ・サミット報告

■参加者による3分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!？」

【ワークショップ】

- ①地域通貨ってなんだらう？
②折り紙を使った環境教育の試み(3)
③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
④環境問題、エコロジカルアートからの試み
⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
⑥体験主義を超えて…プロジェクト・ワイルドの世界
⑦「自然の中で働く男性はオバチャン度が高い??？」を証明したい!!
⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
⑨ひよこのキモチ
⑩モアイは何を見たか
⑪Environmental Education in English
⑫持続可能な開発と環境教育
⑬森の交響サイン計画づくり
⑭サロンの語り場

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②清里ミニガイドツアーA

③清里ミニガイドツアーB

④モンゴル茶で朝を迎えよう

⑤清里ミニガイドツアーC

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2003(通算 17回)

■キーワード：持続可能な開発のための教育

■日時：2003年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：208人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・科学と環境教育をつなぐミーティング(前夜祭)の報告
- ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律
- ・持続可能な開発のための教育(ESD)
- ・スライド&トーク オオロニの日々

【WS&体験 PRG】

- ①ワラっていいとも
②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試みHAM
④総合学習へのNPO参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故？
⑤エコ・ネイションゲーム
⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
⑦科学するココロを育てよう!
⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試みPM
⑨野生生物教育の現状と課題
⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう!
⑪「持続可能な人」づくり
⑫開府400年! 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
⑬どうなる? どうする? 日本環境教育フォーラムの未来
⑭子育てという環境
⑮地方発! 食農発信!
⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう!

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダー

②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース

③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2004(通算 18 回)

- キーワード:「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- 日時:2004年11月13日(土)~15日(月)
- 参加人数:187人
- 主催:社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管:財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力:山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援:環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコツーリズムという生き方
- ②科学と環境教育
- ③地場産小麦でパンをつくろう!
- ④環境立国 エコ・ネイションゲーム
- ⑤「センス・オブ・ワンダー」からグリーンコンシューマーへ
~第1回清里「エコ商品コンテスト」~
- ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
- ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
- ⑧自然学校の動きと人材養成
- ⑨環境教育 in 国際協力 最新線!
- ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
- ⑪酵母を育てて、パンを作ろう!
~酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり~
- ⑫石器時代に接近!モノはこうして作る ~シエラカップ~
- ⑬いのちを伝える自然体験 ~自分流健康な生きかたを学ぶ~
- ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
- ⑯「1億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

パーム油のはなし ~開発教育入門講座~

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい
- ③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド**■JEEF 公開理事対談****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2005(通算 19 回)**

- キーワード:「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会作りに具体的にどのように役に立ってきたのか」

- 日時:2005年11月19日(土)~21日(月)
- 参加人数:221人
- 主催:社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管:財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力:山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援:環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会:基調講演、5分間スピーチ、パネルディスカッション**【WS&体験 PRG】**

- ①環境教育基礎講座(午前の部)
- ②自然学校って何だ?
- ③学校教育と環境教育
- ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じとろう
~ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら~
- ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証
~セルフガイドシートの評価軸を作ろう~
- ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう!
~低学年向けの GEMS プログラムを通して~
- ⑧森林療法
- ⑨プロジェクトWE T体験会(午前の部)
- ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
- ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
- ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
- ⑬CSR と環境教育
- ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは、...
- ⑮里山で音楽会

- ⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法! ~過去からの環境の変化を辿る~
- ⑰プロジェクトWE T体験会(午後の部)
- ⑱科学と環境教育 見直そう!あなたのインタープリテーション
~持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②座禅&ヨガ
- ③清里ミニガイドツアー

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド**■JEEF 活動報告****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2006(通算 20 回)**

- 日時:2006年11月18日(土)~20日(月)
- 参加人数:224人
- 主催:社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管:財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力:山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援:環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会「日本の環境教育 この20年を振り返る」基調講演**■学長鼎談「大学と環境教育」****【WS&体験 PRG】**

- ①自然学校を事業化する ~20年間に自然学校は何を獲得したのか~
- ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
- ③あなたにとって食育ってなに?
- ④環境教育基礎講座
- ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
- ⑥学びとコミュニケーション ~GEMS プログラムの体験を通して~
- ⑦ESDの実践のポイントを探る ~みんなで話せばわかってくる!~
- ⑧森林環境教育のすすめ ~木が好きになるプログラム~
- ⑨50分プレゼンテーション(午前の部)
- ⑩企業とNPOとの協働を考える戦略会議
- ⑪環境教育とESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
- ⑫環境教育と地産づくり
- ⑬環境教育仕事塾
- ⑭行政との連携を考える
- ⑮大鼓で太古に逆行するぞ!
- ⑯木から樹を知る方法 ~木材をIPにいかす~
- ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくろう
- ⑱50分プレゼンテーション(午後の部)
- ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す
科学的知識の伝え方

⑳感性?科学?どちらのインタープリテーションショー**【早朝 WS】**

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②環境質問 ~答えのない問題~
- ③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか
- ④清里ミニガイドツアー
- ⑤清泉寮 朝さんぽ

■環境ショート映像作品上映会**■今後の戦略会議****■スライドプレゼンテーション****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2007(通算 21 回)**

- 日時:2007年11月17日(土)~19日(月)
- 参加人数:230人
- 主催:社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管:財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力:山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援:環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■省庁プレゼンテーション**■全体会:「生物多様性」基調講演**

- ・第3次生物多様性国家戦略が目指すもの
- ・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方
~自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法~
- ②行政との協働を考える
- ③学ぶ環境としてのコミュニケーション ~GEMS とゴードンメソッド~

- ④食育コミュニティをつくろう!
- ⑤どこでもインタープリテーション! ~グッズ展開型 IP~
- ⑥関西発! これからは日本的でいいこう!!
- ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション~自然学校版~
- ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑨ツリークライミング? 樹上の世界から学ぶこと
- ⑩50分プレゼンテーション
- ⑪企業と環境NPOとの協働を進める戦略会議
- ⑫ESDを広める人のための「ESD入門講座」
- ⑬環境教育基礎講座
- ⑭生物多様性と環境教育について
- ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ
~ヤマネのプログラム体験を通じて~
- ⑯メディアと自然学校
- ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
- ⑱体験型展示物を評価しよう
- ⑲エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!
- ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
- ㉑やってみよう!! 体感 ツリークライミング®の世界
- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
③清里ミニガイドツアー
- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2008(通算 22 回)

- 日時: 2008年11月15日(土)~17日(月)
- 参加人数: 192人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会: 「日本型環境教育の知恵 出版記念」~日本型環境教育とは~
- 【ワークショップ】
- ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
- ②生き物との共生について ~どんな共生があるのか~
- ③環境教育&ESDを”広げる×深める”政策を考えよう
- ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ!
- ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
- ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
- ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
- ⑩企業のための環境NPOカタログ編集会議
- ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
- ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
- ⑬オオバコザムうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
- ⑭川遊びのルールを広めよう
- ⑮日本型、日本的を考える ~日本の自然観という視点~
- ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
- ⑰障害者と共につむく環境教育の企画をつくる!
- ⑱森づくりのための戦略会議 ~行政・企業・NPOの協働~
- 【早朝 WS】 ①砂鉄から鉄を作ろう! 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③清里の森で宝物発見
④ロシアから渡ってきた鳥と出会いましょ
⑤清里ミニガイドツアー
- 環境教育プレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2009(通算 23 回)

- テーマ: 「生物多様性」~環境教育の役割~
- 日時: 2009年11月14日(土)~16日(月)
- 参加人数: 193人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
・基調講演「生物多様性」とは何か? 行政・企業・NGOから
・事例紹介「生物多様性 私はいこう伝える」
・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ①自然体験型環境教育基礎講座
- ②多様な生物の声を聴く~全生命の集いワークショップ~
- ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
- ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ! Part2
- ⑥風が吹けば葎屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑦パーマカルチャーと環境教育
- ⑧幼児~小2に伝える生物多様性 ~生物多様性の形を探る~
- ⑨ビジターセンターを運営側から考え創る方法
- ⑩あなたにとって、生物多様性って何?
- ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
- ⑫人間界に多様性は確保されているか
- ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑭どうプログラム化しよう? 自然学校の「エネルギー」
- ⑮風が吹けば葎屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑯日本的、アジアの自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
- ⑱事故防止~注意を促すだけでいいの? 実践的予防安全法
- ⑲トランジションタウンとは何か? 都留での試み
- (注) ⑰川遊びを始めよう! ~川の安全管理トレーニング~ は、都合により中止
- 【早朝 WS】 ①生物多様性を映像で感じよう ~いっしょに生きる道~
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③ゼロからの火おこし術
- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2010(通算 24 回)

- テーマ: 「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時: 2010年11月13日(土)~15日(月)
- 参加人数: 177人
- 主催: 公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
・基調講演「生物多様性条約第10回締約国会議の結果」
・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
・提案「What is CEPA?」
・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ① 自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ② 日本の自然観から考える環境教育
- ③ 農的暮らしの学校
- ④ 自然感を耕す: 人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤ 生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥ 生物多様性条約の CEPA って何だ?
- ⑦ 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑧ エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3

- ⑩「サステナビリティ」の基本はこれだ！ ※
 - ⑪これだけは知っておきたい！生物多様性の基礎知識 ※
 - ⑫生物多様性を普及する環境教育を目指して
 - ⑬森を考える～木質バイオマスで100年先の森づくり～
 - ⑭大学生のための食育プログラム
 - ⑮命をいただく～ニワトリと生きる～
 - ⑯エコロジカル・シンキングゲーム
 - ⑰「地球交響曲第7番」を見て、みんなで語ろう！
 - ⑱イナカとこどもと日本の未来を考える
 - ⑲企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える
- ※の印は、主催者企画ワークショップ
 (注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

- 【早朝 WS】 ①ゼロから始める火起こし術
 ②森林療法的プログラム体験～樹林気功と運動療法
 ③冬鳥と出会って、いのちを感じる
 ④キープ協会「アニマルパスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

- 【早朝 WS】 ①バードコールハイク
 ②多様性を感じる観察会
 ③ゼロからの火起こし術
 ④朝飯前の手仕事
 ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
 ⑥生き方を学ぶ自然観察
 ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
 ⑧映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
 ⑨みみをすませば～みんなで作るいのちのものがたり～
- 環境教育プレゼンテーション
 - 当日募集ワークショップ
 - JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
 - JEEF 理事の何でも相談所

※2010年6月 公益社団法人への移行認定を取得、
 公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2011(通算25回)

- テーマ：
「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」
- 日時：2009年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：188人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：財団法人キープ協会清泉寮
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／経済産業省／
山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
・パネルディスカッション
「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
 - ②企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2
 - ③質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
 - ④農的暮らしの自然学校
 - ⑤森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
 - ⑥里山応援ネットワークを作ろう！ワークショップ
 - ⑦0から仕事を作る～体験からチームを作る～
 - ⑧『ワールドカフェ～自分発！未来をかえる価値観考～』
 - ⑨修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～
 - ⑩震災救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
 - ⑪ESD×CSR：サステナビリティ教育指針を体感！ ※
 - ⑫やったらできた！エネルギー系企業と弱小NPOのコラボ
 - ⑬環境と文化・歴史・科学 etc.の複合…「旧暦」入門
 - ⑭自然感を耕す 自分と里地里山里水が元気になるワーク
 - ⑮生物多様性まんだらカードゲーム 今年小学生版
 - ⑯PLT, WILD, WET の日本での可能性を考えよう
 - ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
 - ⑱原発と環境教育～思ったことを話すことからはじめよう～
 - ⑲狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～
- ※の印は主催者企画ワークショップ

1 日目

開会式・全体会 1

開会式

司 会：（公社）日本環境教育フォーラム理事 川嶋 直

開会挨拶：（公社）日本環境教育フォーラム会長 岡田 康彦

現地開催事務局挨拶：（公財）キープ協会常務理事 林野 尚樹

基調講演

「リオ+20 の概要と、NGO の成果と課題」

北橋 みどり（環境パートナーシップ会議国際プロジェクトコーディネーター）

全体会 1 パネルディスカッション

「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

<コーディネーター>

岡島 成行（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）

<パネリスト>

荒木 光彌（国際開発ジャーナル社代表取締役・JEEF 理事）

北橋 みどり（環境パートナーシップ会議国際プロジェクトコーディネーター）

李^リ 妍^{やん}焱^{やん}（駒澤大学文学部社会学科准教授／

任意団体「日中市民社会ネットワーク」代表）

（敬称略 50 音順）

開会挨拶

(公社)日本環境教育フォーラム会長 岡田 康彦

清里ミーティングに参加者に向けて、本ミーティング3日間を充実したものにするためのメリットやポイントを含めて話された。

このミーティングには、年代も立場も違う、様々な方が参加しているので交流し、実りのある機会にして欲しいということを述べた。

また、何かしらの成果を持ち帰り、それらの成果を今後の1年間の活動の糧にさせていただけることへの希望が話された。そして、1年後には、清里で再会できることを希望するという言葉で開会の挨拶がされた。

現地開催事務局 挨拶

(公財)キープ協会常務理事 林野 尚樹

開催事務局の林野氏の挨拶は、25周年記念を迎えた清里ミーティング開催に関しての祝辞と、開催地として長い期間キープ協会にて実施していることに対し、お礼の言葉をいただいた。

引き続き、今回も会場となっている清泉寮の特徴について紹介され、こだわりの料理と温泉のことが紹介され、最後には、「清里ミーティングの開催を心から歓迎する」という言葉で締めくくられた。



1 日目 全体会 1

「アジアの一員として、日本が今できること

～『リオ+20』の年に考える～

＜コーディネーター＞ 岡島成行(公益社団法人 日本環境教育フォーラム)

1992年の地球サミットから20年。6月には「リオ+20」国際会議が開かれた。中国をはじめアジアの各国でも環境教育が注目、広がりを見せている。全体会1では、日本全国の各地域での様々な切口での実践を共有しながら、地域発でアジア・世界の中で、日本が果たしていく役割を考えた。

基調講演 「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」

北橋 みどり女史(環境パートナーシップ会議国際プロジェクトコーディネーター)

※北橋女史の資料より

I リオ+20の概要

■目的等

- ・「国連持続可能な開発会議」 = 通称リオ+20
- ・目的：持続可能な開発に関する新たな政治的コミットメントを確保し、持続可能な開発に関する主要なサミットの成果の実施における現在までの進展及び残されたギャップを評価し、新しい又は出現しつつある課題を扱うこと。
- ・日程：本会合 6月20-22日
- ・開催地：リオ・デ・ジャネイロ
- ・会議テーマ：(1) 持続可能な発展と貧困削減の文脈におけるグリーン経済、
(2) 持続可能な開発のための制度的枠組



■概要

- ・本会議は 191か国から約45,000人が参加(NGOは1万人) → 国連最大の会議
- ・可能な限りサミット(首脳会議)としていたが、G8先進国の首脳の参加は少なく、新興国の勢いが目立った。

II 成果文書・交渉

成果文書「The Future We Want (我々の望む未来)」(53ページ/283項目)を採択
(日本語仮訳 http://www.mri.co.jp/SERVICE/rio20/rio20_seika_yaku.pdf)

①グリーン経済!?

成果文書 ・持続可能な開発を達成する上でグリーン経済は重要なツール
・取り組みの手段、程度は各国の状況に応じて選択

②未来をどうやって創る? (制度的枠組み)

成果文書 ・CSD(持続可能な開発委員会)に代わるハイレベル政治フォーラムを2013年の国連総会までに設立する
・UNEP(国連環境計画)の強化・格上げ：普遍的メンバーシップ、資金強化、国連フォーラム内での調整能力を強化する。

CSD(持続可能な開発委員会)をSDC(持続可能な開発理事会)に、UNEP(国連環境計画)をWorld Environmental Organization(WEO)にするなどの案からは後退。

③新たな世界目標 持続可能な開発目標(SDGs)

成果文書 ・持続可能な開発目標(SDGs)政府間交渉プロセスの立ち上げに合意。
・2015年以降の国連開発アジェンダに整合的なものとして統合すべきことに合意。
・ミレニアム開発目標(MDGs)とSDGsが統合される見込みだが、詳細は不明。
・その後、世代間の公平性についても注目が高まっている。

■その他 成果文書で注目するポイント

- ・GDPを補完する指標に関して、国連に対し、作業計画の立ち上げを要請
- ・企業の持続可能性レポートのグッドプラクティス・モデルの開発の奨励
- ・持続可能な消費と生産（SCP）に関する10年枠組みの採択
- ・「未来世代のためのレポート」を事務総長が国連総会に提出することを含めて、世代間の連帯に配慮することを検討する

教育に関わる部分

- ・持続可能な開発のための10年の終了年を超えてESDを推進することが合意。
- ・行動とフォローアップの重要な25のテーマに 教育、Sustainable Tourism
- ・ステイクホルダーの重要性、役割に具体的に言及されている。
- ・「高等教育機関の持続可能な実践に関する約束（ネットワーク）(Higher Education for Sustainability Initiative)」が、リオ+20を契機に発足。（成果文書外、ボランティアコミットメント）

■日本政府

- ・玄葉外務大臣が参加
- ・「緑の未来イニシアティブ」を発表
環境未来都市、環境・低炭素技術導入・防災対策のために途上国支援。
持続可能な開発のための基盤として、生物多様性、ESD。

■交渉が難航した背景

- ・先進国の経済危機。
- ・先進国、ホスト国共にリーダーシップの欠如。
- ・グリーンエコノミーを国際交渉の議論とした。
- ・20年前の「共通だが差異ある責任」の枠組みのままG77+China(途上国・新興国を含めた132か国程度のグループ) v s 先進国の2項対立となってしまう、議論が難航。
⇒「共通だが差異ある責任」の再定義の必要性。
また、有志連合や、ボランティアコミットメントへより期待が高まる。

話されなかった原発

- ・東日本大震災、原発事故後まもなく始まったリオ+20の議論。原発の規制を期待していたNGOも多かった。
- ・原発は交渉議題にのらなかったが、NGOはサイドイベント等で多くの議論を行った。女性メジャーグループは本会合のスピーチの際に、原発が議論されないことへの批判を述べた。



3つの柱から、4つの柱や床？

成果文書では「持続可能な社会を作るには経済・環境・社会という3つの分野（three dimensions）を統合し…」といったような記述がいくつかある。文章には反映されなかったが、「そもそも環境が他の柱より弱い」や、「文化を加えた4つがいい」といった議論があった。他にも、環境と社会が守れる制約の中に、経済が収まるようにとか、社会的保護の床（Social Protection Floor）などNGOを中心に様々な社会のあり方に関して議論があった。

Ⅲ NGOやステイクホルダーの活動について

■9つのメジャーグループ（MG）（Agenda 21での定義）



- ・UNで一番オープンなプロセスとされている。
「UN is yours! Take Action!」（国連担当者）
- ・準備会合等での交渉の傍聴
- ・交渉途中の文書を随時共有
- ・ウェブを使って誰でも意見を提出できる
(493/677件の意見はメジャーグループから)

■交渉過程とサイドイベント等

公式会合・交渉	<p>…6/13-15 準備会合</p>  <p>1年以上前からの何度も準備会合がニューヨークの国連本部などで行われていた。そして、最後の準備会合がリオで開催された。テーマごとに分かれて毎晩遅くまで議論されたが文章の半分も合意できないまま時間切れとなった。その後ブラジル政府が非公式の会議を行い（文章を結構強引に削って・纏め）、本会議前日未明に文章が仮採択されたと宣言した。</p>	<p>6/16-19 市民社会対話</p>  <p>ブラジル政府主催で開催された市民社会対話。持続可能なエネルギー、食糧、森林などの10テーマについて議論が行われた。オンラインで意見を集めたり、電子投票を行うなどITを使ったユニークな方法がとられた。ただし、政府の人は準備会合の延長で参加せず、また、この市民社会対話の議論も文章交渉には反映されなかった。</p>	<p>6/20-22 リオ+20 本会議</p>  <p>成果文章“The Future We Want(我々が望む未来)”が採択された。本会議では、成果文章の議論は行われず各国代表のスピーチが連日続いた。日本からは、玄葉外務大臣が参加し「緑の未来イニシアティブ」を発表。先進国のこの会議の優先度は低く、出席したG8の首脳はフランスのみにとどまった。</p>	
	サイドイベント等	<p>6/13-22 サイドイベント</p>  <p>本会議場での公式なサイドイベントだけでも600も開催された。各国パビリオンや、非公式も含めると期間中にリオの市内で約3000ものイベントが開催された。本会議だけでなく、一般の人を巻き込んだ議論も持続可能な社会を作っていく重要な要素。</p>	<p>6/15-18 企業の持続可能性フォーラム Corporate Sustainability Forum</p>  <p>約2700人が参加し、企業の環境に関する会議としては史上最大。この他にも会議が行われ、自然資本宣言など、企業の自主的な取り組みも多く始まった。</p>	<p>6/17-19 先住民サミット KARI-OCA</p>  <p>南米を中心に世界各国から先住民の人が集まってサミットが開催された。</p>

■日本のNGOの活動

「リオ+20 地球サミットNGO連絡会」を2011年6月に設置（事務局 環境パートナーシップ会議（EPC））。

環境・開発等に関する65NPOが参加。

- ・政府・NGO意見交換会（5回）・外務政務官、環境大臣との意見交換
- ・記者向けブリーフィング
- ・NGO提言書要約集作成
- ・勉強会・セミナー（全国各地・約30回）

日本政府（環境省）が「リオ+20 国内準備委員会」を設置2011年7月に設置（事務局 三菱総研）。

マルチステイクホルダー約40名が委員として参加。提言書を作成。

■NGOの活動の成果と課題

成果

- ・ロビーによって成果文章が変化。
特に、ユースのロビーによる将来世代に関する文言。
日本政府も、当初反対の立場であったがNGOとの意見交換を通じて賛成の立場へ。
- ・「20年前、NGOは雑音でしかなかった。今は、全く違う。」（メキシコ交渉官）
「NGOの活動も含め交渉だと認識」（日本外務省 交渉官）
- ・メディアでのNGOの視点の掲載。

課題

- ・獲得目標の明確な設定ができていたのか？
- ・NGOの中でもNYベースの会合となってしまった。アジア・日本の参加は非常に低い。
- ・本当に声が反映されるべき人は？
- ・会議場の中にいる人と、外にいる人にギャップ。市民への広がり。
- ・成果文書にこだわり過ぎた。— 国連が機能しなくても市民社会が社会を変えればよい。

IV今後に向けて・日本への期待

- ・SDGs：あと2年で地球の50年を左右する目標づくりを行う。ステイクホルダーも実践を担っていく。
- ・持続可能な開発のためのハイレベル政治フォーラムの設置などに、市民参加をより推進できるように。
ex) 国家は10番目のMGになるか？
- ・ゼロドラフトへの提案には「Japan」が非常に多く言及された。震災後、エネルギー、持続可能性の岐路に立つ日本の取り組みに注目が集まっていた。
- ・日本・アジアの意見を伝えていく役割。

パネルディスカッション

<パネリスト> 荒木 光彌・李^リ 妍^{ヤン}焱・北橋 みどり（敬称略 50音順）



今回のパネルディスカッションでは、これまで清里ミーティングの場でアジアのことを語る機会がこれまでなかったため、リオ会議開催を契機に今回ディスカッションの場を設けることとした。

【流れ】

最初にコーディネーターの岡島から進め方の説明を行った。その後、今回のパネリスト、李女史、荒木氏、それぞれの活動の話、これからの日本に何が必要なのかなど話を10分程伺い、北橋女史からの話につき、2分ずつの補足のお話を伺った後、会場からの意見と質問を募り、多くの声が寄せられる場となった。

【登壇者の話】

○李 妍焱女史

中国半分、日本半分の視点からの中国の環境教育について、そして日中で環境教育についてどのように手を携えてやっていくことができるのかという話をしていただいた。

李女史は、最初に女史と日本の関係について語った。日本と出会った10歳の時、当時の主席は胡耀邦であり、中国全体が現代化の動きの中で日本を目標にしていた時代であった。11歳から外国語学校という特殊な全寮制の学校に入り日本語学び、現在まで日本と付き合い続け、20歳には日本から来ていた青年交流団の現在の夫となる人と出会い、大学卒業後には日本に留学をした。そして、30歳程で今の職業と出会い、社会学で社会学科を教えた。38、39歳は、CSネット（日中社会市民ネットワーク）という団体を始めた年であった。CSネットを始めるまでの30数年間は、自分自身が欲しいもの

を求め、生きてきたが、40歳近くなり自分に何ができるのかということを考え、自分にできることをし、貢献していこうという生き方に出会えたと語った。

現在、李女史は、11歳の時から日本と付き合い続け、日常生活からも30年間日中の相互理解を日々重ねて来られた経験と視点を踏まえ、環境教育について話した。

中国の環境教育の歴史は30年あるという風にされており、現在は歴史的に全国環境保護会議というものが、定期的に30年間に7回開催されてきている。環境教育に関しての一番最近の指針では、全国環境青年教育行動綱領という新しいものがあり、2011年から2015年までの計画、あるいは方針というものが示されている。環境教育に関しての非常に新しい動きとして、全国的な法律はないが、天津市、それから福建省の廈門市など、都市レベルで環境教育条例というものを地方として出して行こうという動きがある。李女史から見た中国の環境教育の特徴をおおまかに言うと次の2点であるという。

1点目は、非常に計画的にビジョンを明確に持ち、戦略と辿るべき道筋もきちんと示した上で、政府が強力で主導しているものであるということである。ただし、具体的な実践やモデル作りに関しては、政府側が民間の参加を呼び掛けている傾向も見られている。また、その民間による工夫や知恵を還元することで、具体的な実践を開発し、政府が示した方向に向かい、具体的に効果的なやり方を提案して欲しいという部分が各所で見られるため、中国の環境教育に携わるNGOが立ち会う場面や活躍できる場面が多く出てきているのではないかと考えられている。

2点目は、環境教育の方法の主要なものが宣伝と教育であり、体験が非常に弱いという点であるという。日本では、体験型が最近の主流となってきたが、中国では宣伝と教育はどちらかといえば、道徳教育とリンクされた形で国民に対して行われている。それと同時に、教育においては特に専門的な人材、例えば大学で環境関連の専門学部を設ける、大学院以上の人材を育てる、あるいは共産党幹部の学校において環境に関する体験的な講座を設ける等、このような教育面に力を入れていることが顕著に見られる。最近の国民を対象にした環境教育の新たな動きとしては、知識を競い、賞、コンテスト、クイズ番組のような形式で行われていることが多い。また、〇〇モデルというようにブランド化をしていきたいという傾向も多く見られ、非常に知識重視イベント型でブランド志向が見られるという。

最後は、環境教育において日中が一緒に実施していくことに関し、李女史が特に重要と考えることを3点程挙げてお話しいただいた。

1点目は、NGO、環境教育というのは欧米型だけではなく、アジア型、東アジア型、あるいは日本型があって当然であるということである。女史自身がそのスタンスで市民社会の研究を始めたのは99年の東北大学の大学院時代であった。当時はNPO法が出来たばかりであり、日本は欧米に大半の目を向けており、「あれはNPO先進国」、「日本は後進国」、「先進的なモデルを勉強しなければならない」、「先進的な概念を勉強しなければならない」という姿勢であった。それに対し違和感があり、NPOも環境教育も、その土、その風土、その水でしかできない実践であると考えられた。もちろん、そこにはグローバルなレベルで非常に普遍的な意味での高い知識、あるいはモデルもあるが、何より先に自分たちの足元の土壌についてきちんと認識しておくべきだと考え、先進、後進軸の打破を掲げ、日本と中国独自のNPOの展開の可能性を探ってきた。

この1点目の中でも、李女史が岡島（JEEF理事）の話を受け、更に、日中が協同することに関し強調したことの1つ目は、日本の開発途上国の支援に関する視点も重要であるが、支援の相手、その現地をいかに学ぶかということである。JICAの場合、それから国際開発に携わる人にとっては常識とされているかもしれないが、学ぶことはとても難しい。特に先進国の国民であり、すでに多くの知識や教養のある人間として後進国とされる所に行き、学びの姿勢を持ち続けるというのは大変なことである。しかし、日本とアジアの国が付き合っていく中で相手を学ぶことを今、日本が真面目にやらなければならないことであると述べた。

2つ目は、学ぶのは良いが、相手に流されてはいけないということであった。日本は、学んだ上で自分たちの優位性はどこにあるのかを戦略的に把握しておくべきであると述べた。このことに関しては欧米の市民社会、あるいは財団とかはさすがははっきりとした戦略を持っている。欧米は、いち早く中国大陸に入り、今の中国のNGOの使っている草の根コンセプトや考え方、思考回路、方法論等、色々なものは全て欧米の影響を受けている。そこには欧米の戦略があり、自分たちの優位性はどこにあるのかをしっかりと把握していたということが言える。例えば、チベットの女性たちが作るショールはとても素敵だが、地域の女性だけでは質の高いものは作れず、販売のルートもない。そこで、外部から入った人たちが生産の品質管理、技術、デザイン、そして販路などに関して優位性を持ち、しかし、押し付けるのではなく、現場をきちんと学び、そこに何があるのか、どうゆう強みがあるのかをきちんと踏まえた上で事業展開をしている。このようなフェアトレードをし、チベットの女性たちは生活を支えられたりしている。環境教育も同様のことが言えるが、日本の持っている優位性は何かということを一つ一つの団体で考えるのは大変である。しかし、日本環境教育フォーラム（以下、JEEF）、あるいは清里ミーティングのようなネットワークであれば考える

ことが可能である。自分たちが世界に向けて誇れるものは何か、優位性は何かということをもっときちんと議論していくべきである。李女史の目には日本の実践力はすばらしく、民間の実践の蓄積もとてもきめ細かきであり、そして効果的に地道なものと映っており、これは何よりの宝であると述べた。

2点目の重要な点は“人”である。この分野の方々は魅力的であるということで、魅力的な人々の人柄などを生み出しているのも日本の強みである。

3点目はより国家の枠組みを越えることができるような、共有可能な未来をどのように作っていくのかという方向で野望をもっと大きく持つということであった。アジアを見ると、日本は小さな国である。しかし、小さな国なりにアジアの中でも一歩先に多くの取り組みを行ってきた実績があり、数十年の蓄積がある。それを携えて、より欲望を大きく持ち我々が共有できる未来とは何か、どのようにすれば国家という枠組みを越えることができるのかという、人と人との連携の部分で、より戦略的に日本はコーディネートしていくはずである。日本、そして韓国と中国は環境教育において多くの枠組みで話し合っているが、韓国も日本も国家戦略が丸出しであり、かっちりとした国家の枠組みの中で考えている。しかし、環境に関しては確実に国家の枠組みを越えたものであり、国家の枠組みを越えるためにはどのように人と人が繋がって行き、そして様々な国の人たちの考え方と心意気にどのように影響を与えるのかということが大切である。最終的には、国と国ではなく、人と人であり、付き合い方は体温が感じられる顔と顔である。CSネットはJICAのプロジェクトとして、JICAの草の根技術支援プロジェクトを根本から変えようという大きな野望を実践している。CSネットでは日本の自然学校の良い部分を中国に伝えて行き、中国式にアレンジし、人材と中国のネットワークを築いていくというプロジェクトを李女史が中心になり、2年10ヶ月掛けJICAに通じた。このようなことは、JICAの草の根技術支援援助というプロジェクトでは初めてであり、ハード面ではなく、人と人、そしてネットワーク同士の繋がりを作ることを実践していくものである。そこで、国家を超え、共有できる未来を日本がコーディネーターとして作り上げていくという役割を是非、日本は担っていくべきだと述べた。



○荒木光彌氏

荒木氏は、東南アジアとの関係が深く、1967年頃から東南アジア各地を回っていた。それらの経験から今回のタイトルである『アジアの一員として、日本が今できること』という話をされた。

環境関連の一番のスタートラインは、1960～1970年代の日本が高度成長を続けている最中であった。従って、日本は海外へ支援を求め、企業は東南アジアへ進出した時代であった。そこで起こった日本にとっての一番初めの問題は南方材、いわゆる森林伐採の問題であった。国内材は色々な意味でコストが高く、海外から伐採して持ってきたラワン材が非常に安価であるため、一時東南アジアのカリマンタン始め、マレーシアのサバ、サラークを含め、大きな乱伐を実

施した。当時の日本企業の方々は「我々は買うだけだ」「伐採するのは地元の人だ」と述べたが、日本人の主張である大量に買うという動向に釣られ、東南アジアの地方の人々、貧しい人々は現金を得るために森林を伐採せざるを得なかった。このような問題の後、延長線上で反省として出てきたのが、植林という問題である。植林を協力しなければならないということが政府の責任として出てきて、民間企業もそれに協調して、一緒になってやって行こうというような動きが出てきた。これが、1つの国際協力の流れである。

もう1つは、食卓に並べられるエビに関するものである。エビはマングローブを伐採し、養殖したものを日本が大量に買い取っている。このことについても「我々は買うだけなので、伐採して養殖をする方も罰するべきだ」という話が挙がったが、やはり消費者として大量に購入し、贅沢をしていることを言及された。そこで、我々自身の反省もあり、地元の人との協調をして行こうということで、現在はマングローブの伐採の跡地にNGO等が入り、日本政府も応援し、マングローブの植林をベトナムの各地で実施している。南方資源の根本にあるのはマングローブであり、海洋のゆりかごとしてそこを中心に海洋資源が生み出されている。

最初の歴史的な流れでは、これらの2つが国際協力開始の大きな動機になっている。そこでマングローブの植林、それと大規模な伐採跡地の植林、造林等々の協力がかかり組織的に行われるようになり、日本の植林技術は世界一ではないかと言われている。

今、中国の湖北省に研究所を造り、行っているのは2000年程前の中国に存在していた非常に強い系統の松の植林について、日本の林野庁の人々が赴き研究をしている。日本の林野庁の研究所から出た専門家の人々は、インドネシア、マレーシアでも活躍している。

このような傍らで、パームオイルに関する非常に残念なことがカリマンタンでは起こっている。パームオイルは自然食として多くの人が大変重視しているが、このパームオイルも森林を伐採して焼畑を行う。広大な古木林を伐採するとそこに泥炭という木が腐って蓄積され、石炭のようにになっているものがある。そこに火が付き、カリマンタンで大変な森林火災があり、シンガポールではみんなマスクをしなければならないという時代があった。当時、この件に対していち早く泥炭防止の技術利用のために日本から数十人向かった。我々日本は消費社会を支えるためにいかに東南アジアの自然を破壊してきたかという認識を持つべきであり、市民社会の責任でもあると荒木氏は考えている。また、これまで企業が対応を行ってきたが、我々の消費動向がそういう傾向を引き起こしているという認識を新たにしていかなければならないとも述べた。これは、国の責任だということで国に任せるだけではないという社会的な運動の一環である状況があった。現在は、日本の政府のやり方もだんだん刺激を受けている。

更に、氏はダムを作るということ为例に、話を展開した。ダムを作るには必ず森林を伐採しなければならない。さらに、森林にいる動物を移動させなければならない。その点も含めて非常にコストがかかるため、それを実行する当該国、東南アジアの国々は、そこまでコストを掛ける必要はないと主張する。しかし、援助する側はそこを何とかしないと援助できないと主張すると、当該国はなるべく安く施工したいと主張する。このような駆け引きの中で、更にインドネシアのケースでは、住民移転の問題も出てくる。住民移転は人権の問題であり、環境問題と人権問題が複雑骨折のように重なり、結果的に話がなくなってしまう可能性があるが、今はどちらかというと人権が勝ち、環境問題が少し下火になっている印象がある。色々なインフラを作るにしろ、今、日本のNGOの方々に、このODAの世界で苦情を呈する方々は人権問題であり、環境問題を言う人はほとんどいないという状態である。その駆け引きでは、現地政府と日本との間の援助する側とされる側との間のコストをめぐる考え方の違いがある。最初の内は地域住民もあまり教育されてお

らず、住民移転に関して意識しなかったが、日本のNGOが入り、意識改革を実施したことで今は住民移転の問題についても苦情を呈するようになってきており、開発が非常にコストのかかるものになってきた。このような駆け引きが世界中で起こっているという事例を紹介した。

その上で、現在、政府や世界中がどのようなこと行おうとしているのかについて話された。現状では、税金で賄う援助や協力というものには限界がきている。EUのように援助をする国々がどの国も非常に疲弊しており、税金では資金を得ることができない。貧しい国々や貧しい人々を助けるということに限界がきている。ミレニアム開発目標の達成は2015年であり、2、3年残しているが、ほとんど必要資金が調達できず、ほとんど頓挫の状態である。最初の段階では、年間およそ500億ドルという見積りがあったが、実質は1000億ドル位が必要であり、現在では毎年およそ500億ドル位が不足している。そこで、アメリカやヨーロッパが考えたことは、PPP (Public, Private, Partnership)、官民連携であった。このPartnershipという部分で官と民が連携し、足りないところを補って行くという大きな流れが世界的に起こっている。アメリカもヨーロッパもみんなその流れで行く。アメリカの場合には、企業のみならず、財団にも巨大財団があり、大学も世界的に大きな大学がある。企業はもちろん大きい、NGOもNPOも非常に大きな組織である。アメリカの場合は官民連携といった時は民の税金の部分が全体で3割とすると、7割は民以外の資金で到達するように連携する。日本の場合を見ると、非常に財団が弱く民間依存になり、民間企業依存になる。日本とアメリカ・ヨーロッパのやり方は異なる。アメリカの1例を用いると官民連携というのは、「日本の企業と官」が、そして「日本の民間のNGOと官」がどう協力するかということで民間のNGOの力を借り、途上国の援助を行っていくというものが今の大きな趨勢である。JICA国際協力機構には、李女史の話にあった草の根的な協力もあるが、もう1つ大きいものでは、官民連携の流れで中小企業も含めた企業が一緒になって仕事をする協力がある。「お金も貸します」、「融資もします」それから「プロジェクトの発起するための基本資金(調査など)のようなお金も出しましょう」というような流れが出てきており、現在宣伝をしている。

BOPビジネスというものがあるが、主に、年間およそ1億ドルが普通のマーケットだが、千ドルから3千ドル位の人たちをターゲットにし、1つの商品を10億個販売するというビジネスである。つまり安く大量に販売する商品をどう開発するかというのが、BPOビジネスの1つの要諦であり、それが今多い実践例の1つである。

また、日本で見られるパターンとしては、民間の投資についても応援し、インフラの整備についても民間の意見を投入するというように、主に民間の意見を導入し、経団連と共同する。このような日本のパターンは、ヨーロッパやアメリカではあまり見られず、企業と一緒に動くというのはあまりなく、企業は企業で勝手に動いている。日本的なパターンには個を巨大とした財団はない。企業集団のものが多く、やり方が極めて日本的である。

以上のように、荒木氏には事例をご紹介いただいた。



【補足の話】

○荒木 光瀨氏 「青年海外環境協力隊の構想について」

岡島からの提案を受け、青年海外環境協力隊の提案について荒木氏に話していただいた。

青年海外協力隊というのは、ラオスから始まった。アフリカでも、アジアでも実績が多くあり、多くの青年たちが行参加している。毎年、2000～3000名は協力隊で海外へ行っている。協力隊のシステムの中で文科省が100名以上の枠組みで高校の教員を派遣している制度があるが、税金を使用し、実施しているので多分の貢献をすべきだと考え、青年海外環境協力隊というものを作ってはどうかということを書いた。内容は、100名～200名位の枠で全世界に教育という切り口で各国の教育省と交渉しながらそれぞれ入っていき、環境教育を行う。日本が応援している学校もあるので、そこにも入っていくことができるというシステムを JICA で作ってはどうかという構が話された。

○北橋 みどり女史

若者のアジアの交流という視点からの気づきをお話いただいた。

アジアで日本の草の根の活動を行っていくことにより、日本側の学びも多くあると考え、事例を紹介する。学びとは、途上国で起きている環境問題が他人事ではなくするというのが1つ大きな学びであると考え。以前、共に環境活動を行っていたフィリピンの友人の家の裏に違法伐採のバナナのプランテーションが出来、洪水で家が流されたという話を聞いた。その友人ははっきりとは言わなかったが、バナナを大量に輸入しているのは日本である。このように、自分たちの生活が途上国で普段目の届かない遠くの国で起きていることが身近に感じられることがある。また、別の時には気候変動 COP のユース会議でキリバスの女の子が「私たちはあなたたち欧米人、先進国の人たちを恨んでいた」と言った。「あなたたちのせいで、私たちの国がなくなるの」「でも、今日会って見たら、若者たちは全然違うということが分かった。一緒に実践していこうね。国がどうあれ、私たちは実践していこうね。」このように一緒に活動していく仲間として見られると、自分たちの学び、成長にも大きく貢献すると考える。そのようなことを実践していくためにどうすることがあれば、アジアの助け合いができるかということを書いた。でも話し合ったことがあった。

まずは、ユース会議のような国際会議など、若者たちが交流する機会を与えて欲しいというのはもちろんのことであるが、それだけでは若者がすぐに活躍することは難しい。やはりこのような活動を普段から、子供の頃から実践的に行っていかない限り、伝えることはできない。そのような意味で、普段多くの方々が行っている環境教育とアジアの貢献というのは繋がってくるのではないかと述べた。

○李 妍焱女史

北橋女史の話に共感した上で、李女史は次のように補足した。日本では日中間のことをよく調べ、勉強しており、清里ミーティングのようなシンポジウムやセミナーなど、その場での議論は盛り上がるが、現場を踏まえながらの本当に人間同士の人間臭い付き合いというのはなかなかする機会がない。そこで現在、李女史たちが試行しているのは、リードプロジェクトというものである。92年以降、世界の7つの国で継続的に持続可能な社会への開発を支えていくその国のリーダーを育てるプログラムである。それを日本では京都大学が中心になってしばらく実施していたが、ロックフェラー財団が手を引いてから日本では自然消滅してしまった。その原因は日本ではどうしても大学生レベルであり、また、ミーティング形式の交流に留まっていたからである。しかし、中国では今もリードプロジェクトが続いている。これは李女史たちがプロデュースしたもので、

しかも、この3年間はずっと来日しており、そこではとにかく日本の現場を踏んでもらうことにし、日本の人格的に魅力的な社会企業家等とじっくり膝を突き合わせて話し合うと共に、多くの時間を取り質問もしてもらおうという形で行っている。

現在の青年海外協力隊というのは政府側としての取り組みなのですが、民間としていかに日本の若者をアジアに、世界に送り出すかという部分において、日本の将来を担うという意味でも非常に重要なことであると述べた。

【補足の話】

○荒木 光瀨氏

荒木氏は中国で関わったことを話した。北京に日中友好環境センターというものがあり、この元のアイデアは、荒木氏から出されたものである。中国に医療面での協力である日中友好病院を1つ作り、日中友好のスポーツ施設も作り、最後には環境の施設を作った。これが日中友好環境センターである。今から20年位前のことであり、中国の中では環境はまだ早いという人もいた。しかし、日本が協力し、中国も先駆的にセンターを作り、人材の養成をやるべきではないかということの問題を提起し、センターの設置に至った。この動きの元となったのは、これより10年程前に上海と大阪市が姉妹都市交流を行っていたが、いつも万歳と乾杯で終わっていた。この姉妹都市交流をさらに意義のあるものにしたいということで、上海の大気汚染がひどかったことを下に、それをどのように予防すべきであるかという調査を行い、対応策を考えた。そこから定点観測の機材始め、定点観測の方法も含め、その頃から中国に協力していた。この経験に基づき、日中友好環境センターを作りそれが今は母体となって、様々な人材育成の研究を行っている。

パネルディスカッション

コメント1. 京エコロジーセンター 岩松 洋氏

日中環境保全センターという話があったが、色々なご縁があり、日中友好環境保全センターの1階と地下に環境学習施設を作る手伝いを4年ほど前から行っている。特に、李先生の話の中で、上げられた2つのポイントはものすごく共感できるポイントであった。自分自身もまさか中国に何度も行き、このようなプロジェクトに関わるということは全く想像していなかった。

要は、お互いのことをきちんと学ぶべきであると思う。ここにはわからないことがたくさんあるので、みなさんも是非色々なところに行き、学ばれることがまず、一番だという風に感じたコメントを述べていただいた。

Q1. 日能研 高木 幹夫氏

李さんが仰った、「国を越えた」という言葉を私たちがどう受け取るのだろうか、ということ強く感じた。どうしたら、国を超えるということを私たちが話し合えるのかということ、改めて荒木さんに、その言葉を私たちが考えるために、何か言葉をいただければと思う。

国を越えて環境を考えるということを私たちがするために、ご経験の中で、「こんな風にアプローチしてみたらどうだろう」「このように考えてみたらどうだろう」ということをいただければと思う。

A1. 荒木氏

基本的には、日本の青年たちがアジアの青年たちと交流する場があまりない。交流したいと思っている人も少ないし、どちらかというところから留学をする人が多い。東南アジアの大学は全て間

口を広げているが、なぜか、欧米志向が強くてそちらへ行ってしまう。そのようなわけで、東南アジアの学生たちと対話するのは東南アジアの中ではなく、実は日本で行っている。日本の中にはいくつかのグループがあり、本当にまじめな東大のグループ、早稲田、慶應のグループがあるが、そのような学生グループが議論を結構行っている。「国を越えて」と言うが、日本の中でも国を越え、多くのアジアの人たちがいるのに、そこでなぜ対話ができないかと思う。アジアまで出かけて行かなくても日本の中にアジアがあるということを申し上げたい。そのことが欠落をしているのではない。

A 2. 岡島 (JEFF 理事)

要するに、若い人たちにもどんどんアジアに行きたくらいということではないか。アメリカ、ヨーロッパの大学には行って、アジアの大学には行かないという傾向がある。就職のこともあるのか？色々なことがあるのだろうが、これからは違う。世の中違うと思うので、むしろ特色のある大学に行って、特色のある経験をした人の方が企業は採るということだと思ふ。今回は企業の方はあまりおられないが、恐らくそういう方向だと思う。

Q 2. 国際自然環境アウトドア専門学校 中山 元喜氏

今、学校で環境教育を学んでいるが、話は欧米のことばかりが入ってくる。本日初めて李先生から中国のことを聞き、なるほどと思った。なぜ、日本には特に欧米のものが入ってきて、アジアや東南アジアのものが入って来ないのか。そこをお聞きしたい。

A 1. 岡島 (JEFF 理事)

環境問題は、公害を中心として欧米と日本はほぼ同時に進んできた、いわゆるブラウン問題であるが、煙や公害部分は日本の方が進んでいる面もあり、公害対策など色々あった。その後、環境教育というものを日本では、公害教育とか反公害教育、それから自然保護教育という形ですべて行われて来た。それが地球環境などの問題で、環境教育とされてきた公害教育から自然保護教育となり、それらが合わさってきて、80年代の後半位から環境教育という名前に大体統一されてきた。その頃も日本の学問は、オリジナリティーのものではなく、「欧米のものをアメリカではこう言っています」、「ヨーロッパではこうやっています」と言っていた人もいた。そのような流れがあった。

その中で環境教育においても欧米の方が進んでいたもので、そういうところを借りてきて、それを少し日本型にアレンジしたりしていた。特に顕著なのが、自然分野などにおいてはアメリカのパッケージプログラムである。ネイチャーゲームも WET も同様に、色々なプログラムをそのまま実施していることが多い。ところが、欧米の哲学はまず一神教であり、そこから立ち上がってきた環境教育のプログラムを我々のようにアニミズムな世界に生きているものがそれをそっくり受け入れると、アレルギーを起こす。そのようなところから、今、そのアレルギーを見直そうと、日本にも日本のしっかりとした哲学、考え方があり、欧米型のものをそこで変圧器にかけて日本型にしていかなければ日本人に合わないだろうということが言われている。しかし、歴史的に公害から自然保護、そして環境教育という流れの中で、お手本はやはり欧米にあったということで、それを勉強した後そのまま入れてしまったということもあり、多少の軋轢が今あるかと思うが基本的にはこのような流れである。

それから、日本国全体の環境教育以外のところでも大体目地からそうである。欧米から習い、欧米に追い付け追い越せ、第2次世界大戦後も同様に、無理をしてやってきた。日本が今までやってきたそのような流れの中に、環境教育もあったということでは

ないかと思う。それを今度は欧米ばかりでなく、アジアからも学び、アジアと色々な交流をした方が良さだろうと思う。まだ、始まったばかりではないかという気がする。

Q 3. NPO 法人越の里山倶楽部 河合 佳代子女史

李先生やみなさんの話しの中で共通していると思うが、相手の立場に立ち相手を学ぶということの必要性と、そのために一緒に活動をするという話しが北橋さんの方からもあったが、そのような一緒に学んだ時の共感性が日本人はかなり強いと思う。理解し、共感し、同じ思いに立つという性質は強いと思う。その後自分たちの優位性をどう見極めるか、そしてその後戦略を立てるという話しがあった。自分の優位性を見出すところまでは行けると思うが、その後どう戦略を立てるか、そしてその戦略を地元の方々、もしかしたら、日本の田舎の問題もそうであり、アジアだけの問題ではなく、国内の問題も含むのかもしれないが、その戦略を立てたものをいかに人に伝えていくか、文化、歴史等が違う人たちに、それをいかにアレルギーを持たせずに伝えていくかという点において、何かヒントになるものがあつたら教えていただきたい。

A. 李女史

一言では答えられない問題だが、民間からの戦略の立て方というのを民間のネットワークがいかに、その必要性を共有して、議論を積み重ねて行くかだと思ふ。先の話にもあった通り、特に戦後において、日本は経済大国というアイデンティティしか持ち得なかったもので、追いつけ追い越せの時代はそれで良かった。しかし、追いついてから何がしたかったのかということは政府もわからなかったし、民間もきちんと考えて来なかったと思ふ。つまり、みなさんが望む世界とは何かということである。環境教育とは非常にその問題を考えるのに適している分野であり、フロンティアに成り得ると思ふ。次の日本ではなく、次の世界を考える人間としてのアイデンティティをどこに探っていくべきかということ、そのような出発点から経済大国にとって代わるような、日本の次のアイデンティティを私たちが作って行く方向で民間のネットワークが中心になり、このような会議を積み重ねる度に成果をきちんと積み重ねていくということが大事だと思ふ。

Q 4. 深圳市環境保護宣伝教育情報センター人居环境委員会 孫 敬峰氏

中国の南方、深圳市という美しい町からきた。今回初めての来日である。日本に来てまず感じたのは、良好なエコの環境が非常に整然としているということであった。今回フォーラムに参加させていただき、一番興味があるのが日本で一般庶民の方に対する環境教育でどのような成果を収めたか、一般の市民の方のように教育してきたのかということを知りたい。

今、我が中国では、小学生、中学生から環境教育を行っている。先程、李先生からも話されたが、天津市の方では法律を作り、そのような環境を作っている。私個人的にも日中の協力、日中合作に関して一番大事な点は日中両国が協力し環境教育を進めるということ。これが一番大事なことだと思っている。

A 岡島

日中で一緒にやっていくことが大切であるという部分に異論はない。

最初の質問に関して、日本は公害の頃からすごい苦労をした。水俣病も四日市のぜんそくも色々な公害があつて、東京から一日も富士山が見えないような年が何年も続いた。国民全体が公害について勉強をした。そして、それに対して反公害運動というものもあつたし、学校でも色々教えた。そのような1つの歴史があり、それと並行

して自然保護に対する問題もずいぶん国民の間で議論があった。白神山、石垣島の白保など、色々なところで国民的な論争が起こり、それらを通じて日本人は公害、自然保護というようなことを全体的に学習してきたと思う。日本人は30年かけて国民的に学習し、企業も自治体も行政も色々な準備をし、少しずつ解決してきた。その30年間の歴史の後に地球環境問題というものが出てきた。途上国、特に中国などは公害と自然保護と地球環境問題が同時にやってきているので、これは大変なことである。日本人だつたらとても対処できない。日本では、公害、自然保護、そして1980年の後半からメディアを中心として地球関係の大変な報道があり、92年の地球サミットにおいてもすごい報道があった。新聞はずっとお正月から地球環境の連載をし、6月のテレビはほとんど朝から晩まで地球サミットの報道をしていた。それまで温暖化やオゾン層などは誰も知らなかったが、洪水のような報道で小学生でも温暖化ということを知るようになって、タクシーの運転手も「暑いですね。温暖化ですかね」などと言うようになった。非常に知識を得るようになった。ベースは学校教育、メディア、そして社会の一般的な関心ということであった。日本は30年かけてのそういう素地があり、国民的に理解も進んできた上でやっているのだから、中国はこれから大変であると思う。中国と提携する際には、そのような過去の経験を失敗も含めて、共有しながら大変厳しい、公害、自然保護、地球環境問題をいっしょくたにしているところを切り抜け、中国はなおかつ経済成長もしなければいけない。内陸部の貧しい人のためにも尽力をしなければいけない。大変厳しい課題があるかと思うが、我々の経験と併せて、一緒に行っていけばお互いに良いと思う。日本と中国は一蓮托生の国である。日本人にとって中国の環境破壊は他人事ではなく、一緒にやらなければいけない。また日本の環境破壊も中国にとって他人事ではないので、これは逃れられない宿命だと思う。是非、一緒にやって行きたい。

2 日目

3.5 時間ワークショップ

【午前の部】

1. 自然体験型環境教育入門講座
2. 自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～
3. 実施無し
4. プーさんの森をデザインしよう！
5. 考えよう！伝えよう！森の“いのち”の知恵と力
6. 食から考える価値と暮らし
7. ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう！
8. 農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～
9. 一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり
10. 「住み開き」を考えよう ～身近に環境教育の場をつくる～
11. 「都市と自然の融合 ～両方見て、初めて見える環境教育！～」
12. 木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①

【午後の部】

13. 地域に根ざすということについて PBE への招待
14. 田舎で生きる！ライフモデル作りワークショップ
15. パタゴニアから学ぶ！持続可能な働き方と歩み方
16. 環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～
17. 都市型環境教育 小学生向け紫外線プログラム体験
18. 文学から見た農的暮らしの可能性
19. 理想のシゴト？自然学校職員の本音と未来像
20. 身近な環境の総合的“明察”…内なる「マイ暦」を作ろう！
21. 農が X を助け、X が農を助ける～半農半 NPO でいこう～
22. エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ
23. 森で教える国語・算数・理科・社会をつくっちゃおう！
24. 木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向けて～②

(実施者名、敬称略)

自然体験型環境教育入門講座

実施者:川嶋 直(財団法人キープ協会)



【概要】

1. 緊張を解きお互いを知り合う時間 (アイスブレイク)
2. 森の中での自然体験の時間
3. KP法(紙芝居プレゼンテーション法)での講義

講師である川嶋氏からの自己紹介があった後、参加者14名でアイスブレイクを行い、森の中へ移動した。森の中では、7つの自然体験を行った。その後、室内に戻り、KP法で環境教育についてレクチャーを受けた。

【実施内容】

1. 緊張を解きお互いを知り合う時間 (アイスブレイク)

「デートゲーム」を行った。参加者同士で月～金曜日それぞれのデートのポイントをとり、順番にデートをしていきながらお互いの関係を築いていく。デートでは、A4の紙を4つに分割したメモを元に約3分ずつで会話をしていく。メモ内容は①自分を表すキーワード(いくつでも)②辛い時、苦しい時、思い出すとホッとする景色(絵で表現)③このワークショップを選んだ理由④今の気分を一言でであった。

2. 森の中での自然体験の時間

「よく見ること・視点を変えること」をテーマに森の中で6つの自然体験アクティビティを行った。アクティビティは7つで、いずれも「よく見る・視点を変える」きっかけを与えてくれるアクティビティであった。以下に、それぞれを紹介していく。

①人間まぢがいさがし

「よく見ること」の導入として、講師の川嶋氏自身を観察してまぢがいさがしを行った。数秒間、川嶋氏を観察した後目を閉じ、再び開いた時どこが以前と異なるか当てた。

②ポークピッツが見えますか?

「視点を変える」導入のアクティビティであった。自分の目の前に指をかざし、視点を指から遠くの景色に移動させることで、目の錯覚で指がポークピッツ(小さなソーセージ)に見えるというもの。

③はっぱじゃんけん

始めに各自で落ち葉を集め、それを手札としてはっぱの特徴を利

用して2人1組でじゃんけんをするというものである。じゃんけんをする前に「赤い色」「やわらかいもの」などお題が与えられ、「はっぱじゃんけん、じゃんけんぽん!」という合図でお互いの葉っぱを出し合い、よりお題に近い葉っぱが勝利となる。敗者は勝者に葉っぱを渡し、アイコは葉っぱを交換。相手を変えながら何回もじゃんけん。

④スキヤキハイク

アクティビティ名は、坂本九のヒット曲「上を向いて歩こう」の英名タイトルから名付けられた「スキヤキハイク」。小さな鏡1枚を一人一人持ち、小さな鏡を空に向け、鼻をつけて鏡をのぞき込み、鏡の角度を変えながら歩く。下を向いているのに、地面の上に木々と青空がきれいに映り込み、空にぶら下がったような感覚になるなど、不思議で新鮮な世界に出会うことができた。

⑤森の万華鏡

二人組になり先の鏡をガムテープで貼りあわせ、森の万華鏡づくりを体験した。参加者は森で拾った材料を組み合わせ、二枚の鏡の間に材料を配置し、森の万華鏡を作成した。クリスマスイメージした作品、木の実をふんだんに使った作品など、参加者同士森の芸術を楽しんでいた様子であった。

⑥めだまっち

森の中にある自然物に目玉のシールを貼り、「森の友だち」をみつけた。よく観察することで、普段は気づかない自然の表情を発見した。ひょっとこのような顔、ピノキオのような顔、思わず笑ってしまう作品が多くできた。

⑦一筆入魂

「よく見ること・視点をかえること」を意識しながら行った森の中でのアクティビティを振り返り、感じたことを1つの漢字で表現した。既存の漢字のほか、オリジナルのものを作るのもOKで、森に入ることによって多くのものを見ることができた等、参加者は森の中から様々なことを感じ、発見した様子であった。

3. KP法での講義

森から帰ってきた後、KP法で環境教育についてレクチャーがあった。

●「伝える」ということは、言っただけでは伝わらない。「言ったら伝わる」は伝える側の傲慢であり、伝えるためのあらゆる工夫が必要である。学ぶ側からは「やったこと」はわかる、「発見したこと」は出来る。伝える側からは「やらせたこと」はわかってもらえる、「発見してもらったこと」は身に付く、すなわち“体験”と“発見”が大切である。

●教育とは教え込むことではなく引き出すことだ。個人の主体性を養いたい環境教育だからこそ引き出す教育が大切だ。

●環境教育には大きな2つの誤解がある。言ったら伝わるという誤解と知ったら行動するという誤解だ。

自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～

実施者：山田俊行(安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター)、若林千賀子(若林環境教育事務所)、
林田悦弘(公益社団法人日本環境教育フォーラム)、萩原ナバ裕作(岐阜県立森林文化アカデミー)、
永井将史(国際自然環境アウトドア専門学校)



【概要】

JEEF の自然学校指導者養成講座、CONE の指導者養成制度、全国体験活動指導者認定委員会の指導者養成制度、専門学校などで行われている人材養成カリキュラムなどの情報を元に、各組織で人材養成に携わっている人事担当者と自然学校業界の人材育成に興味を持つ参加者が集まり、率直な意見交換や質疑応答を行った。

【内容】

●イントロダクション

山田氏のファシリテーションの下、WS は始まった。まずは実施者4名から参加者に向けて、各所属組織において求めている人材やどのような人材を育成したいと考えているかについて、自己紹介を兼ねて話された。社会変革のできる人、ゴールに向けたプロセスを考えられる人、自然産業界で活躍できる人、人と自然をつなぐプロといった回答が挙げられた。

●各カリキュラムの紹介

〈国際自然環境アウトドア専門学校〉

新潟県妙高市の持つ自然を活かし、持続可能な社会づくりに貢献する専門性と人間性を備えた人材育成を行う。カリキュラムは最大60%以上をフィールドワークにした実習授業である。「自然環境保全」「自然の中での教育・子育て」「山岳レクリエーション」「健康・スポーツ」の4つの領域が設けられ、プロの育成の場となっている。人数に遇わせて教員が就職をバックアップ。

〈岐阜県立森林文化アカデミー〉

岐阜県の森林環境の下、ものづくりから森と木の活用を通して自然の循環と一体になった持続可能な社会を築くことを掲げている。基本的に大学卒業生を対象とし、毎年20名程募集。学生の年齢層は50～60代が多い。社会との接点を持ち、地域に密着した活動を行っている。また森林に関係する地域の問題に対してプロジェクトを立ち上げ、地域に求められる活動を探る。

〈CONE〉

自然体験活動普及のためのインストラクターやコーディネーターを育成し推進する活動に取り組むネットワーク型のNPO。今年度で12年目を迎え、現在指導者は約25000名に上る。大学の単位

との互換性を確保するため、カリキュラムは全て統一され、養成講座と実習の両方の取得が求められる。また、養成講座修了後には認定試験を実施し、実習では自然体験活動の指導的経験を積んだ上で履修表を提出する仕組みになっている。

〈自然学校指導者養成講座〉

各種自然学校において即戦力として実践的に力を発揮できる指導者を養成する講座であり、1999年度より開始され、現在第13期講座を実施中。約10ヶ月のカリキュラムの習得を経て「自然学校指導者」として認定される。各回20歳以上の20名を定員とし、現在までの修了生は115名。

●第13期自然学校指導者養成講座の受講生に一問一答

WSの参加者で講座の受講生であり、4月よりホールアースにて研修中の古川誠さんに、実施者・参加者からの質問に答える時間。

『満足度は?』→85%。業界を知らずに入り、初めて自分で一歩踏み出した感覚。自分の努力の不足分を-15%。『一番良かったカリキュラムは?』→JTの資格の取得!一番良い現場を見ることができた。『バックボーンは?』→警察官を3年経て受講。『現場から帰ってからの課題は?』→臨機応変に動ける能力の取得。『社会人時代の臨機応変さはないのか?』→当時は言われるがままに動いていた。『新たにカリキュラムを加えるとしたら?』→海外の様子も探れるもの。『様々な養成講座がある中でなぜこのコースを選択したのか?』→書籍「今地方で生きる」で知り、説明会をUstreamで見た。

●参加者から実施者への質問

『体制づくりをしていくにあたり、ヒントは?』→まずはリスクマネジメント。技術や知識は少しずつ改革。『生活があまり楽ではない業界になぜみんな入ろうと思ったのか?』→自分の生活を確約させ、社会変革に携わりたいと思った。『システムがあったところとなかったところの人はどのように違うのか?』→自然学校をやるのに資格はいらない。ミッションとパッションを試される。

●主催者から参加者への質問(清里ミーティングや本WSへの参加者の参加動機)

『卒業後の進路にNPOや自然学校を考えているため、現状を知りたい(修士2年)』『ベトナムでの環境教育カリキュラムを考えるきっかけにしたい(省庁職員)』『実施中の水育を継続するためのスキルや資格・指標等のヒントを得たい』『欲しい人材とはどのような人か知りたい』『学生の就職活動で自然学校という選択肢を広げたい。自ら起業する開拓魂を知りたい。(大学教授)』

●主催者からのまとめ

カリキュラムはあくまできっかけであり、全てではない。マニュアルをどう生かしていくかが人材育成で一番大切な点であると考えている。

プーさんの森をデザインしよう！

実施者：佐藤敬一（東京農工大学） 平良木茉梨恵（東京農工大学佐藤研究室）
大石智啓（東京農工大学環境資源科学科）



【概要】

本ワークショップでは、Project Learning Tree (PLT) という森林環境教育の実践的なプログラムとして、森林の多様な利用法を理解し実際に森林計画を立てるといったプログラムを行った。日本における森林環境教育はまだ発展段階であり、日本版プログラムの考案と検討が必要とされている。すでに学校教育の現場で実施したというプログラムを紹介し、まずは実際に参加者に体験してもらった。内容としては、森林管理には適正なマネジメントが必要であるということや、森林には多様な利用のされ方があることをグループワークを通して理解する。そして森林利用に基づき実際に森林計画を立てるといったものである。最後に、現状における課題や今後小学校等でのようにして実施していくかについて話し合った。

【内容】

林業を持続可能なものとするためには、森林の適切な管理（マネジメント）が必要である。まず森林がもたらす恵みと森林の多様な利用法について理解し、プーさんの森を題材にしたグループワークが行われた。

『プーさんの森をデザインしよう』

ウィーニー・ザ・プーは「住民が楽しく暮らせる自然豊かな明るい町」を公約にしてプータウンの町長に当選。プーさんは400エーカー（約160ヘクタール）の土地を持っているが、プータウンには土地利用計画がまだ設定されておらず、プーさんの森の利用法を検討しなければならない。そこで、町に提出された3つの提案についてグループとしてどの提案を選ぶのか、あるいは妥協点を探るか、代替案を提示するかについて話し合った。その際に次の6つの点について検討することとなった。

- 1) 提案された土地利用がどのような事実に基づいているか。
- 2) 提案の中で、どのような意見が提示されているか。
- 3) 提案を受け入れることの利点は何か。
- 4) マイナスの影響は何か。(ex. 町の出費)
- 5) 最も利益を得る、または損害を被るのはだれか。
- 6) 変更点はあるか

提案1（イーヨー）

プータウンは「プーさん」の森の所有権を保持し、自然保護地域

として管理を行う。町はプータウンの住民が楽しむことができるようハイキングコースを整備し、維持管理を行う。

提案2（ピグレット）

プータウンはプーさんの森をピグレット Tree Farm 社（木の農場）に売却し、この森を多目的に利用するための経営を行う。シルビカルチャー（Silviculture） Tree Farm 社のような森林経営者が行う、造林・育林のこと。森林の構成、構造、成長を管理することをいう。具体的な方法としては次の5つである。

- ①皆伐システム…林分（樹種の構成、条件、樹齢の分布などが以通っている木々のかたまり）のすべての木々を同時収穫。樹齢のそろった林分を新たに育成することができる。
- ②種木システム…成熟した林分の樹木を伐採する際、それぞれの林分に種子をつける木を何本か残す方法。
- ③複層林（シェルター林）システム…成熟した林分を何年かにわたって部分的に伐採すること。
- ④一本択伐システム…異年齢の林分を創りだし、維持するための方法。
- ⑤グループ択伐システム…個別の木ではなく、小さなグループでの収穫のこと。一本あるいはグループ択伐システムのいずれにおいても、樹齢、等級、大きさのバランスを保つためには頻繁な伐採が必要となる。

提案3（ティガー）

プータウンは大型ショッピングモールと残りの土地に「森林の特徴」を残した住宅地を供給することを目的としてこの森をティガーの森開発会社に売却すべきである。

それぞれの提案について検討し合い、各グループで決まった森林計画の方向性を元に実際に森林計画を作成した。計画に取り入れることができる森林活用の方法は野生生物の保護地区、トレイル、キャンプ地、ハンティング、フィッシング、木材生産である。活用方法によって与える影響は異なるため、ビジターの喜びや楽しみと木々や野生生物、収入と支出等のベストバランスを見つけたことが目指される。

【まとめ】

本ワークショップはまだあまり知られていない PLT のようなプログラムについて参加者たちに体験を通じて理解してもらった良い機会となった。また、体験することによって見えてきた課題についても議論が交わされた。すでに学校教育の現場でプログラムを実施しているということだが、実際のところ日本で実施されている例はまだあまりない。そのような現状をふまえての課題と普及のためにはどのようにしていったら良いかについての話し合いがなされ、今後日本における PLT の発展のための積極的な情報交換の場となった。

考えよう！伝えよう！森の“いのち”の知恵と力

実施者：原田敬子（トヨタの森）、原田秋男（トヨタの森）、川田奈穂子（トヨタの森）



【概要】

本ワークショップは、愛知県トヨタの森にて実施されている、プロジェクト・ワイルドを基にした「どんぐりはつらいよお〜」というアクティビティを中心に行われた。生きものが生き残るために直面する問題について考えるアクティビティの体験、意見交換、グループワーク、最終的には各自が一つの生きものを選び、“〇〇はつらいよ”プログラムを作成するという形式だった。参加者それぞれのバックグラウンドを生かした、相互性に富んだ内容のワークショップだった。

【内容】

●「どんぐりはつらいよお〜」体験

プロジェクト・ワイルド「渡りはつらいよ」という、渡り鳥の事情について学ぶアクティビティを基に作成された、「どんぐりはつらいよお〜」を体験した。屋外で行われたこのアクティビティは、さまざまな状況設定のどんぐりのボードを1-3人で担当し、どのようにすればどんぐりが生き残るかを考えるものだった。正解は存在せず、参加者がひらめきを大事にしつつ考えることを重視するのがポイントで、ファシリテーターが「ラッキー」「つらいよお〜」「でもね..」などの切り返しをタイミングよく入れつつ進めていった。状況設定の例としては、「ヤマガラがくちばしでつついたどんぐり」「ねずみが土の中に隠したどんぐり」「アスファルトの上に落ちたどんぐり」などがあり、自らのバックグラウンドから生み出される、どうにかしてどんぐりが根付き、生き残るためのユニークな発想が次々と飛び出していた。また、どんぐりだけでなく、たんぽぽバージョンも行い、終始言葉のキャッチボールを重視した、なごやかな雰囲気でのアクティビティ体験だった。

●「〇〇はつらいよ」作成

室内に移ると、4人ずつ2チームにわかれ、「〇〇はつらいよ」を作成し発表した。1チームは「カブトムシはつらいよ」もう一つのチームは「ヤゴはつらいよ」というテーマのもと、各チームファシリテーターを1人選び実施した。「農薬によりえさが激減した」

「住んでいる池にブラックバスを放された」「護岸工事が始まった」など、新たな問題に触れるきっかけとなるような設定もあり、それぞれの専門性・得意分野を生かし、興味や知識を広げられる工夫が盛り込まれていた。また、ストーリーをスムーズにつなげられるようにタイミングよく切り返しを入れる難しさや、その場に応じて話を広げていくファシリテーターの存在の大切さも同時に実感できた。

チームごとのプログラム作成の後は、各個人が、それぞれのフィールドに合う作品を作成し、紹介し合った。農家の多く残る千葉のフィールドに合うような「曲がったキュウリはつらいよ」、人間の観察のマナーや、森林伐採などへの気づきを促す要素を取り入れた「ムササビはつらいよ」、人間の営みが魚の生活を脅かしている事に改めて気づかせる内容の「運河の魚はつらいよ」等、個性溢れる8つの作品が完成した。各参加者は、フィールドに合う身近なもので、様々な話につながるようにバリエーションのある完成品を持ち帰ることができた。

【まとめ】

参加者それぞれのフィールドが異なる故の発想の違い・着目点の違いがとても面白く、改めてたくさんの生きものが日々一生懸命生きているということを全員で再確認した。「命は残った生きものにパトタッチされ、つながっている」というメッセージの込められた、“生きもの目線や生きもののキモチ”になることで初めて生まれる「気づき」に溢れたワークショップだった。



食から考える価値と暮らし

実施者: 吉田 峻平 (どろんこ村 小笠原農園)



【概要】

私達が生きるために必要不可欠な衣食住。この中で特に「食」に注目し、理想の暮らしや生き方について考えることが本ワークショップの目的である。3~4名で1グループを作り、計4グループに分かれて行った。グループごとに「理想の暮らし」を考えSWOT分析を行う、という流れで条件を変え、2回実施。住む場所も家族環境も育ってきた過程も違う私達が、何を理想の暮らしと考えるのか。吉田さんの研修先であるどろんこ村のお話も交え、ディスカッションを進めた。

【内容】

1. 自己紹介

2~3人1組で自己紹介をした。名前や所属、ワークショップへの参加理由、今興味があることなどを15分程で話した。その後自己紹介し合ったパートナーのことを全員で紹介する時間もあり、必要に応じてメモを取りながら話が弾んでいた。

2. ディスカッション①

自分が考える「理想の暮らし」について、各グループで意見を出す。適宜休憩を取りつつ25分程時間を取り、紙に書き出し、ディスカッションを実施。一言に「暮らし」といってもより自己完結に近い暮らしもあれば、地域を巻き込んだものもある。最初に、家族構成や地域環境など、前提条件を定めず暮らしについて考えた。自由な雰囲気での話し合いが進み、「理想の暮らし=豊かな食生活」「=地産地消」など、「食」に関連付けた解答が多かった。

3. SWOT分析①

Strength 強み	Opportunity 機会
Weakness 弱み	Threat 脅威

各グループで出た「理想の暮らし」について、SWOT分析を行う。SWOT分析とは目標達成のために大切な内外の要因を特定する方

法である。内的環境の強みと弱み、外的環境の機会と脅威の4つの枠に分け、考えられる事柄を当てはめる。今回は、理想の暮らしをする中でのメリットとデメリット、またその暮らしをする中で、外部へ与える影響について各グループ書き出す。

「普段は都会的な暮らしをし、休日などの息抜きに自然の中に出かける」ことを理想としたグループの分析では、内外的メリットとして寂しくない・助け合いができる・利便性・雇用の充実等を挙げた。逆にデメリットとしては、コスト高・ストレス・災害の不安・エネルギー問題等が挙げられた。

4. ディスカッション②とSWOT分析②

同じく「理想の暮らし」について、条件を踏まえて考えた。住む場所を北海道・東京・島・外国と指定し、任意で4つの班に分かれる。全体の共通条件は、家族構成を父・母・中学生・小学生とし、ある程度ディスカッションが進んだところでSWOT分析を行った。始めとは違うメンバーでの班構成から多少緊張感もあったが、すぐに和気藹々とした中で話し合いが進んだ。住む場所を外国で考えたグループは、メリットに視野が広がり絆が深まる・異文化間のコミュニケーションが取れる・日本(母国)を見直すきっかけとなる等と挙げ、デメリットでは、健康や安全面での不安・宗教・犯罪・経済的余裕等を挙げた。

5. まとめ

吉田氏の研修先のどろんこ村では自給自足の暮らしをしながら、小学生から大学生の受け入れをしている。その中で、鶏の解体や草取りをするのだが、果たしてその鶏や植物のいのちの重さは同じなのだろうか。私達が生きていく上で重要とされる「衣食住」。その中で一番大事なものを選択する場合に「食」だと即答する参加者が多かった。しかし、生きていく上で重要なのは「衣食住」のバランスだという結論に至る。今回の「理想の暮らし」を考える上でのSWOT分析の目的はそこにあり、分析を行うとメリットデメリットが見えてくる。自分の生き方も同じで、誰しも頭の中で描き折り合いをつけて毎日生活している。広い視野を持ち、バランスを取っていくことが大事であり、それが自分の価値観になるのだと吉田さんは言う。鶏の解体であっても、いのちの大切さを考える場だけでなく、世の中にはそれを職業にしている人がいるという現実を知ってもらう狙いがある。おいしく調理された食べ物がある中で、牛や魚、植物などを育て殺したりする仕事もあり、綺麗なだけじゃない世の中の仕組みを知った上で、自身の価値観を築き、バランスを取りながら理想の暮らしを考えることが大切だと結論付けた。

最後に、どろんこ村の自家製の豚肉を使用したソーセージとハム、同じくどろんこ村で育てているヤギのミルクを使用したシフォンケーキを全員で美味しく頂いた。

ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう！

実施者：榎山和恵(柏崎・夢の森公園)、遠藤亮(ホールアース自然学校)、
高橋正智(柏崎・夢の森公園)

【概要】

本ワークショップでは、超ミニアースオープン作り体験を通じて、ねん土の扱い方やものづくりの楽しさ、そして体験学習の場づくりで大切にしたいことについて考えた。

【内容】

○自己紹介

会場には手作りの米粉クッキーとドクダミ茶を用意し、BGMが流れる和やかな雰囲気の中でスタートした。まず、名前・期待していること・自分を動物に例えると？のテーマで自己紹介をした。自分のことを「犬」や「ネコ」、中には「ナマケモノ」と例えた方もおり、笑いを交えながらお互いを知る時間となった。

○柏崎・夢の森公園の説明

「柏崎・夢の森公園」は、都市公園でありながら「持続可能な暮らしを考える場」をテーマに掲げ、様々な体験活動を実施している(年間の来園者は約8万人、プログラム参加者は約1万人)。今回のテーマであるアースオープンは、自然建築講座で実際につくったものであり、その制作段階をスライドで紹介した。実際のアースオープンは三層構造になっており、窯の輻射熱によって物が焼ける仕組みである。参加者からは具体的な質問も飛び、アースオープンづくりへの関心が高まった。

○超ミニアースオープンづくり

超ミニアースオープンづくりは屋外(野外炊事場)に移動して実施した。今回は一人が1台、自分のオープンをつくることとし、参加者は農業用の箕にそれぞれ必要な量のねん土・砂・石灰・ワラを取り、混ぜ合わせるところから作業を開始した。(※砂:ねん土=3:1、そこに石灰を一割、ワラを一掴み)

手でねん土をこねる作業は心地よく、皆さん「飽きない」、「子供の時に帰ってみたい」と楽しそうな様子。最初はなかなか水分の比率がわからず、ねん土を足したり、水分を足したりと苦戦しつつも、次第にどれもしっとりといい感じになった。

続いて、砂で型をつくる作業。この型によってオープン内側の形状が決まるため、このときばかりは終始無言。皆さん集中して取り組んでいた。型ができるといよいよ最後の工程。砂型に新聞紙を張り付け、その上から1cm位の厚さでねん土を張り付けた(※新聞紙は乾燥した時に砂とねん土の境目がわかるようにするためのもの)。薄く伸ばしたねん土はなかなか張り付かず、根気のいる作業だったため、中には集中しすぎて入口をつけるのを忘れてしまう方もいた。それぞれ「自分はこうした」、「自分の作品はこうだ」と話しながら、最後の仕上げに取り掛かっていた。完成が近づいてくると、これまでの集中が和らいたためか、皆さんの中に遊び心が生まれ、オープンの上にナス型の飾りをつけたり、葉っぱや縄を押し付

けて模様を付けたりと見た目にも個性豊かな作品が生まれた。参加者の創造力に感じるとともに、人がお互いに刺激し合うことで生まれる力があることを実感した。

今回作ったものは数日乾燥させないと使えないため、体験の最後に見本のミニアースオープンとロケットストーブでマシュマロを焼いてみた。30秒ほどで外はパリッ、中はトロツという最高の焼きマシュマロが完成。見た目のかわいらしさと、超ミニサイズでも実際に使えることがわかり、マイオープンの完成に期待が膨らんだ。補足解説として、実際にアースオープンを作るときに使う攪拌機の使い方や、ねん土を使うことは日本の伝統的技術であることをお伝えした。

【まとめ】

室内に戻り、夢の森公園で行う体験型講座で大切にしていることとして、名前を大切にすること、手づくり食の提供、ファシリテーショングラフィックの活用など、人間関係と学びが深まる場づくりの工夫をお伝えした。参加者と双方向で工夫の共有ができるとよかったが、時間がとれず残念だった。感想として「大変楽しかった」「ミニアースオープンづくり体験はこれから伸びる可能性がある」との声をいただき、ものづくりの面白さや、夢の森公園が目指す方向性を共有できる仲間と出会えたワークショップとなった。



農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～

実施者：伊藤弘晃(NPO 法人自然体験共学センター)、辻一憲(自然エネルギー推進自然学校ネットワーク)



【概要】

本ワークショップでは、過疎化が進む農山村の活性化にそと者、若者が取り組むために必要なものを考案した。はじめに実施者が活性化に取り組んでいる福井市上味見地域の概要やそこでの取り組みについて紹介があり、そこから何があれば若者が農山村に魅力を感じるのか、都市と農山村の交流を深めるには何が必要なのかというテーマでグループワークをおこない、さまざまな視点からあがる意見をお互いに共有した。

【実施内容】

《上味見地域の紹介》

まず、実施者が活動をおこなっている福井市上味見地域についての紹介があった。福井市の東部に位置し、山や緑に囲まれた里山地域である上味見地域。そこにある自然学校で学生時代にボランティアをしていた実施者は上味見に魅せられ、そこに住み着いたという。若者の力と農村の力を結びつけ、地域の活性化に取り組むために新しい形の青年団を結成した。現在団員は30名ほどいるが毎回の活動に参加する主要メンバーは10名程度。上味見に住んでいるのは実施者のみであるため、地域と若者を結ぶコーディネーターとして活動している。活動内容はお祭りのお手伝いや登山道整備、名産の赤かぶら栽培など。はじめは活動の多くが自主的に取り組むものであったが、徐々に地域との信頼関係が生まれ、地域の方から声をかけられ活動することも増えてきている。上味見地域の人々は外から若者が入ってくることに對して、歓迎する雰囲気があり、何度も訪れるメンバーは名前や顔を覚えられ、親睦が深まっていく。今後の展望と課題として、団体の基盤づくりと継続して活動できるシステム、また地域財の継承の仕方などがあげられた。地域に住んでいる”土の人”、外から入ってくる”風の人”、地域の活性化にはこの両輪が必要であるため、いま地域に若い人が必要であると示した。

【グループワーク】

「そと者、若者が農山村に魅力を感じ、都市と農山村の交流を深めるには何が必要か」というテーマに基づきKJ法でグループワークをおこなった。参加者が記入したものを、具体的なものと抽象的

なものに分けてホワイトボードに貼りつけ、その後、似たものをまとめていき、細かく分類していく作業を行った。分類として交通、暮らしのもの、出会い、祭り・フェス、仕事、食、人間関係、地域の状態というカテゴリーが上げられた。その後、分類したものをしながら、気になるものについてさらに意見を出し合った。一番の盛り上がりがあったのは「ゲテモノ食ツアー」。ウツボやイナゴを食べるという内容で、「G級グルメ」という言葉に笑いが起こった。そのゲテモノ食ツアーと音楽をコラボレーションしたフェスという案も多くの共感を得た。また「オープンビレッジ」という意見も興味深いものであった。企業説明会やオープンキャンパスのように村の説明会を実施しようというもの。付随して農山村の地域の人が都市へ行って交流をしたり、広報をすることも可能だという声もあがった。さらに「半農半楽天社員」という意見から、農業における都市の人々との関係や農業に学生をどう誘致していくかという話に派生した。大学生が飛びつく宣伝文句としては、「就活に使える」や「無料」というキーワードがあげられた。しかし、農業は長期的に関わる必要があるが、学生対象だと短期的になってしまうという問題点も話題になった。

【まとめ】

参加者からは、農村には日本の精神が残っており魂が詰まっていることを実感したことや、1人だと思いつかないようなことがたくさん出てきたという声があがった。また多くの賛同を得たG級グルメと音楽フェスのコラボレーションの実現を期待する参加者もいた。実施者自身も新しい意見に出会えた、オープンビレッジの実施にも取り組みたいと述べた。さまざまな視点からの意見にお互いが刺激を受け、新たな活性化の形を考える場となった。



一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり

実施者:西岡里子(NPO 法人都留環境フォーラム)



【概要】

実施者自身の経歴を踏まえたうえで、参加者は一次産業すなわち農林水産業とどのように社会貢献事業と展開していくことができるのか。ワークショップを通じて参加者自身に置き換えて考え、発表しあった。

【内容】

最初は西岡女史自身のこれまでの職歴についてパワーポイントを使いながら紹介した。西岡女史は、岐阜県の大学で図書館司書の仕事をしていた。しかし、手取り自給の少なさや暮らす地域と自身の暮らしたい理想が異なっていることに違和感があった。そんな中、屋久島でのエコツアーの参加をきっかけに、自然の中で働きたいと考えるようになった。27歳で心機一転し森林文化アカデミーに入学、今年3月卒業。NPO 法人都留環境フォーラムでの面接合宿を経て、晴れて採用となった。

NPO 法人都留環境フォーラムで女史は農業に携わり、在来作物や無農薬野菜の種の品種改良を行っている。採用当初は1年間山梨県の補助金があったが、8月に補助金が打ち切られることが決まってしまった。9月からは人件費に回り基本給が減少、自主財源で雇用となった。それからは、自主財源を増やすための取り組みを始めた。Webサイトのショップを通じ、コンセプトを載せて、無農薬野菜の種の販売を開始した。種だけでなく苗や大豆の加工品のみその販売も考えているようだ。

他に、企業と提携して「農的暮らしの学校」という年5回ほどの農的暮らしや自然体験のプログラムを開催することとなった。先天性のある子供たちを対象に自然の中で田植えや川遊びなどを1泊2日で体験する内容である。子供たちが遊んでいる間、親はストレスを抱える子育ての解消のWSを行う。プログラム全体の狙いは子どもが自信を持って社会の中で生きていけるように、大人は家族の未来を描くことができるようにすることである。

西岡さんは企業・相手がこれはいいねと言ってもらえるような農的暮らしや自然体験、親向けWSを展開していきたいと考えている。

いる。実施者自身、NPO 法人都留環境フォーラムで働くようになってから、お金がなくても追いつめられなくなった。農業に関わることで、食べることはできると実感したからだ。

実施者が考える1次産業と社会貢献事業の企業にとってのメリットはイメージUP、社員の社会貢献マインド(愛社精神など)の醸成、活動する地域に対して社員がふるさとのような愛着を持つことである。

実施者の話を元に「自分は企業とともにどのような1次産業と社会貢献ができるか」をテーマにWSを始めた。最初に3人組のグループになってもらい、各自で「自分のやりたいこと、こんなことができるだろうか」を10分間考えてもらい、その後グループ内で発表し合い共有した。次に、「自身に置き換えてもしくは企業になったつもりで、企業が社会貢献していくためにはどのようなことができるか」を10分間考えてもらい、先ほどと同じグループで共有し発表した。その後、先ほど考えた「各自のやりたいこと、できること」と、「企業がどのような社会貢献したいか、社会が何を求めているのか」を組み合わせて、どのような1次産業と社会貢献事業ができるか各自で構想を立てた。最後に、円になって個人の考えた構想を発表し、みんなで意見を共有し合った。

【まとめ】

一次産業と社会貢献事業を組み合わせていくことはまだ発展的である。しかし、今回のワークショップを通じて、いろいろな意見や考え方が出てきた。これからは実施者自身も、1人の参加者として一次産業と社会貢献事業について取り組んでいきたいと考えている。



「住み開き」を考えよう ～身近に環境教育の場をつくる～

実施者:西村和代(環境共育事務所カラーズ)、丸谷聡子(明石 のはら くらぶ)

【目的】

1. 「住み開き」という言葉は最近になってメディアにも取り上げられるようになった新しい言葉である。その為、定義も解釈も様々である。今回の3.5時間ワークショップを通じて参加者全員で「住み開き」の解釈を深め、今後積極的に「住み開き」を活用していくことを目指す。
2. 「住み開き」が何なのか、という結論を出す場では無く“気づき”の場であり、たくさんアイディアを発散する場をすることを目指す。

【概要】

ワークショップ実施者の事例の発表から始まった。「明石 のはら くらぶ」の丸谷女史は、兵庫県明石市を主なフィールドとして活動する「明石 のはら くらぶ」の事例紹介を行った。また、環境共育事務所カラーズの西村女史は「住み開きのことから場づくりへ」と題して当人の経験を基に「住み開き」についての事例紹介を行った。この2つの事例を受けて話し合いたいテーマを参加者自身が提案をした。提案された8つのテーマの中から「まちづくり」「ボーダレス」「場所」という3つのテーマを導き4人1組になり、アイディア発散のワークと話し合いが行われた。

【話題提供①】「明石 のはら くらぶ」丸谷聡子女史

人と自然が共にくらす持続可能な社会を目指して、身近な自然を活かした自然観察会の実施や幼稚園・小学校・中学校等の環境体験学習のコーディネーター・サポートを行っている。

身近な自然の存在に気づき、興味・関心を持つことで、自分が住んでいる地域を大切に思う心を育てるための活動をしている。また、学校と地域・行政・専門家等が連携・協働するネットワークづくりを行うとともに、地域支援者の養成にも力を入れている。

【話題提供②】「住み開きのことから場づくりへ」西村和代女史

住居や個人事務所だったプライベート空間の一部を限定的に開放することが住み開きの基本となる。地域で行っているまちづくり活動や、自宅や作業場の開放型で企画された展示会、庭の開放、週末ギャラリーや居間で開く私設図書館など、「住み開き」といえる実際の事例を紹介。自身が展開している多目的交流スペースの「京町家 さいりん館 室町二条」では、私設に運営する公共空間としての機能が「住み開き」となっている。

以上の2つの事例紹介を経て8つのトークテーマが参加者から提案された。

以下が参加者から提案されたテーマである。

【参加者から提案されたトークテーマ】

『地域をひっくるめた活動』『世代ボーダレス交流』『自宅を“居場所づくり”や“学びの場”に活かす』『乳幼児のことを考える』『知らない世界と出会える場』『色々な人と出会える場』『同世代が集まる場』『自分の居場所』。

【厳選した3つのトークテーマとそれぞれの内容】

1) 地域づくりの土台となる住み開き

- ・まちづくりはそれぞれ環境が違う。例えば、地域の人たちで街づくりを行うときには拠点が必要になる。この拠点である基地を作る必要がある。この基地はのんびりお茶を飲むような場所でありながら、自然の良さを伝える場所や、地域の語彙形成の場所になるべきである。
- ・住み開きの対象は人間だけではない。スズメに軒下を開くなど生き物にも「住み開き」を行うことはできる。

2) 持続可能な住み開き

- ・まず初めに、第一歩を踏み出す時は自分を開く必要がある。その後、継続していくには苦しく無理なく持続可能に行う必要がある。
- ・料理を一緒に行い、完成した料理を持ち帰り夕食のおかずにする。身近な簡単などころから住み開きは可能である。

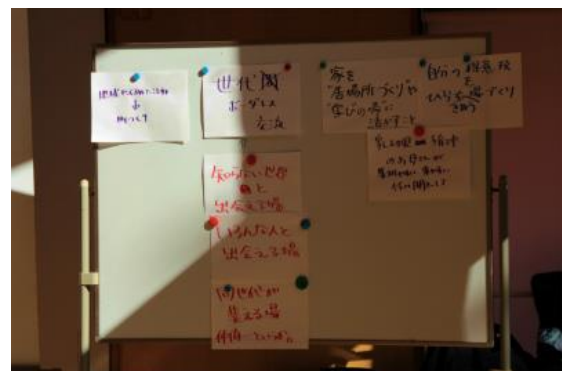
3) 世代間・色々な出会い

- ・衣食住をキーワードに世代間が繋がることは出来ないか。
- ・月の暦などみんなが知っていそうで、実は知らないことを体験を通じて学ぶ。
- ・繋がり の 根 源 に は 楽 し み が な く て は な ら な い 。

【まとめ】

実施者から「意味創出」と「意思決定」という2つのキーワードが出された。前者は過去に焦点をあわせており、後者は、未来を創造していく際に必須となる。持続可能な未来のために今後、どのような方向性で進んでいくのか。この感覚を住み開きにも定着させる必要がある。以上を踏まえて実施者から以下の提案がなされた。

- ・個性、特性、自然、歴史などの様々な資源を住み開きに活かす。
- ・住み開きを活用して環境教育の場をつくる。環境教育という手法を通じて住み開きが社会を変える。
- ・人は社会の共有財産であり、場所はそこにいると何かが起こる。モノは魅力の一つである。この仕組みを理解するファンをつくる。
- ・ライフワークとして自分の身の丈にあった手法で行っていく。



「都市と自然の融合 ～両方見て、初めて見える環境教育！～」

実施者：岩松洋(京エコロジーセンター)、家倉舞(公益財団法人キープ協会)



【初めに】

都市型の施設と自然系の拠点でそれぞれ働く実施者の2名が、お互いの現状を共有する中で、それぞれのフィールドだけでは解決できない、ある種の「限界」を感じている事に気が付き始めていた。その限界とは、「自然体験が日常生活になかなかつながらない」「エネルギーやゴミ問題を伝えても自然を大切にしたい気持ちを育てていない」など、「問題解決のために行動できる人を育てられているのか？」という問題だった。それは、都市型(生活系環境教育)と自然系(自然体験型環境教育)の融合を図る事で、少しずつ突破する事は可能なのではないかとその思いから、まずはお互いを知り、融合・コラボの可能性を探るところから始めたい、というところが今回のスタートラインとし、環境教育の効果的なアプローチの仕方について話された。

【参加者】

実施者(岩松氏)から見た去年参加者層は、圧倒的多数の自然系参加者という印象であったが、今年の本WSには都市もフィールドにしている参加者が多く参加された。

【事例紹介】

実施者2名の問題意識を参加者と共有するため、兼コラボアイデアを考えるための元ネタ提供という位置づけで、事例紹介を行った。

①都市型の事例紹介では、京エコロジーセンターで行っている、子ども達への環境教育の様子とその課題について

水、ゴミ、エネルギーの3テーマのプログラム紹介を行った中で、ゴミのプログラムの実演を交えて紹介した。都市型で感じている課題として、制度、インフラ(ゴミ処理、排水処理)が整っているがために、ゴミも水も使った後は「誰かがなんとかしてくれる=他人事」になっている。知識としては知っているが、自然体験が少ないため「地球環境のため」「自然環境を守るため」という動機づけが弱く、行動が短期的で継続しないことなどが挙げられた。

②自然系の事例紹介では、キープ協会を拠点に行っている事例を紹介

自然系の環境教育の課題として、自然体験をただで終わってしまい日常生活に結びつきにくいという点があり、2泊3日など時間をかければ、自然への愛着からその自然を守りたいという気持ちを育むことはできるが、日帰りの短時間プログラムではその効果が小さい。日帰りの短時間プログラムで効果を上げるための工夫として、キープ協会で湧水地点を見たり森の水源涵養を体験したりして、その後学校で事後学習として下水処理場の見学を行うなどしたところ、清里での自然体験で自然への愛着を持ち、普段の生活圏で下水処理を見ることで水をきれいにするための義務心を持つなど、効果の向上が見られたことを紹介した。

【グループワーク】

参加者は「水」、「エネルギー」、「ゴミ」の3つのテーマから1つを選択し、まず個人で各テーマに沿った環境教育プログラムについて、「自然系」と「都市系」で、「できていること」と「できていないこと」を挙げて整理した。その後、グループで話し合いながら、自然系と都市系の長所を活かす方法、短所を補う方法などを考えながら、都市系と自然系を融合させた環境教育プログラムの可能性について話し合った。

「水」をテーマにしたグループでは、水の全体像を見るために、川を起点に、「山」、「森」、「里」、「都市」、「海」の環境教育をトータルで実施していくことが重要ではないかと議論された。「エネルギー」をテーマにしたグループでは、学校と自然学校、さらに家庭や地域の協力を得ながら、エネルギーの消費され方、省エネの工夫や、昔の人の智慧、自然の恵みなどを、日常において学んでもらう総合的なプログラムが重要だと議論していた。

「ゴミ」をテーマにしたグループでは、ゴミの影響が都市部では見えにくい点が工夫につながらないとし、ゴミの見える化が重要であること、また、無意識で習慣化ができるようなプログラムが理想的であることなどが議論された。

【まとめ】

まだ現場経験のない参加者もいる中ではあったが、都市・自然それぞれのフィールドで活動する(したいと思っている)人たちが、同じ場で議論する場を持てたこと・そのスタートが切れた場であった。人口の多い都市部での環境教育を効果的にするためにも、生活系と自然系、それぞれの長所・短所を理解しトータルで環境教育に活用していくことが改めて重要であることが認識できた。最後に講師陣から、まだまだ独立している各分野から「生活系」と「自然系」の枠を超えて踏み出すことで発見できることがあるとまとめられ、ワークショップは終了した。

木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①

実施者：佐々木豊志(くりこま高原自然学校)、大場隆博(栗駒木材)、河野格(NPO法人都留環境フォーラム)、尾立愛子(アース・ビジョン 地球環境映像祭)、宇津留理子(アース・ビジョン 地球環境映像祭)



【概要】

「森が健全に活用されるために、環境教育はどうあるべきか」を大きなテーマにし、実施者であるくりこま高原自然学校の佐々木氏、都留環境フォーラムの河野氏、栗駒木材の大場氏、アース・ビジョンの尾立女史、宇津留女史がそれぞれの立場からレポートセッションを行った。

【内容】

実施の経緯

佐々木氏は自然学校として環境教育に携わりながら、自然そのものを生業としている一次産業と環境教育のつながりがないことを疑問に思っていた。さらに岩手宮城内陸地震を経験し新たな事業展開を考える必要に迫られ、現在は「放置された森の問題」について大場氏と共同で活用する方法の事業化を進めている。このような経緯のもと「森の健全な活用」と「環境教育の果たす役割」をどのように行っていくべきかのワークショップが行われた。

参加者の自己紹介もじっくりと時間をかけて行われ、地域でお金を循環させていく仕組みや再生可能エネルギーに興味のある人から、森づくりの活動を実際に行っている人など「森」「地域循環」「エネルギー」「木質バイオマス」などをキーワードとして集っていた。

事例① ～映像：東北の森から明日を考える～

「木質バイオマス」について考えるきっかけとして尾立女史が創った映像「東北の森から明日を考える」を視聴し、シェアを行った。

映像作品は佐々木氏、大場氏が理事、副理事を務める NPO 法人日本の森バイオマスネットワークが震災後にペレットストーブを各地の避難所に届けた活動、関わる人々へのインタビューが紹介されていた。震災後石油が避難所に届くまで1カ月以上かかったことなどから、地元でエネルギーを作っていることの重要性が再認識された。ペレットストーブの開発は地元の森林資源を地域の中で循環させていくための仕組みづくりにおいて有用であると同時に、仕組みを成り立たせるには手間がある程度かかるがこれは雇用を地元で生み出す役割も果たすことができるという。現在ペレットストーブにかかるコストは一般家庭で石油を利用する場合と同程度である。

る場合と同程度である。この時に何のために燃料費を払うのか？地元か外国か、子どもの未来か。ペレットストーブ開発者の古川氏(さいかい産業)は視聴者に問いかけていた。

この映像のもう一つの成果としては、今回の木質バイオマス等の例でも同じようなことを言っている人でも分野が違うとなかなか出会う機会がないが、短い期間で関係する人たちと手をつなげたことがある。また、自治体や企業は前例・成功例がないとなかなか新たな取り組みを行わないが、今回の東北の震災は先進事例を作る種であると考えていると尾立女史は語った。

映像に対して参加者からは、今まで「経済」は「どれだけ安いか」とコスト中心に考えていたが、「雇用」や「その後」のことも含めて「経済的」かどうかを判断する必要があるなどのコメントがあった。

・事例②

～野生生物の棲む森をつくりながら

木質バイオマスを生みだしたい～

都留市という森づくりがメジャーでない土地で河野氏が取り組んでいる企業との森づくりの事例紹介を行った。

都留市の森は県内でも荒廃度合いが高く、土地を受け継いだものの自分の山に入ったことがない所有者もいる。河野氏はこの森の一角で、コスモ石油のエコカード基金と共同で森づくりを行っている。都留市のキャラクターがムササビであるため、「ムササビ」をある種、象徴的に利用しているようだ。

森の手入れを行うと林地残材の問題が出てくるため、これらを活用しエネルギー問題へつなげたい河野氏のだが、コスモ石油は生物多様性事業として森づくりを行っているため両者の間には少しギャップが生じている。現在は森林の環境整備を行う傍ら、試行錯誤しつつ小規模ながらもペレット化を行っている。他にもエコツアーなども行っており、広く情報発信基地として森を活用することで地域の人が様々なステークホルダーとして関わってもらいたい狙いがある。

午後の部、WS24へつづく。



地域に根ざすということについて PBE への招待

実施者:高野孝子(NPO 法人エコプラス代表理事)、大前純一(NPO 法人エコプラス)



【概要】

グローバル化が進む現代社会において、環境教育の世界でもパッケージ化されたプログラムを世界中に普及させる動きが拡大している。その一方で、それぞれの地域に根ざした活動も進んでいる。「地域に根ざす学び」(Place Based Education)とは何なのかを、様々な角度から議論した。

【実施内容】

1. アイスブレイク

室内を大きな日本地図に見立て、自分が住む場所の方角と距離を他の参加者と話しながら決めてそこに立った。続いて、家を出た時間が早い順に並んだ。2つのアクティビティを通して、それぞれが住む場所を出発点に互いの理解を深めた。

2. 自己紹介

円形になって1人1分間で「地域に根ざす」ということについて簡単な考えの紹介をし合った。地域に根ざすという考え方があまりない都会で育ったが、大人になって地域のことを考えるようになったという人やYMCAやボランティアに参加したのがきっかけで地域の根ざし方を考えるようになったという人までいた。

3. スライドでの問題提起

スライドでは、高野女史が世界各地を巡ってそれぞれの場の人々と触れ合った経験を紹介した。ミクロネシアでは米国で高度な教育を受けた若者が島に戻っても学んだ内容を活かせる場がなく、結局地域では「使えない若者」になるケースがある。世界共通の学びというものには地域では役に立たないことがスコットランド等でも指摘されている。

地域にはその地域ならではの生きる知恵などがある。地域は誰のものなのか? 定住者、一時的に訪れる人々、よそ者のためなのか? “場”と言う漢字は中国では土と太陽を意味する。昔に人々は、人間が生活するうえで土は太陽と対等に欠かせないものだと考えられていたしかし現代の多くの人々は土や生き物からのかみ離れた生活を送っている、そこでエコプラスでは地域で自然を利用した活動、体験を通した学びの場を提供している。

本来日本でもその場に根ざした学びを追求する動きは大正時代から「土の教育」「郷土教育」という形で存在してきた。その延長戦に環境教育やESDも位置する。しかし21世紀に入り気候変動や資源問題、経済格差、高齢化など新たな課題に直面し、特に大震災・原発事故以降、日本社会は大きく変わった。生き抜くための「地域に根ざした学び」が求められている。

4. グループ討議

参加者がキーワードを紙に書いて提出、関連するものをグループ化した。4つのグループを作り、討議を行った。

5. 発表

①「都市部と農山村」

農山村は過疎化による伝承の断絶に直面。都市部はコミュニティが希薄で祭りの意味も知らないという状態にある。双方を「交流」によってつなぐことで、双方に気づきを提供する。「風の人」と「土の人」の交流。風土(あるいはFOOD)による双方のリンクに可能性がある。

②「都市圏における地域」

郊外を中心に話した。大都市郊外を想定すると、その住民は移動距離・時間が長く、人々の出入りも激しい。よそ者と定住者が混在し、人の繋がりが人工的で、急速な高齢化が進んだ結果、団地の過疎化も進んでいる。商業主義的な考え方を持っている人が多く、「教育の商品化」が見られる。このためにプログラムのパッケージ化など何らかの仕掛けが必要になる。都会に適した環境教育が必要ではないか。

③「実施者」

1つの地域には個人、企業、学校、NPO等多くの団体が関わっている。エリアによって抱えている課題の内容が異なるため問題解決の仕方も異なる。多様な関係者を取りまとめる地域のキーパーソンが重要になる。

④「学校教育」

地域にはいろいろな人が必要で地域に根付いた多様な教育が必要。地域を支える人材づくり。地域の暮らしから学びの意欲が高まる。しかし、現実には学習指導要領は全国同じ。地域の個性を活かすことが出来ない。受験教育も地域の学びとは対極にある。文化の伝承や地域の遊びから学びを組み立てることができないか。

【まとめ】

地域煮根ざすという言葉は、大事なことと理解はされるが、その中身に踏み込むと多様な課題が浮かび上がってくることが討議から明らかになった。それぞれの場で行われている実践を持ち寄り、「何がどうなれば」地域に根ざしたと言えるようになるのかを追い求めたい。事例収集を以下で実施している。

<http://www.ecoplus.jp/pbe/120810PBE.doc>

問合せは info@ecoplus.jp まで。

田舎で生きる！ライフモデル作りワークショップ

実施者：梅崎 靖志(風と土の自然学校)



【概要】

田舎で生きるとは、どういうことなのか。仕事と暮らしのバランスをどのようにとるか、どんな方法で稼いでいくのか。ビジネスモデルがお金を稼ぐ仕組みだとすれば、さらに視野を広げて「人生をいかに生きるか」という生き方のモデルが“ライフモデル”だ。

パーマカルチャーを糸口に、理想のライフモデル(生き方のモデル)について考えた。まず、個人作業で現在の自分のライフモデルを意識化し、その上で、理想のライフモデルに近づく具体策を考えた。

【実施内容】

○プレゼンテーション

田舎で生きるための4つの視点を紹介した。

① 農的暮らし、パーマカルチャー的生き方

パーマカルチャーは、permanent(永久の)+agriculture(農業)+culture(文化)から作られた言葉。人間が生物たちとともに地球上に生き続けるための、農的暮らしのデザインである。

② パーマカルチャー的暮らしを作る3つの循環

次の3つ野循環を暮らしの中にする。有機物(生ゴミ⇒コンポスト⇒堆肥⇒畑で野菜を育てる)、水(風呂⇒植物の水やり)、エネルギー(薪で火をおこす⇒蓄熱する)など。

③ 田舎暮らしを楽しむための6つのポイント

田舎で溶け込みながら、自分らしく暮らす6つのポイントを紹介した。

住まいを見つける、暮らしの中で4つの自給率を上げる(衣・食・住・仕事)、生計を立てる(一つの仕事で大きく稼ぐorいろんな仕事で小さく稼ぐ+支出を抑えるetc.)、理解者を大切にする、地域の仕事をする、行事に参加する、誘われたら断らない、やりたいことは地道に取り組みながら近所と折合いをつける。

④ 田舎で生きる！ライフモデルを支えるもの

家族の協力、大工仕事、野良仕事、お礼として使えるお金に代わる通貨的なもの(ハチミツ、手作りケーキ、お手伝いなど)、楽しむ気持ち、人とのつながりを大切にする、など。こうした要素が、田舎で生きるライフモデルを支えている。

○理想のライフモデルをつくろう！

ライフスタイルを考えるにあたって、まず、「何の制約もなければ、どんなところで、何をしながら生きていきたいのか？」について、参加者それぞれがイメージを具体化した。そして、理想のライフスタイルに近づくための具体策を出して、シェアを行った。

①現状の把握

現状のライフモデルを確認するために、現在の暮らしに必要なもの(衣食住、水、エネルギー)をどうやって手に入れているのか？どんなお金の稼ぎ方をしているのか？の2点について各自でシートに記入した。

②理想のライフモデルづくり

暮らしに必要なもので、何の自給率を上げていきたいか？どうやって上げていくのか？自給率を上げると何が良くて、それにより何をもらえるのか？お金をどう稼ぐのか？について考えた。

それをもとに、生き方のコンセプト(大事にしたいこと・価値観)、つながる人・支えあう人(協力者・関わる人)、暮らしに必要なものの入手法(衣食住、水、エネルギー)&使う時間の割合、お金の稼ぎ方について個人作業でまとめた。これらを記入したシートを、理想のライフモデルの原案とした。

③現状から理想への道筋をイメージする

床の上に、現状の地点と理想の未来を実現している地点を決めて、それぞれのシートを置く。「現在の暮らし」から「理想の未来」へとシフトしていくことをイメージしながら、いつ頃、どんな風に変化していけば無理なく実現できそうかについてイメージしながら何度も歩きながら確認した。その上で、実現に向けた具体的な小さな一歩を考え、シェアを行った。

【まとめ】

人と自然がつながる生き方(パーマカルチャー)に、田舎で自分らしく生きるライフモデルのヒントがある。理想のライフスタイルで大切にしている価値観やコンセプトを考え、これから自分が向かっていく将来のための具体策の一歩目を見つけることで、自分の現在のライフスタイルを見つめ直す場となった。

パタゴニアから学ぶ！持続可能な働き方と歩み方

実施者：田中啓介(ホールアース自然学校)、土屋彰(パタゴニア日本支社)



【概要】

本ワークショップでは、環境に配慮した商品づくりはもちろん、「社員をサーフィンに行かせよう！」に代表される、生き活きとした働き方や組織マネジメントが魅力的なパタゴニアの事例から、次世代の自然学校へのヒントを探ろうと企画されたものである。

【内容】

1. 自己紹介・アイスブレイク

参加者自身が考える、「パタゴニアとの距離感」によって並び替えが行われた。参加者1人1人から自主的な順番による自己紹介が行われた。自然学校職員や大学の先生、学生など多様な参加者9名が集まった。

2. パタゴニアに聞いてみたいことを挙げていく

分科会に期待している「こんな話が聞きたい」と思っていることを参加者それぞれが付箋紙に書き、模造紙に貼り付けた。さらに付箋紙をカテゴリーに分類し、参加者全体の意識の共有を行った。この作業によって整理されたカテゴリーは以下の4つ。

『働き方』『組織のあり方』『社員について』『製品について』

3. 対談

①製品について

パタゴニア製品は基本的に日本では製品開発しておらず、今もアメリカが企画、デザインを行っている。日本に製品が入ってきてから28年、日本では原則として販売するのみだが、営業を通じて感じた日本の顧客のフィードバック(デザインや色など)をアメリカに伝え改善を加えることも、少しずつ行われるようになっていく。

ここでは、「環境に配慮すると製品の値段が上がってしまうジレンマにはどう対処しているのか」という質問や、パタゴニアのより多くの顧客にパタゴニアのメッセージを届けるために、近年は一部の商品で比較的リーズナブルな設定を行なっているようだ。また、環境配慮への取り組みとして従来はリサイクルのみに重点が置かれていたものの、品質の維持管理が課題となったこともあり、最近ではリサイクルに加え、無駄なものは買わない(Reduce)・可能な範囲で修理(Repair)・不要なものはみんなで共有(Reuse)に総合的に取り組んでいる。本当に必要なものだけを永く愛用してゴミを減らし、地球環境への負荷を減らす「コモンセンス・イニシアティブ」がその代表格である。

②組織のミッションについて

パタゴニアのミッションは、「環境危機に警鐘を鳴らして、解決に向けて実行しよう」である。ミッションを達成するためには、周りに影響を与えていく必要がある。だからこそ、利益をあげ、注目される会社になり、影響を与えていかなければならない。その手段として現在はアパレル製品を販売しているが、創業時はロッククライミング用具を売っていたという歴史からも、今後商品コンテンツが全く変わっていく可能性もある。自然学校のミッションもまた、「環境問題に警鐘を鳴らすこと」や、「環境問題の解決に向けて実践する人材を育てる」ことである。また、その手段として現在は自然体験活動が主流ではあるが、プログラムの内容や協働パートナーなどは日々変化している。こうしたことから、自然学校とパタゴニアは多くの共通点があり、ある見方ではパタゴニアもまた、自然学校の1つと言えるのかもしれない。

③社員の働き方

パタゴニア社員の教育マニュアルは特になさそうだが、プロダクト教育(製品の知識の教育)には力を入れているという。また、パタゴニアは「ミーティング集団」であり、日々のミーティングが、社員間のコミュニケーション・スキルアップ等を高める重要なポイントであることが分かった。パタゴニアでは、1ヶ月や2ヶ月の長期休暇も珍しくない。但し、特別な休暇制度等がある訳ではなく、あくまで通常の休暇や有給休暇の枠内である。また、ミーティングが多いため、どのスタッフがどんな業務をしているか、お客様とどのようにコミュニケーションを図っているのか、今スタッフがどんな課題を抱えているのかなどが社員間で共有されており、「お休みを取りやすい=みんなに安心してサポートを任せられる」という雰囲気醸成しているようだ。ミーティングよりも対話に近い感覚なのかもしれない。さらに、パタゴニアではアメリカ本社が主管するカタチでの、環境NPO/NGOへのインターンシップ制度が整っている。これは、社員が「このNPO/NGOに行きたい」と申請を行い、審査を経て最長で2ヶ月程度のインターン派遣が行われる。実施者の土屋氏は、日本支社の中で唯一、2度のインターンを経験している。インターンシップ制度は、社員のモチベーションの向上のみならず、不在時のフォローをするスタッフのスキルアップの場にもなり、良いサイクルが生まれるという結果をもたらしている。総じてパタゴニアでは、社員間のミーティングの頻度や質の高さが、社員のモチベーションを高く保つポイントとなっていると感じた。

《まとめ》

「従来の製品紹介ではなく、組織の理念や取り組みそのものを語る機会は初めてで、自分自身も改めて振り返る契機となり、とても有意義だった」「自然学校が企業から学ぶ点はまだまだたくさんあり、今後もこうしたコラボ型の場を創っていきたい」といった声があり、ワークショップを実施した満足感・充実感を感じることができた。

環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～

実施者:村上志緒(トラボ植物療法の学校)、本杉美記野(公益財団法人キープ協会)



【概要】

本ワークショップでは近くにある自然を通して自分の生活を見つめ直し、生活の中で自然を活用する事の重要性を確認、フィールドを活用した植物療法により、全体のバランスを整えてヒトの活動に役立てる事、環境教育に繋がる事の情報共有を目的にウラジロモミで軟膏作りの実習も行なった。

【実施内容】

1) 植物療法とは

ハーブは人間の活動に役立つという事と海外のハーブ活用法事例をパワーポイントで説明。ハーブの使用方法は様々で、ハーブティーやハーブクラフト、メディカルハーブなど、近くの森にある植物は私たちの健康や生活に役立つものだらけ。アメリカでは体の中のいらぬものを出す為にジュニパーを薬にして飲み、清め草としてセイジブラシというヨモギの仲間を使用。フィジーでは、ココナッツを使い尽くす(シャンプー、マッサージ、食、カゴ作り)ほど、植物が身近な存在。人が自然とつながりながら生まれてきたのが植物療法、しっかりと生活する事なしに植物療法は生まれてこない。説明の後に、会場後方に設置されたアロマコーナーでは、リップクリーム、モミウォーター、エアーフレッシュナー、モミの精油、シロップ、バスソルトなど実際に植物を使って作った品物を手に取ってもらい参加者に香りを楽しんでもらった。

2) 実習(モミの軟膏作り)

1人2本のモミを剪定する為、フィールドへ。冬になると他の木は葉が枯れているがモミは葉が残っているので見つけやすいのが特徴。

軟膏作りの段取り(4人分)

- ① モミを細かく刻む。② ビーカーに油(マカダミアナッツ油)120mlを入れる。③ ①を②に入れて浸す。④ 湯煎に30分かける。(温める事により、抽出効率がよくなる。)90～100度の温度を穏やかにかける。⑤ モミを濾す。⑥ 濾した油をビーカーへ戻す。⑦ みつろうを大さじ2入れる。

⑧ 温めて溶かす。⑨ 容器に移して冷ましたら蓋をする。

3) モミの話

モミを湯煎にかけている間、モミについての話があった。モミは、冬でも葉を付けているので不滅の生命の象徴とも呼ばれている。また、呼吸器系の不調に良いと言われており、洗面器にお湯をはり蒸気の香りを嗅ぐとリラックスできる。その蒸気を顔に当てるとお肌にもいい。

モミを洗濯ネットに入れて沸騰させ、汁ごとを風呂に入れると香りもでてリラックス効果が高まる。など、実際にモミを使ってできるリラックスする方法を参加者へ紹介した。

4) 環境教育と自然療法

身の回りに多い使えそうな植物を使って体の調整に役立てる事ができる。また外来種の植物の種を飛ばさないように体の療法に使う視点で利用できる可能性もある。植物療法を通して生き物としての人の力(感覚の鋭さ、鈍さや賢さ、美しいものに惹かれるといった人間の持つ野性をしっかりみがく)、と生活者としての人の姿勢(自然を担うすべてのものと共に自然のリズムを大切に生きる人間を意識して自分を取り巻くものの声を聴く)を実感すると紹介した。

【まとめ】

ハーブを使う事は自分の生活をしっかりと考える事に繋がる。ハーブを生活の中で活用する重要性、その不思議を大事にして考えて科学し、ハーブの繋がりや広がる可能性をイメージしていく事で、フィールドを活用した植物療法プログラム(1つの場所で季節の移りを迎いながらハーブやアロマを活用。森に身を置きながらハーブやアロマを活用)なども実施できる。そういった自然と暮らしから生まれる環境教育方法があることを参加者は共有でき、実際に身近な場所にある植物を利用して植物療法ができる楽しさ感じていた。



都市型環境教育 小学生向け紫外線プログラム体験

実施者:大越智子、河盛裕典、村松奈央

(東京ガス株式会社環境エネルギー館)



【内容】

■アイスブレイク・自己紹介

《じゃんけんを使って…》

利き手でない手を使ったり、後出しでわざと負けたり、ルールを少し変化させることで誰もが知っているじゃんけんが、参加者と実施者との距離を縮めるきっかけになることを体験した。

《ラインナップ》

実施者が出す「背の順」「名字の50音順」といったお題の順番に参加者が並ぶというアクティビティ。今回は参加者の一人が松葉杖を使っており、実施者からその方を基準に並ぶようにという説明があった。実施後、参加者の心を和ませ緊張をほぐすため、参加者同士や参加者と実施者の関係性を築ききっかけづくりのためにアイスブレイクが重要であることが解説された。また、参加者の状態にあわせてアクティビティのルールを臨機応変に変更することの必要性や体を動かすことで心が動くことも伝えられた。

■環境エネルギー館の紹介

環境エネルギー館は「地球大好き人間」の輪を広げることがを基本理念としていること、来館者が日ごろ生活している環境に近い場所で行われる「都市型環境教育施設」であることなどが紹介された。

■「UVアタック!!」体験

小学生を対象に実施しているプログラム「UVアタック!!」を、“小学生になったつもりで”体験した。プログラムは、「UVって聞いたことある人?」という問いかけに始まり、紫外線は太陽光の一種であること、「紫外線の特性(骨を丈夫にするビタミンDをつくる、池の水などを殺菌する力があるなど)」に関する〇×クイズ、UVチェックストラップ(紫外線があたると色が変化するビーズをつかったストラップ)づくり、屋外にてUVチェックストラップをつかった紫外線計測実験、帽子や傘などのアイテムがどの程度紫外線を防ぐのかを調査する実験、地球にとって帽子のような役割をしている「オゾン層」があるが層が薄くなっていることの紹介、オゾン層破壊の原因と仕組み・その解決策の紹介、「オゾン層の問題のように、みんなで話し合ったり協力したりすると今起きている

他の環境問題も解決策が見つかるかもしれない。ぜひ、オゾン層以外のことについても考えたり、調べたり、いろいろな人と意見を交換してみてください。」というまとめの順で展開された。プログラム体験後は、実施にあたり「参加者が安心・集中して参加できる環境設定」「参加者の思考を意識したプログラム展開」にするためにどのような工夫をしているのか紹介された。特に学校団体では、子どもたちの関係性がある程度できあがっていることへの配慮が必要であることなどが解説された。質疑応答のなかでは、参加者に考えを押し付けるのではなく「多角的な物の見方」や「広い視野」を身につけてもらうことを重視していること、子どもの発達段階に応じたプログラム実施の必要性などが議論された。

■インタープリテーションとプログラム開発について

環境エネルギー館のインタープリテーションやプログラムが、『インタープリテーション入門』(JEEF 監訳 小学館)掲載の「インタープリテーションの原則(チルデンの六つの原則)」と共通している点があることや「インタープリテーションは単なる情報伝達ではなく、情報の背後にある意味や価値を伝えること」であるという解説があった。プログラム開発の進め方の概略も紹介された。(詳細は、翌3日目の当日募集ワークショップ「都市型環境教育施設のノウハウ、お伝えします!!」で紹介された。)

■「実験!発見!CO2」体験

「CO2が増えるとどんな問題がある?」という問い掛けに始まり、CO2はどんなことに利用されているのか(ドライアイス、炭酸水、消火器など)、CO2の水への溶けやすさを確かめる実験、海洋酸性化のプロセスを解説する紙芝居、CO2排出を減らすためにできる「ちょっとした」工夫を考えるコーナーの順に展開された。プログラム体験後は、クイズの選択肢の作り方にもインタープリターの「その人らしさ」が表れること、このプログラムのねらいは「CO2削減のために、生活に根ざした具体的に行動ができるようにすることにあることなどが紹介された。

【まとめ】

取り上げた2つのプログラムの共通点は、「①目に見えないもの(紫外線・CO2)を可視化すること②参加者に今までと異なる次元(UVもCO2も生活で利用していて、必ずしも有害なものではない)を開いてみせること」自然型、都市型に関わらず環境教育を行う際この2点は参加者が環境問題を自分ごとと考える際の課題であり1つのポイントになる。また、知識や意見を一方的に話すのではなく、参加者の反応や考えを尊重し、その上でインタープリターが伝えたい思いを持って働きかけると同時に、インタープリターも参加者から学ぶような双方向のコミュニケーションが重要である。

文学から見た農的暮らしの可能性

実施者: 岩崎三四朗



【概要】

宮沢賢治の作品に描かれている世界は、今こそ見直されようとしている私達の日々の暮らし方なのではないだろうか。日本人らしい繊細な物事のとらえ方、農的暮らしを思い起こさせる表情豊かな言葉づかい、そしてそこから生まれる究極のインタープリテーションとは？宮沢賢治の世界から循環型社会へのシフトについて考えられた。

【内容】

宮沢賢治の代表作『注文の多い料理店』から『序章』と『かしはばやしの夜』を抜粋し、参加者で輪読したり黙読したりした後、まずは感想やコメントを自由に言い合った。そして、岩崎さんからの問いかけや投げかけに対してまた自由に発言する和やかな雰囲気が進められた。

観念的詩人である宮沢賢治がつむぎ出す透明感のある表現に触れるとおいしい食べ物を食べた時のような気持ちになるという感想が多く、その結果、私達が生きるために取り込むもの、つまりそれを象徴的にとらえて「食べ物」や「何を食べるか」がこのワークショップのキーワードに挙げられた。

「芸術は生活とはかけ離れたところにあると思われがちだが、美しいものは実は日常の暮らしの中にあるのではないだろうか」と岩崎さんがコメント。大量生産・大量消費の暮らしを否定し芸術的な暮らしを主張することは農的に暮らしにつながり、「足るを知る」暮らしや、消費者ではなく生産者側に立つ暮らしのすばらしさを宮沢賢治は作品の中で表現しようとしていたのではないだろうか」と続けた。

当時はなかなか受け入れられなかった宮沢賢治の独自の世界は、今また深く読み込まれて現代の私達の生き方に照らし合わされ、受け入れられ、暮らしを見つめ直す大きなヒントになっている。岩崎さんから、なぜ宮沢賢治の作品は小説ではなく童話として扱われるのだろうか？という問いかけがあった。童話といっても大人向けである。参加者が自由に発言した結果、宮沢賢治の作

品は色々な色が描かれている。そのどれもが日本の自然を表す色の表現であり、つまり農的暮らしの中から生まれた自然の色表現であることから、その世界を描くには童話がふさわしいということになったのではないだろうかとまとまった。また、何を食べて（＝取り込んで）生きているのかを伝えるためにもやっぱり童話の方が世界が広がるのではというコメントもあった。

『注文の多い料理店』の中からはなぜこのワークショップで『序章』と『かしはばやしの夜』を取り上げたのかについて、岩崎さんは「世の中はこれから消費社会ではなく循環型社会へシフトしていくのではないかと考え、『かしはばやしの夜』はとても詩的で、自然との調和・循環を最もよく表現した作品として自分の中では一番ぴったりくるもの。登場人物の中に宮沢賢治自身を投影しているとも読める作品で、色や自然や森や動物などの描写にも、彼自身がインタープリターの役割を強く意識していたのではないかと思う。」と話した。

【まとめ】

宮沢賢治が追い求めていたのは何だろうか？何を伝えようとしていたのだろうか？生き物のつながりの中で、石も人間も木も動物も全て格差差別のない平等なバランスのとれた世の中であったり、一方で自然の力の強さや怖さであったかもしれない。もしくは、自然の力の大きさを知っていたからこそ、自然との共生実現に役に立ちたいという強い思いだったかもしれない。宮沢賢治の独自の言葉での表現は、究極のインタープリテーションなのではないだろうか。循環型社会へシフトしていく今こそ、宮沢賢治の理想とするイーハトーブの姿をあらためて見直してみてもどうだろうか。



理想のシゴト？自然学校職員の本音と未来像

実施者：鈴木宏紀 (NPO 法人国際自然大学校)、小野芳明 (NPO 法人国際自然大学校)
白井健 (NPO 法人千葉自然学校)、瑞慶寛明子 (NPO 法人やまぼうし自然学校)



【概要】

本ワークショップは、地方・施設・事務といった職場も立場も違う自然学校職員による本音トークを通じて、それぞれから見た自然学校の現実について紹介するとともに、参加型ワークを通じて参加者と一緒自然学校のあり方や未来像について話し合っていくという内容で進められた。

【内容】

①ねらいとながれ・パネラー紹介

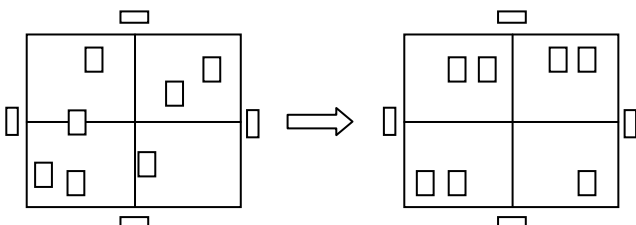
はじめに、このワークショップのねらいと進行の流れの説明があり、実施者4人の自己紹介が行われた。実施者それぞれの自然学校に対する考え、この職を通してたくさんの人に伝えたいこと等が語られた。ワークショップのねらいは、参加者に自然学校がどのようなところか理解してもらうことと、自然学校の未来像や方向性について一緒に考えていくこと。

②みんなを知ろう

アイスブレイクを兼ね、参加者を含めた全員でマトリクス分析を行った。1つのテーブル(今回は卓球台)の中心に縦横2本のラインを引き、四方にカードを1枚ずつ置いていく。カードにはお題にそった内容の単語がかかれており、その単語と自分の考えを照らし合わせ、近い部分に自分の名札を全員がそれぞれ置いていく。そして、引かれているラインで区切ったグループに別れて自分の意見をグループ内で話し合うというもの。

《お題》『自然学校との関わりは?』『関わっている(関わりたい)立場は?』『得意な(好きな)フィールドは?』

近い立場や考えを持った人同士で話し合うことが出来、お互いの意見を共有しあうことで和やかな雰囲気になった。



③本音トーク

実施者による、なんでもありのぶっちゃけトーク。配られた用紙に参加者が一人3問ずつ質問を書き、実施者がそれに答えていった。本音トークということもあり、見ていてハラハラするような質問も出ていた。給料はいくら?結婚はしている?休みはどれくらい?悩みは?醍醐味は?将来はどうなる?普段はなかなか聴く機会がない質問がここぞとばかりに出されたため、笑いも交えた楽しいトークが行われた。トーク中に質問の内容が掘り下げられていくため、異なる視点からの意見や考えを聞くことができ、自然学校というものを普段と違う方向からみる事が出来た。また、そこで働くということがどういうことなのか、どんな想いで働いているのか、など一部とはいえ自然学校を内側から見る事が出来た。

④グループワーク

『こんな自然学校があつたらいいな!』『自然学校でこんなことが出来るのでは?』『自然学校への期待』など

参加者は4つのグループに別れ、実施者と共に上記のテーマについて話し合いを行なった。話し合いの結果は模造紙にまとめ、各グループで発表者を順番に決めて発表し、発表者以外の方は別グループへ聴きに行く、それをローテーションで回していくという発表方法だった。異なる職業の人が集い、様々な角度から考えを出し合うことで、それぞれが新しい考え方を共有することができた。まとめられた意見の一部を以下に紹介する。

- ・地域での事業展開をするとともに、社会にもっと情報発信していくことが必要。社会的信用度をあげるためには、儲からない活動でも割り切っていくべき。
- ・企業との協力、自然学校を生活につなげる、職業体験、科学コミュニケーター、大人の行事(子どもだけでなく大人にも体験、理解してもらう)※
- ・楽しいだけからの脱却、一般レベルの収入が得られるようになるには? プロとアマの線引き、資格・基準を設ける、ありえない体験、いろんな団体との連携※
(※はキーワードの抜粋のみ)

⑤振り返り・まとめ

最後は全員で1つの円になって座り、1人ずつ今回のワークショップで感じたことや考えたことを発表した。活動場所や職業の異なる人たちが1つのテーマについて考えた本ワークショップは、自然学校を今までより深く知る機会になっただけでなく、自然学校の将来に対する期待や、具現化するための方法について参加者同士が話し合う場になった。

身近な環境の総合的“明察”…内なる「マイ暦」を作ろう！

実施者：齊藤透（月の会（東京））、日鷹一雅（愛媛大学環境ESD）、
湊秋作（公益財団法人キープ協会（やまねミュージアム））

【概要】

暦の話を中心に、太陽の話、月の話を通して、それらの大切さや面白さがわかるワークショップ。五日毎に季節を感じ取る七十二候〔太陰太陽暦（旧暦）で使われていたもの〕を自分で創ってみることで、実際にワークショップ実施日のマイ暦をつくる。

【内容】

最初は、日鷹氏による、清泉寮新館ホールすぐ下の池のほとりで霜月の赤トンボの観察と散策アイスブレイク。「この寒い時期に赤トンボ?！」と意外に思うかもしれないが、例年清里ミーティングがギリギリの頃合い。（今年は残念ながら数日前に強い冷え込みがあったため見られなかった。）変温動物にとっては、太陽の光の暖かさが生命線。よく注意して見れば、日だまりに集まっている秋の最後の生物たちに気付けるはずだ。当日は荒れ模様のお天気が一転、快晴のお日様日和。正中に近く太陽はまぶしく、東の空には夕月が高く上っているのに一同歓声があがる。昼間に月をみながら、アイスブレイクの散策へ。室内プログラムのネタ探しをしながら、会場にブラブラ向かうというアイスブレイク。晴天の雲のダイナミックな動きや立冬にソフトクリームを食べてる人々の行動観察などをしながら、太陽・月・地球をまずは感じるプログラムの導入部分は楽しく過ぎた。

次は齊藤氏による暦の話。暦は集団生活に必要なスケジューラーであるが、元来は太陽と月と地球がおりなす自然の変化を示すもの（暦の種類と特徴は別表の通り）。季節は太陽との、潮・命のサイクルは月との位置関係で決まる。私たちが使っている西暦（太陽暦）は、月日そのまま季節を表し、毎年平均気温や平均降水量などを比較できる、季節を知るには優れたもの。太陰暦は、潮・命のサイクルを表し、漁業関係では必需品。太陽太陰暦（旧暦）は、両者を融合したもので、日には潮・命のサイクルを表し、月日はだいたいの季節を表すものの、正確な季節は二十四節気七十二候によるというものだ。

ここで、ネイチャーゲームの一つ、そのときその場での七十二候を自由に創作する「わたしの暦」というアクティビティ・プログラムを行った。全員で外に出て、そこで感じたことを書いたもので、雲の動きが早かったことから「青空に綿雲踊る」「山風に雲踊る」や、冷たい風が小枝を揺らしていることを表した「細梢冷風揺」、葉が落ちきった木を表した「落葉木裸」などが発表された。七十二候の創作を3年ほど行くと、日々の少しずつの違いがなんとなくわかってくるのだそう。西暦よりも季節の把握に骨を折る旧暦を用いている方が、季節に意を注ぐ分、季節感が鋭敏となるわけである。昔は当たり前のことだったのだらうけれど、自分なりのしっかりした季節感をもって生きていくなんで素敵なことだと思う。地域独自の季節暦があってよからうし、季節の他にも、偏頭痛や花粉症等の体調変化の暦も個人で作ることができそう。その場合には個人

でも作ることができそう。その場合には、太陽よりも月との関係の方が、重要な要素となるかもしれない。

暦は時間・空間のモノサシなので、ものの捉え方の根幹に関わる文化の基礎であり、人々の思考に深く影響を与えている。太陽暦の文化は、強い光に象徴される明るさ・強さ・明確さ・前進・右上がりをもとする太陽的理性・合理主義が、太陰暦の文化は、命のリズム、循環、儚さ、ものごとをかつちりわけけるのではない考え方が重視される傾向にあるようで、科学から宗教・文化とあらゆるものに波及する。他の暦（モノサシ）を知ると視点が変わって、今まで気付かなかったものが見えてくるかもしれない。

最後に、湊氏による月の話。月は地球の生物に影響を与えている。サンゴの産卵が潮の満ち引きに影響を受けたり、満月の日にはウナギは採れなかったり、太陽の動きで何でも決めてしまうのは西洋科学であり、西洋に流されてきているのではないかと考えている。また、ガリレオも望遠鏡で熱心に月を見ていたというが、月という未知なものは、科学の刺激になっている。

【まとめ】

太陽と月は地球上の生物、それらの生活に影響をもたらしている。暦は、その動き = 自然の移り変わりを知るための道具であると同時に、ものの捉え方の根幹に関わる文化の基礎。だから、自然・歴史・文化・風土・感性を楽しむのに、「西暦 Only」ではもったいない。スケジューラーとしての暦をカスタマイズするのと同様に、自然の変化を示す暦もカスタマイズして楽しもう。

【清里の夜空の観望会】 中村 照夫 /月の会（東京）

中村氏による観望会を、ミーティング開催中の2晩に亘り実施し、多くの方々に、木星とその衛星たち、さながら少女マンガのような煌めくすばる星団、濃厚なオリオン大星雲などを堪能いただいた。

（別表）暦の種類と特徴

		月との位置関係＝潮・命のサイクル	
		表す	無視
太陽との位置関係＝季節のサイクル	表す	太陰太陽暦（旧暦） ・「日にち」が「月の形」＝潮・命のサイクルを表す。 ・「月日」がだいたいの季節を表すが、正確に季節を表すのは「二十四節気」。 ※ 季節をわかろうとする努力により、季節に鋭敏になる。	太陽暦（西暦） ・「日にち」に意味が無い。潮・命のサイクルは表さない。 ・「月日」が季節を表す。（毎年同じ月日に、同じ角度・高度の太陽＝季節が到来する。） ※ 季節の把握には便利だが、安易過ぎてありがたみが無くなり、逆に季節に鈍感になる。
	無視	太陰暦（イスラム暦） ・「日にち」が「月の形」＝潮・命のサイクルを表す。 ・ 暦は季節を表さない。	X

農が X を助け、X が農を助ける～半農半 NPO でいこう～

実施者：内山歩(NPO 法人都留環境フォーラム)、西岡里子(NPO 法人都留環境フォーラム)

【概要】

本ワークショップでは、実施者の NPO 法人都留環境フォーラムでの活動を事例に、半農半 X という生き方について参加者で話し合い、自分にとっての“X”とは何かを探り、自分の理想の生き方を描き出すワークを行った。

【内容】

1. 実施者の自己紹介—大学を休学し NPO 活動へ

東京出身で農業はあまり身近なものではなかった。中学3年生の時の修学旅行で、秋田で半日農家体験をしてきた。この時に初めて農業と出会い、農業の気持ちよさに感動した。その頃は「農家にはならないだろうな」と思っていた。高校生のときに、課外授業で石釜と石釜パンを作ったことがきっかけとなり、学校の空き地で小麦を一から栽培した。初めてプランター以外の栽培をして、そこから作られた石釜パンを食べて「こんなに食べ物おいしいのか」と思い、農業の楽しさを知った。この作業が1つの転換点であった。大学3年間は、野生を育む子どもキャンプのサークルや農業サークルに所属し、活動していた。キャンプや農業サークルで土に触れる中で「もっと農業に取り組みたい、暮らしたい」という思いが強くなり、大学3年の終わりに大学を休学。NPO 法人都留環境フォーラムに入り、在来作物の保護活動に取り組んでいる。

2. NPO 法人都留環境フォーラムについて

NPO 法人都留環境フォーラムは、エコツアー、つながるエコカフェ、在来作物の保護普及事業などの事業を行っている。ここで、参加者から大学を休学して NPO に入ったことに関して様々な質問があった。

3. 半農半 NPO

塩見直紀氏が、持続可能な農ある小さな暮らし+天職 (X) 天の才 (個性や能力、特技など) を社会のために生かす生き方、暮らし方のことを「半農半 X」と提唱した。

4. 事例紹介—半農半 NPO のスタイル

○在来作物の保護者普及事業

「強くおいしい種を残したい」というコンセプトで、インゲン豆、大豆、菜っ葉などの在来作物の種を栽培している。活動は生産・体験・調査の3本柱で行っており、主な活動として、無農薬での種の生産・販売だけではなく、種の交換会という体験・イベントも行っている。また、山梨県内の農家2へ突撃調査を行ったり、山形の庄内地方などへ研修しに行ったりした。調査した結果、種は残っているが後継者はおらず、各地で在来品種が絶滅寸前にあるとわかった。『種採り文化』とは、強い種を残すために種の生産・販売を行っている。これからのビジョンとして、多様性ある強い種を次世代に残す (NPO 活動) + 農で食べていく (農業) の二つの両立できるスタイルとして、種屋・農家の中山間地域の新モデルについて話がされた。

5. 自給的農

農ある小さな暮らしとして、参加者に「どれくらいの土地 (面積) を耕せば、1 人分の食糧を自給できるのか。」というクイズがあった。「1 日に何をどれくらい食べるのか」を、考えてもらったものをもとに、「日本の3大穀物」として米、小麦、大豆の1年間1人あたりから計算。自給的農家になるとこれくらい10a 程度の面積があれば十分ということが分かった。参加者からは、「思っていたより広い」「大変そう」などの声も上がった。

6. X が農を助ける

農業や農的暮らしの実現には、その土地の地域性を知ることが重要である。NPO 活動で地域のつながりをつくり、それが農業に生かされたりすることが紹介された。半農半 NPO というスタイルは農と X が相乗関係にあるスタイルである。

7. X を探る

3 つの問いについてそれぞれで書き出すワークを行った。「楽しい、嬉しい、気持ちいい、自分が喜ぶこと」「貢献できること、気が付くと求められていること」「使命感、やりがい、情熱を持っていること」を3人組になって考えを共有した。そして、参加者の中で「自分のこれを教えたい。」「自分以外の人のここがおもしろかった。」などを発表した。

ワークを通して出てきたものが、自分にとっての天職となり得るものであるとして、2つ目のワーク「自分の理想とする半農半 X の“X”は何か」について書き出す作業を行った。「農」と「X」の理想のスタイルを具体的にかき、二つのつながりについても考えた。最後に参加者全員が発表しそれぞれ質問の時間を取った。中には、大学2年生の参加者の発表を聞き、年上の参加者からの人生のアドバイスも見られた。

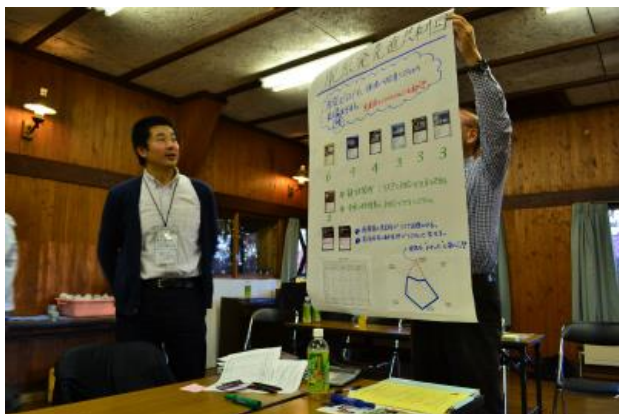
【まとめ】

実施者の経験談や参加者の考えの共有を通して、本 WS が半農半 X の今後の可能性が広がったと共に、実施者自身も改めて自身がやってきたこと、実現したいことについて振り返ることができた。



エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ

実施者：藤木勇光(J-POWER 電源開発株式会社)、小林庸一(J-POWER 電源開発株式会社)、
南栄助(J-POWER 電源開発株式会社)、古田ゆかり(サイエンスカクテル)、
小寺 昭彦(サイエンスカクテル)



【概要】

タイトル通り、エコとエネのつながりを考えるカードゲームを行った。参加者をグループに分け、各グループを1つの国と見立ててゲームを進めていった。エネルギーをどのように活用していくか、どのエネルギーを使用すると環境や経済に影響を与えていくか、暮らしを支えるエネルギーの安定的供給をどう実現するかについて数値化しながら理解を深め、じっくり話し合いをすることでエネルギー・環境政策を決定していくのだが、いかにエコとエネのバランスを取ることが難しいかを学べるワークショップであった。また、このゲームを行った上で、参加者全員でエコとエネルギーのつながりについてどう考えるか、将来の日本のエネルギーについてディスカッションを行った。今回の3.5時間ワークショップの中では、異色なプログラムではあったがとても考えさせられる興味深いプログラムであったと言える。

【内容】

カードゲームについて

1チーム4名に別れ、それぞれのチームに国の状況が書かれた国カードを引いてもらう。経済力や資源条件がそれぞれ異なり、こうした条件によってどの発電所を建設するかが大きく左右される。まず各チーム(国)は、それぞれの国名と国が掲げるマニフェスト(環境、料金(経済性)、自給率、稼働率の中から重視するものを2つ)を決め、建設する発電所を選択していく。発電所カードは水力発電、石炭火力発電、石油火力発電、太陽光発電、ガス火力発電、原子力発電、地熱発電、風力発電、バイオマス、ゴミ発電の10種類がある。それぞれ電気料金、自給率、設備稼働率、環境負荷の数字が記されており、それらを考慮しながら建設するカードを選んでいく。国ごとにコミュニケーションをとりつつ進めるプロセスそのものもプログラムの重要な要素になっている。

また、これらの発電所カードとは別にアクシデントカードが用意されている。気候変動、地震、反対運動、戦争、放射能事故、政策変更、電池技術革新、環境技術革新、資源開発などがあり、それぞ

などがあり、それぞれの発電所カードに影響を与える。第一ターム(前半戦)で、ひととおり発電所カードによる建設が終わった後で、各国の代表が裏面に伏せられたアクシデントカードを引くわけだが、技術革新などにより発電所の性能が上がる場合もあれば、放射能事故のように原子力発電に影響を与え、稼働率の低下、電気料金の上昇といった悪影響を国に及ぼすものもあり、何が起きるかはまさに偶発的に決まる。

第一タームで生じたアクシデントを踏まえて、第二タームでさらに各国はマニフェストに掲げた政策を実現するよう発電所を選択し、建設する。最終的に、ゲームのはじめに掲げたマニフェストに合致しているか、安全性、経済性、安定性、環境性などの6つの尺度に照らしてその国の国民満足度を評価し、発表しあうことで全体に共有した。単純なゲームにみえるが、建設する発電所のメリット、デメリットやバランスを上手く考えて先のことも予想しないと、アクシデントの対処が出来なくなるので、頭を使うゲームでもあった。

現在、大人・学生向けとしてこのゲームを何回か試しているとのことだが、興味深いことにこのゲームは参加者の属性によって、結果にも差が出てくると言う。例えば、今回はほぼ全てのチームが環境に配慮した発電所を建設し、清里ミーティングならではの結果であると評価できる。一方、J-POWERの社内で行った際は、自給率を優先的に考えた電源構成となっており、多様なメンバーが参加することにより、より多くの気づきと学びが期待できそうだ。ゲームを通じての対話とコミュニケーションがこのゲームの醍醐味と言えそうだ。今後は、さらに改良を加え、小・中学生向けにも展開していくそうだ。

【まとめ】

日本の電源構成の変遷は、水力発電が主流の時代から、戦後は石炭火力を経て安価な石油を使った火力発電へと移行したが、オイルショック以降、発電方式の多様化が求められ、30年以上の時間をかけて原子力や天然ガスなど石油代替エネルギーの開発と導入が進められてきた。そして、去年の東日本大震災と福島原発事故により、原子力依存の抑制、再生可能エネルギー推進が求められている。持続可能な社会の実現に向けて私たちの生活スタイルや、使用するエネルギーも不断に見直さなければならぬ。そして私たち国民も、自分事としてこの問題に向き合わなければならないのだと、気付かされたワークショップであった。

森で教える国語・算数・理科・社会をつくっちゃおう！

実施者：萩原ナバ裕作(岐阜県立森林文化アカデミー)、長沼慶拓(岐阜県林政部林政課)



【概要】

総合学習の時間の減少、科目割り構造、体験と学びの乖離、地域や暮らし、自然との乖離、学びの目的の喪失、考える力、生きる力の喪失など、小学校教育が抱える様々な課題を楽しく改善しちゃおう！というのがねらい。

そのひとつの方法として今回注目したのが、単なる環境教育として「森を教える」のではなく、全科目を「森で教える」という大胆なアプローチ。

本当にそんなことできるのだろうか？

そこで、実施者がまとめた学校学習指導要領の「簡易版」を見ながら、学年毎のチームに分かれ議論し、森をフィールドに学習指導要領の目標をカバーできるようなカリキュラムが本当にできるかどうか実際に作成してみた。

その結果、仮に「森」を学びの場としたとしても現指導要領にある目標項目はほとんど網羅できるという可能性が見えてきた。

【実施内容】

1：導入

清里の澄んだ秋の空のもと、焚き火を囲んでの始まりの時間。自己紹介やワークショップに期待することを共有したあと、今回のゴールを共有。

小学校の学習指導要領で学年別に定められている各教科の課題と目標は、森をはじめ野外や地域の環境を活用すれば、学びの面からみても効果的に達成できるのではないかという実施者の提案があった。また、過去に岐阜県で実施した同様のワークショップの結果も参照してもらった。

参加者の指導経験歴が均等にばらつくよう、1・2年担当、3・4年担当、5・6年担当の3班に分かれ(1班5名程度)、ワークを開始した。

2：グループワーク

小学校学習指導要領の「簡易版」に目を通し、担当学年の科目毎の目標を確認したあと、森をフィールドに実現できそうな「活動」

達成できそうな「項目」をポストイットに手分けして書き出していた。また、それぞれの活動を時系列順(1.計画段階、2.道具等の準備段階、3.実施段階、4.まとめの段階、など)に分け、模造紙に整理していった。

例えば、計画段階の『学校から森への行き方を調べる』という活動が行われると想定した場合、社会、算数、国語などの目標がうまく対応することや、「必要」から生まれる「学び」としてつなぐことができることに気付いた。

各グループともにアイデアを出し合い、約2時間、たつぷりと時間をかけてカリキュラム案を作った。

【結果発表】

焚き火で作った焼き芋を食べて小休止した後、グループ毎に森をフィールドにしたカリキュラムの内容を発表し合い、気づいたこと共有した。出てきた意見としては、

「小学校低学年では、目標項目が比較的少なく、多くの目標を達成できる。また、音楽などの芸術性を養う教科への展開の余地も期待できる。」

「小学校中学年では、調査系の目標が多く、理科・算数などの知識ベースを構築し実践する活動の場として森が活かされる。」

「小学校高学年では、自分の成長や家族を支える役割を担うという目標もあり、下級生に遊び方を教える活動などで達成することが充分可能である。」「結構達成できちゃうもんですね。」というのが全体の印象。

【まとめ】

本ワークショップによって、小学校の学習指導要領に定められている学年毎の課題・目標は、体育における水泳能力獲得などの例外を除けば、森での活動を通してほとんどが達成できる可能性があることが明らかになった。

全ての授業を森で行うことが重要なのではなく、「こんなことが可能である」という感覚を教員や学校教育に関わる人間が認識し、教科書を鵜呑みにして教えるのではなく、目の前にある地域の資源(自然・人材・文化)を活用した「ほんとうの学び」を創出していくことが重要である。

※本ワークショップで作成したカリキュラム案については、『ぎふ森林づくりサポートセンター』のHP(ブログまたは「木育・森林環境教育」のページ)からダウンロード可能。ぜひ見ていただきたい。

木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向けて～②

実施者: 佐々木豊志(くりこま高原自然学校)、大場隆博(栗駒木材)、河野格(NPO 法人都留環境フォーラム)、尾立愛子(アース・ビジョン 地球環境映像祭)、宇津留理子(アース・ビジョン 地球環境映像祭)

【概要】

午前のWS12に引き続き、森林の現状や木質バイオマスに対する栗駒木材の取り組み、持続可能な復興共生住宅「手のひらに太陽の家」の報告を基に今後森林資源をどう活用するかについて、参加者と共に話し合った。

【内容】

◆森林の現状

日本の国土の66%が森林である。そのうちの58%が私有林である。過去40年間で林業者は1/5に激減したが、使われていない木材の蓄積量は40年間で2倍に増えた。この木材を使用すれば30～40年の蓄積量があるが、山から木を切り出す仕組みがないのが現状である。

◆栗駒木材の取り組み

・社是・全てにおいて安全を追求する。

木材の70%が、製材端材やおがくずである。これらを木質ペレットとし、工場内の木質乾燥炉に使用している。木材の化学薬品処理によるアトピー問題がきっかけで、昔ながらの燻煙乾燥に切り替えた。

・地球との共生を目指した仕事をする

自分たちの仕事は人々の暮らしをつくる仕事。林業は100年を考える仕事、家も100年を考える。本物の追及をする。(自然と向き合う)。家には作り手と、住む人の気持ちの乗り移る。一緒の家づくりをすることで、住み継ぎの家を作る。役割分担の仕事(循環する社会を目指す)

◆未来の林業を目指して

- 山から木材を直接工務店(施主)に届ける。
顔の見えるお付き合いが家と人を結びつけ、家が人と自然を結びつけてくれる。
- 100年一回りの林業
元気な森を作るために、光合成の能力が落ちる60～100年を目安に伐採植林をする。
- 森を森に戻す適材適所の森づくり
山の地形、植生に合わせた森づくりを行う。保水力ではなく保土力の山造り。
- 地形に合わせた植林を行う
皆伐林業をやめ天然更新林業へ転換する。
はげ山にせざる多様な森づくりをする。
- 今後広葉樹を建材に使用できるように、建材様式を変えていく。山と家造りが一体とならないと出来ない。
- 高性能林業機械を使わない自伐林業方式への転換
誰でも林業へ参加できる土佐の森方式を取り入れ、100ha当たり3人の雇用を目指す。

◆山は新しいエネルギー産業

- 石油に変わる地元のエネルギー
- 林業と農業がエネルギーを生み出す
- バイオマス発電への取り組み
- CO2の排出権取引の開始

◆今後の展開と目標

『木材を通して循環型社会の構築』『山づくりから家づくり家具、教育までのくらしの構築』『未来の林業の実現』『エネルギーの新たな開発バイオマスエネルギー』『異業種間交流連携(同じ森の活用での新しい産業)』『地域の雇用の確保』『都市から田舎へお金を持ってくる』『一次産業の復活が未来の日本をつくる。』

○手のひらに太陽の家○

放射線が高い所に住まざるを得ない福島県の子どもたちを受け入れている。自然学校の佐々木氏、木材屋の大場氏が出会い、自然環境と共生した持続可能な暮らしを創造するという、共通の基本的理念を持つ。『従来の仮設住宅に変わる安心して暮らせる生活の場を!!』という想いから、持続可能な復興共生住宅「手のひらに太陽の家」がうまれた。放射線から福島の子どもたちを守るための寄宿住宅、内部に事務所を持ち被災者をサポートする。地元の材木、木質バイオマス燃料の利用を提案するエコハウスのモデルとなっている。今後震災復興の方法として、循環可能な地域資源を活かす一次産業の再生。東北では至る所でやっていた馬文化、馬搬(馬で木を引き出す)。現在伝承者2名の後継者を育てる「馬と森と農の学校」を造りたい。

◆自然エネルギー推進自然学校ネットワーク設立報告

2012.3 設立60名のメンバー、10月現在150名。キックオフイベントとして、「自然学校が自然エネルギーで社会を変えよう」をテーマに自然学校エネルギーフォーラムを東京(6/14)、京都(10/26)で開催した。

◆意見交換

午前、午後の報告を基に参加者は、森林資源をどう活用していくかについて意見を出し合った。女子校に森林環境教育、林業女子会、全国森志マップ作成、消費者の目線で商品化、全国一斉ニーズ調査、モニター実施、ペレットストーブ×通販生活、ペレットストーブ×全国住宅展示場メーカー等の具体的な意見が出された。

◆まとめ

木質バイオマスを始めとして、今後も森林資源をどう活用していくかについて、いろいろな人が繋がって、いかに配信をしていけるか情報交換をし、来年の木質バイオマス2へ繋げていきたい。

2 日目

全体会 2

全体会 2 総合司会：(公財)キープ協会 増田 直広

2-1 「+ESDプロジェクトについて」

環境省 総合政策局 環境教育推進室 宮澤 由紀女史

2-2 「JEEFってなに？何ができるの？」

JEEFに期待します！」

<司 会> (公社)日本環境教育フォーラム 林田 悦弘

1. JEEF 最新トピックス紹介と活用法 事務局長 瀬尾 隆史
2. JEEF 学生部紹介
学生部 (日向 有美、長野 美彩、太刀川 みなみ、江利川 法孝)
3. 意見交換



2日目 全体会2

2-1 「+ESDプロジェクトについて」

環境省 総合政策局 環境教育推進室 宮澤 由紀女史

環境教育推進室の宮澤女史には、+ESD プロジェクトについてお話しいただいた。

+ESD プロジェクトには、ウェブサイト上

(<http://www.p-esd.go.jp/top.html>) に登録するシステムのものである。ESD は前日のプレゼンテーションなど、あちらこちらで聞かれた言葉であり、持続可能な開発のための教育ということで、環境の分野だけでなく人権や貧困などを含む課題を解決し、持続可能な未来を築く担い手を育てることが目的であると述べられた。現存する多くの環境教育を ESD という視点で捉え直すことで、より持続可能な社会を築く人づくりに、貢献できるものになるのではないかと考えている。今、環境省では、ESD の視点を色々な既存の環境教育にプラスしていく方向で、このようなプロジェクトが進められている。

そしてなぜ、今 ESD なのかということに関しては、北橋女史の話にもあったリオ+20 でも、ESD の推進が成果文章や日本政府のイニシアチブに出ていること。また、2011 年 6 月に改正され、2012 年 10 月 1 日に完全施行になった環境教育等による環境保全の取り組みの促進に関する法律（略称で環境教育等促進法）というものがあり、こちらも議員立法で持続可能な社会の構築を目指し、学校、社会、あらゆる場においての環境教育を進めることが重要であると文中でうたわれていること。更には、2005 年から始まっていた国連 ESD の 10 年が 2014 年に最終年を迎えることにあるという。この 2014 年を迎えるにあたり、愛知県の名古屋市と岡山市でそれぞれ 2014 年の 11 月、ESD の 10 年の最終年会合である国際会議が開催されることと決定されている。その国際会議では、日本には地域に根ざした非常に良い ESD の活動が多く存在するので、名古屋で行われる閣僚会議において、世界に日本が ESD の取り組みを多く行っているということ、また、こんな良い取り組みもあるということ発信する良い機会にしたいという意思もあるということである。このような事情があり、ESD の取り組みを目に見える形で集めていこうということで、+ESD プロジェクトというものを実施している。このプロジェクトは、ESD と言ってもなかなか難しく、わかりにくいので、実際どのような取り組みをしているのかを見える化をするために、WEB サイトに登録してもらい、見える形で集めようという取り組みである。

この取り組みでは更に、登録した人同士が繋がりを持つような仕組みを設けており、活動者同士とか、活動者を支援したい人、支援する事業を持っている人を繋げようということも、+ESD プロジェクトの大きな目的である。ただし、この繋がりを目的にしている仕組みについては、ある程度の登録数がないとメリットが少なくなってしまうため、活動をしている人は登録して欲しいと会場に呼びかけた。

また、+ESD プロジェクトに参加すると次のようなメリットを次のように挙げた。NPO などの民間団体にとっては自分たちの取り組みを広く周知でき、環境教育などの社会活動を行っている仲間との繋がりを作ることが出来、イベントに参加してもらい機会も増える。更に、学校との繋がりも生まれれば、学校教育への進出、提案をしやすくなる。企業にとっては、自社の CSR 活動などを他の活動者向けに情報発信ができる。大学などにとっては、実施している環境人材の育成プログラムを登録することなどによって、教育方針や地域社会への貢献をアピールすることができる。地方自治体などに

とっては、地域のプログラムの知名度が上がり、参加者の拡大や地域の振興が期待できる。また、+ESD のシステムでは、支援事業も登録できるようになっているため、基金や支援法人にとっては、基金や支援法人にとっては支援内容が広く知られることにより、有料の案件の応募や採択に繋がる。以上のようなことが各所にとってのメリットとして挙げられた。そして次には、どのような活動が ESD の活動として登録できるのかというところが話された。

今までは環境教育推進室も広めにどのような活動でも登録ができるようにしていたが、あまりに広すぎると、よくわからなくなってしまいうということがあり、少し前から目安として ESD の活動について整理したチェックシートを作成した。しかし、まだ日本語がわかりにくい部分もあるため、これから少しずつ改善をしていく必要があると述べつつ、資料を使用しながら話を進めた。

前提としては、持続可能な社会づくりに関わる活動なのかどうかということであり、活動の中で次の 6 つの概念“多様性”“相互性”“有限性”“公平性”“連携性”“責任性”の中のいずれかを取り扱っている、もしくは、念頭において活動を実施しているかどうかということが、自分の活動が ESD であるかどうかという部分を判断するポイントであり、同チェックシートには、ESD に関する課題を解決するために必要な 7 つの能力についてチェックする項目もある。このチェックシートを使用することで、課題達成のために必要な能力に関しても確認することができる。活動をしている方々に、1つ1つの取り組みをチェックシートにあるような視点で見ただけ、もし、あてはまるようであれば、登録をして欲しいと述べた。チェックシートの分類は文部科学省の国立教育政策研究所が作ったものをベースにしたものであり、学校での授業を念頭に置き、作られているので全ての活動が学校でされているというわけではなく、少しずれている部分がある可能性がある。しかし、環境教育推進室として文部科学省で作られたものを使用している意図は、新しい学習指導要領の中に、色々な教科で環境教育が散りばめられているため、学校教育の中に入り込みたいと考えた。学校教育は広くみんなが受けるものであるため、NGO 等の外で実施されているものを学校教育に取り入れることで、非常に多くの子どもたちに影響を与えることができるのではないかと考えた。このような意図で現在、実施しており、学校外の環境教育の活動も文科省的視点で少しチェックすることで、学校教育に入りやすくしていきたいと考え、予算もそのような方向で動いていると話された。

最後には、+ESD プロジェクトに登録を是非して欲しいというお願いの言葉で話を終えた。

質 問

Q1. 現時点ではどのくらい登録があるのか。

A. 宮澤女史

現時点では 200 ぐらい。しかし、全国でなので、47 都道府県で割ると非常に少ない。多いところは非常に多いが、少ないところは 1 個とか、場合によっては 0 個とか、そういうところもある。

Q2. 目標数とかあるのか。

A. 宮澤女史

数字の目標はそろそろ立てるときかなと思う。しかし、今のところまだ立てていない。今は、ケタを変えていこうとは思っている。

Q3. 数が0のところを言ったら、その地域の方がいたら入れてくれるかもしれない。言ってみたらどうか。

A. 宮澤女史

出来れば、お伝えしたいが、資料を持ってきていないため、どこが0個だったかわからない。しかし、0個のところそれなりの数あった。低迷気味なのは北の方。

2-2 「JEEFってなに？何ができるの？JEEFに期待します！」

司会：(公社)日本環境教育フォーラム 林田 悦弘

今回の清里ミーティングの特徴の1つは、約6割の方が新しく参加された方というであった。そこで、日本環境教育フォーラム(略称、JEEF)とは一体何なのか、どのような団体なのかということ、改めて説明と案内をさせて頂いた。

その後、JEEFの学生部からも報告を行った。そして、最後には質疑応答の時間を設けた。

1. JEEF 最新トピックス紹介と活用法

事務局長 瀬尾 隆史

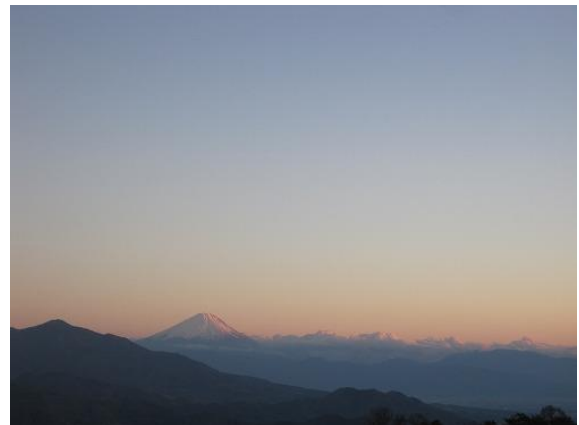
まず始めに7月に事務局長となった瀬尾の自己紹介から始まった。瀬尾はJEEFの事務局長となるまでの39年間は、安田火災、そして損保ジャパンという形で損害保険の会社で働いていた。1997年から2003年まで環境の部門で仕事をし、その時に初めてJEEFという団体と出会った。環境の部門にいた間色々学んだが、最大の学びはNGOというものの存在を知ることであると述べた。特に当時の安田火災のトップの考え方でNGOと対等に付き合い、NGOから企業は学ぶべきであると教え込まれた。今回の清里ミーティングでも、NGOの力のすごさをつくづく感じる。現在、NGOの一員として働いていてJEEFとしてできていないことが多くあると感じており、そのできていない部分を色々な方々から聞き、JEEFの今後の方向を決めていと考えていると述べた。

次に述べられたのは、JEEFとは何か、そして何ができるのかということである。JEEFが公益社団法人になったのは、2年半ほど前であるが、営業活動ができていない団体である。JEEFが行っていることの概要は6つ、「環境教育の実施・支援」「指導者養成・研修」「海外での環境教育関連事業の実施」「教材作成・調査研究」「環境に関心を持つ人たちのネットワークづくり」「情報提供」である。環境教育の実施支援の例として、瀬尾が損保ジャパン出身ということもあり、「市民のための環境公開講座」と「SAVE JAPAN プロジェクト」を挙げて話をした。「市民のための環境公開講座」はJEEF、あるいは日本企業とNGOの連携事業としても、当時からの極めて先駆的な取り組みであったと思われるが、1993年から実施し、来年で20年になる。清里ミーティングも同様であるが、長く続けるということにはそれなりの意味がある。教育とは1年や2年でできるものでなく、長く同じことを続ける意味があるのではないかと考えている。当然、全国のNGOの方々とも一緒に仕事をする機会もある。その例として、再び損保ジャパンとの連携である「SAVE JAPAN プロジェクト」を例に挙げた。これは、去年から開始したプロジェクトである。保険会社と契約すると約款とを渡すが、これを電子化し紙を使わず作ることに賛同頂いたご契約者の方に対し、そのコストを返すのではなく日本全国の生物多様性保護の活動に充てる取り組みを行っている。去年から損保ジャパンは赤字だが2年目の今年も実施している。その取り組みの中で、全国のNGOのそ

のような活動をJEEFとして損保ジャパンに色々紹介をし、それぞれの県で色々なイベントを協力してやっていると紹介をした。

その他の5項目に関する説明は省略されたが、いずれにしてもNGOの中間組織としての役割を果たすことや企業とNGOをつなぐといったことに関しても行っていく必要があると考えていると語った。

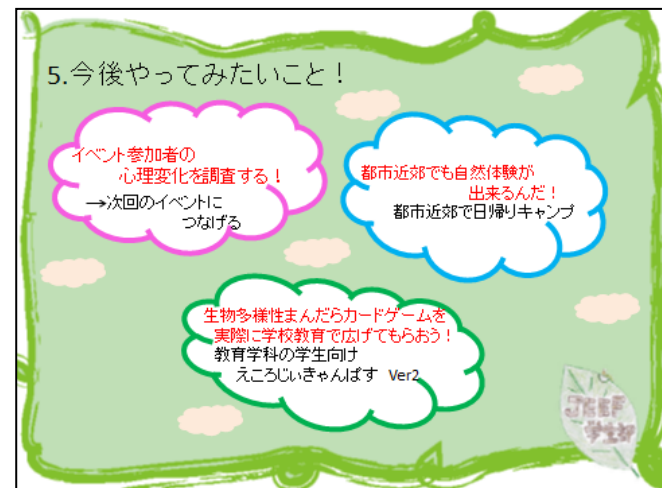
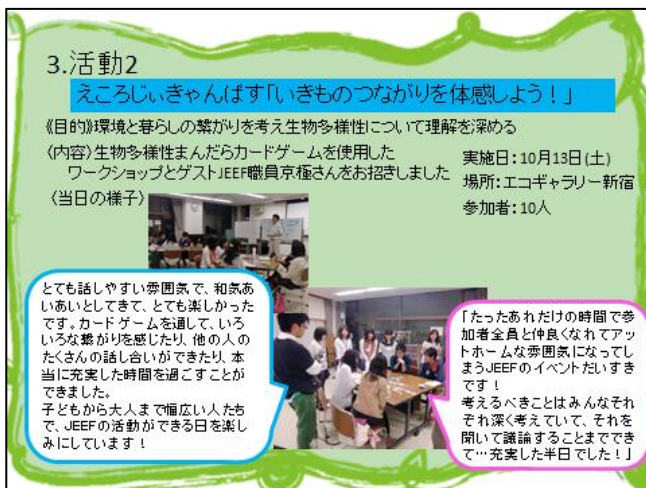
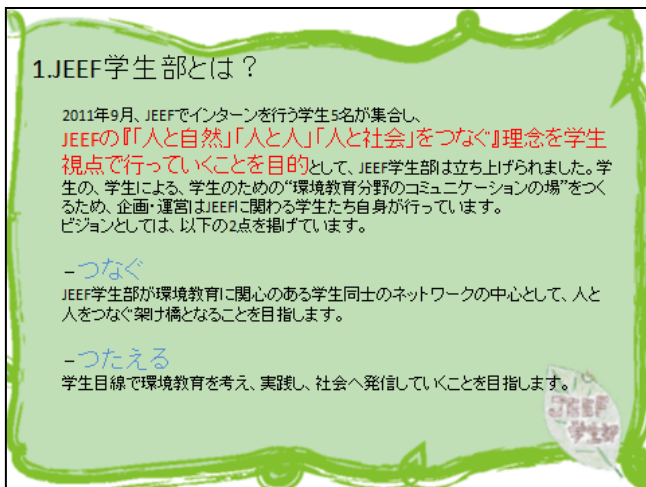
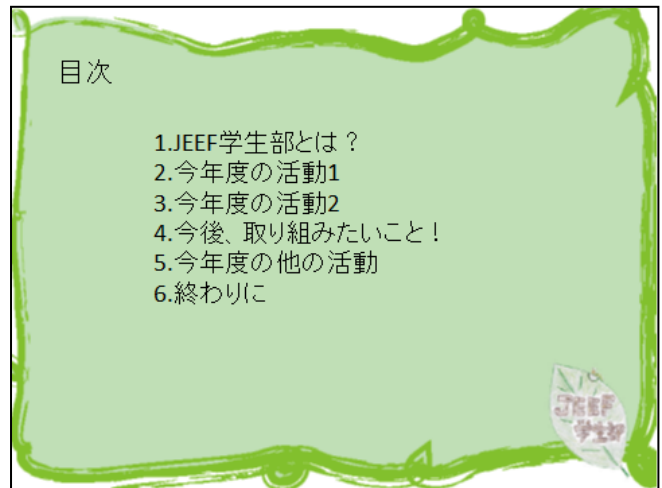
更に、瀬尾からJEEFの会員についての話をした。去年まで、清里ミーティングへ初参加される方に対し、参加費の中にJEEFの会費というのが自動的に含まれており、1年間会員になってもらい、色々な資料等の送付を1年間行った上で期間終了前に継続の案内をし、会員の増強を図ったが成果が上がらなかった。今年からは参加費には会費を含めないが、ミーティングに参加いただいた方で非会員の方に半年間、会員並の特典を提供するという方式に変更した。その半年経過した後に会員になっていただける方には、会員になって頂きたい。また、会員になりご協力いただけるよう、JEEF事務局全員で活動をなお一層充実させていきたいと最後締めくくった。



2. JEEF 学生部紹介 学生部（日向 有美、長野 美彩、太刀川 みなみ、江利川 法孝）

JEEF 学生部の発表は、2012 年度の学生部の活動の紹介と YELP の事業についての紹介がされた。

以下に、学生部が作成したパワーポイント資料を掲載させていただく。



6.他にも・・・

YELP TEEN 環境キャリアカフェ

みどりフェスタ サイエンスカフェ

メンバー募集中!

定期的に行っているミーティングへの見学も大歓迎!

・環境活動に興味のある学生募集中!
一緒に明るく・楽しく・元気よく!活動しませんか?
興味のある方はお気軽にお声掛けください!

ご静聴ありがとうございました。

代表:日向有美
BLOG:http://blog.goo.ne.jp/ieef_gakuseibu

YELP
Young Environmental Leadership Program
【アジア青少年環境リーダーネットワーク事業】
「リーダーズ・ミーティング in Japan」
ご協力をお願い

(公社)日本環境教育フォーラム

YELPとは

- YELP (Young Environmental Leadership Program) は、アジア青少年環境リーダーネットワーク事業(若者)は、将来環境リーダーとしての活躍を目指すアジアの若者に向けて多種多様な学習機会を提供するプログラムです。

Copyright ©Japan Environmental Education Forum. All Rights Reserved.

リーダーズ・ミーティング in Japan 滞在スケジュール

アジアで環境活動を志願する若者を日本に招待し、日本の若者や環境教育関係者との交流を図ります。これまでベトナム、シンガポールで開催してきた当イベントを、本年度は日本で開催いたします!

日程	内容
2/18(月)	到着、ウェルカム・パーティ、オリエンテーション(会場:日本環境教育フォーラム会議室)
2/19(火)	参加者ワークショップ(会場:日本環境教育フォーラム会議室)
2/20(水)	体験学習一 東京近郊の自然・文化と体験と学び(高尾山または御岳山を予定)
2/21(木)	体験学習二 大都市・東京を見つける。環境の知恵 午前:自然環境&下町文化を知る(上野フィールドトリップ) 午後:都会での新たな挑戦(銀座ミツバプロジェクト 等)
2/22(金)	体験学習三 持続可能な社会に向けた解決策を探る 午前:世界で注目される日本の技術(プラスチックが脚に变身?一株式会社プレスト) 午後:環境省訪問(予定) 等
2/23(土)	午前:公開フォーラム準備 午後:公開フォーラム(都内100名規模の会場) テーマ「アジアの若者と考える。環境・社会・未来」 参加者と一緒に情報交換・交流の場、基調講演を交え、アジアの未来を若者たちと参加者全員で考えます。 夜:フェアウェルパーティー
2/24(日)	帰国日

Copyright ©Japan Environmental Education Forum

ご協力をお願い

JEEFでは2013年2月に実施されるYELPリーダーズ・ミーティングのご協力を募集しています。さらに、アジアの未来を担うエネルギー若者を応援いただけませんか。若者との生の交流を通して、是非、アジアの「今」を感じてください。

- 協賛(スポンサーシップ)** 法人:10 5万円
【ご協賛メリット】
・ウェルカムパーティ、フェアウェルパーティへのご招待
・公開フォーラムの関係者様ご同席
・看板、配布物、ウェブサイトへのロゴマークの表示
・会場の露出サンプリング(ご希望の場合のみ)
・会場の露出(ご希望の場合、2口以上の法人様のみ)
・会場の露出(ご希望の場合、2口以上の法人様のみ)
※事業報告書を送付いたします。
- 寄付(個人・法人問わず)**
1月からご寄付いただけます。
また、ご希望の方には、ウェブサイト及び配布物にお名前を掲載させていただきます。
【口座: 東京三菱銀行新橋支店 普通1004281 公益社団法人 日本環境教育フォーラム(同趣会行)】
※税額控除について(寄付金の合計額-2000円)×40%が、直接、税額から控除されます。
※ファンドレイジングサイト<http://fundraising.jp/03248>からもご寄付いただけます。
- その他の協力(個人・法人問わず)**
現在、以下の内容のご協力を募集しています。
・宿泊先の募集提供または貸付提供(ホームステイも可能)
・交通・食料のご提供
・参加者への記念品提供
・公開フォーラム会場の募集提供または貸付提供(100名規模を想定)
・ボランティア協力(通訳ボランティア、通訳ボランティア、制作ボランティア)

【お問い合わせ】
(公社)日本環境教育フォーラム(担当:坂本,日村)
TEL: 03-3550-8770 FAX: 03-3550-7616
Email: ieef@ieef.or.jp
HP: <http://jeef.or.jp>

Copyright ©Japan Environmental Education Forum

3. 意見交換

司会：(公社)日本環境教育フォーラム 林田 悦弘

【参加者】

生物多様性のカードゲームの貸し出しなどはしているか?

【JEEF】

生物多様性を普及するという目的があり、そのために基金を使って作成したもので、在庫があれば無料で進呈できる。残り10セット程度あるのでそれをお送りできる。

【参加者】

対象は小学生も使用可能か。

【JEEF】

小学生でも問題ない。
カードの在庫が切れた後はインターネットからダウンロードという形で皆さまに提供できるようにする予定。

オプションプログラム

◆環境教育プレゼンテーション

1日目:11月17日(土) 夕方の部

1日目:11月17日(土) 夜の部

2日目:11月18日(日) 夜の部

◆早朝ワークショップ 2日目:11月18日(日) 7:00~8:00

- 科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」
- みどりとともにだちに！泥んこ遊び de 苔玉作り
- キープ協会「アニマルパスウェイ」見学ツアー

◆当日募集ワークショップ 3日目:11月19日(月)

- 白川郷に伝わるネソの技で橋をかけよう
- エコロジカル・シンキングゲーム
- ジオ×環境教育 ー生きている地球を伝えたい！でもどうやって？ー
- ウィルダネス ファーストエイド～仲間を守るその技術
- ESD(えっ、それから、どうするの？)学びのネットワークの活かし方
- ハーブ&アロマCafé
- 体験！小学校で実施した環境アクティビティ
- みんなでつくる みんなで考えるWS～福島を森を取り戻すには…～
- 都市型環境施設のノウハウお伝えします！！
- 空を眺めてみよう ※早朝実施

(実施者名、敬称略)

環境教育プレゼンテーション

1日目：11月17日(土) 夕方の部

◆NTT グループの環境教育 CSR 活動について

実施者： 阿久津 好太 (NTT GP エコ)

内 容： NTT グループの環境教育 CSR 活動についての紹介。

- ・GIN (Green with Team NTT) 活動
- ・環境教育 (ソーラーカー、天文台、グリーンポテトライト)
- ・CSR 報告 他

◆中学校と地域が連携した環境教育・ESD の実践

実施者： 坪松 美紗 (立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科)

内 容： 静岡県伊豆市立天城中学校と東京都多摩市立東愛宕中学校での地域と連携した環境教育・ESD の実践の報告。中学校という場で環境教育・ESD を行うことが地域にどんな役割を果たしているのか、また学校教育で環境教育・ESD に取り組む意義について考えた。

◆学校と地域をつなぐ環境教育コーディネートの実践報告

実施者： 丸谷 聡子 (明石 のはら くらぶ)

内 容： 兵庫県が全公立小学校3年生を対象に実施の「環境体験事業」において、多くの学校から相談を受け質の高い体験の場づくりに取り組んできた。その結果、教員が身近な自然の価値に気づく、行政、地縁組織、NPO 等のワーキングネットが広がるなどよい方向に進んでいる。大人の意識が変わることで、子どもたちの自然を感じる豊かな心が成長し自分たちができることは何かを考え行動する力が身についてきた。これらの実践事例を紹介し、環境教育コーディネーター介在の重要性や今後の展開等について参加者の意見をいただいた。

◆礼文島における子ども自然活動 (キャンプ) の取り組み

実施者： 岩淵 渡 (ネイチャーガイドのニングル)

内 容： 北海道・礼文島で、共にフィールドを歩いてくれる人を清里ミーティングにて一本釣りし、礼文島に暮らす人たち (リゾートバイトの人たちのことではない) と、いつものようにコミュニケーションを図りながら、へえ〜、しょうろく。(礼文島ではそう言われている) じゃなくても、日本にはたくさんの方が「子どもたちの自然体験活動で」何かを伝えたいという人がいるんだ (〇) という機運を創っていくためのプレゼンテーションを行った。

◆子ども主体の環境教育—川における「楽しみ」の体験—

実施者： 後藤 瑛 (吉野川シンポジウム実行委員会「川ガキ養成講座・川の学校」)

内 容： 第十堰可動堰化問題の住民運動後始まった「川の学校」では、子ども1人1人がやりたいことを決め、遊ぶ。決まっているスケジュールは食事と、講師や地元の川遊び名人から話を聞く「夜話」の時間だけ。自由なキャンプで子ども達とボランティアスタッフが得る川での「楽しみ」の体験とは、そしてその体験にはどんな意義があるのか、中学3年生の時に子どもとして参加し、3年間ボランティアスタッフを経験した立場から話した。

◆トンデモないがっこう 岐阜県立森林文化アカデミーのヒミツ

実施者： 萩原 ナバ 裕作 (岐阜県立森林文化アカデミー)

内 容： 学内演習林で遊ぶ森のようちえんの子どもたちの横では、木こりを目指す学生がチェーンソーをふりまわし、木工家を目指す学生は、学内のプレーパークで工作する子どもたちから本質を学ぶ。環境教育を専攻する学生は、笑いながらゴミ箱をあさり、水びたしになり、鼻でドングリを飛ばす。。。幼児、小学生から主婦、じいちゃん、ばあちゃんまで、異年齢が集い、混ざり、共に学びあう、不思議でマジメな学校、岐阜県立森林文化アカデミーのヒミツを教えた。

◆トレッキングブームの現状と未来を語る

実施者： 林田 悦弘（公益社団法人日本環境教育フォーラム）

内 容： 今、山ガールだけでなく全世代にわたるトレッキングブームが起きている。

この時間では、「あなたもこれから山ガール」講師で、現在はテレビ朝日「大人の山歩き」にレギュラー出演している「橋谷さん」を特別にゲストとしてお迎えし、このトレッキングブームの現状とこれからの展望について面白く語っていただいた。

◆小さな農的暮らしから創造する大きな未来

実施者： 吉田 峻平（どろんこ村小笠原農園）

内 容： 私達の生活は科学技術の発展により、物理的豊かさや快適な暮らしを実現してきた。しかし、その一方で大切な自然環境や農地を失い、環境問題や食料・人口問題を引き起こしてきた。私達はそのままでもいいのだろうか？愛知県の渥美半島で自給自足的な暮らしをベースに様々な取組を行なうどろんこ村では地球が長生きできる生活で次世代にメッセージを発信し続けている。

◆食農教育における農家の役割とは

実施者： 牧野 真弓（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）

内 容： 京都日野市の学校給食を通じた食農教育の事例から、そこに関わる農家自身が「学校給食とは何か」について様々な想いを語る中で見えてきた、食農教育における「農家の役割」について紹介した。食農教育は子どもたちの豊かな心を育てるための教育なので、やはり子どもたちへの効果や体験学習自体に注目されがち。しかし、その場を支える農家の人達にも期待以上の多様な役割や変化があることが彼らの語りからわかる。

◆自然農と手づくり循環生活 実践記

実施者： 梅崎 靖志（風と土の自然学校）

内 容： 山梨県都留市に拠点を移して1年。地に足のついた暮らしをベースに、家族で自然学校を営んでいる。「パーマカルチャー」と「手作り循環生活」をキーワードにしたわが家の取り組みと、持続可能な循環する暮らしを手作りする魅力の紹介に加え、自分らしいライフスタイルを実現するための基本的な考え方について話した。

◆家族である犬との死別を含む飼育経験から得たものとは

実施者： 金子 直裕（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）

内 容： 家族である犬との死別経験を持つ飼主の語り、その飼育経験を通して飼主が得たもの、その飼主の思いとともに紹介した。動物という一面を持ちつつも人間である私たちの生活に身近な存在であるペット、今やペットに深い愛情を持つことは珍しいことではない。そのような存在は私達の生活にどのような影響を与えているのだろうか。本発表が人と自然の一部である動物との関係性を考える一助となるよう実施した。

◆那須平成の森プログラム事例 ～特別支援学校対応～

実施者： 本間 裕子（公益財団法人キープ協会（那須平成の森））

内 容： 那須平成の森では、障害を持つ方からプログラムの依頼を受けることが多くなってきている。今回は特に、特別支援学校の対応についてご紹介した。みなさんが持っている特別支援学校の生徒さんに対してどんなイメージを持っているのだろうか？「よくわからない」「大変そう」など負のイメージを持っている方も多いのではないかと。一緒にプログラムを実施した時から教わることの多さや楽しさを伝えるよう報告をした。

◆絶滅危惧種「昆虫少年」の保全生態学

実施者： 岩本 二郎（新潟県長岡市立科学博物館）

内 容： 今日、環境教育は各地で行われているが、実はかつての農村においても、子どもは家の農作業を手伝う中で地域の動植物の種名を親から教わっており、それが身近に行われていた。新潟県長岡市立科学博物館では、児童生徒の自由研究を集めた県下生物標本展示会を61年間開催し続けているが、出品者数は減少し続けている。その「理科離れ」の背景として、産業構造の移行に伴う学びの変化について、かつての出品者の証言を元に報告した。

◆月曆の魅力のエッセンス…西曆 Only ではもったいない…

実施者： 齊藤 透 (月の会 (東京))

内容： 月曆は非科学的迷信ではなく、太陽曆 (西曆) と同等に科学的なものである。曆は時間・空間のモノサシなので、ものの捉え方の根幹に関わり、科学から宗教・文化とあらゆるものに波及する。自然・歴史・文化・風土・感性を楽しむのに、「西曆 Only」ではもったいない。他の曆 (モノサシ) を知ると視点が変わって、きっとあなたにも今まで気付かなかったものが見えてくる…。そういう心の豊かさの膨らませ方が素敵ではないかと参加者に尋ねるような機会にした。

1 日目：11 月 17 日 (土) 夜の部

◆キツネのお腹の虫はあぶない?! 学校・地域での取組み

実施者： 小林 峻 (NPO 法人ねおす 大雪山自然学校)

内容： エキノコックスという寄生虫をご存知だろうか。この寄生虫が引き起こす病気のために、北海道では生水を飲むことができない。キツネに近づくこともできない。そんな課題を解決するために、大雪山自然学校のある東川町ではキツネに虫下しの薬を飲んでもらうことにした。同時に東川の全小学校できつねさん教室を開き、キツネとエキノコックスを学ぶ教育活動も展開した。その効果の程を紹介した。

◆小学校の総合的な学習の時間における環境教育

実施者： 平良木 菜梨恵 (東京農工大学佐藤研究室)

内容： 栃木県佐野市の小学校で、総合学習の時間を頂き、4 コマ×7 回の環境教育を行った。悪戦苦闘しつつ、林業振興、没後 100 年を迎える田中正造氏の話…等々、佐野ならではの教育プログラムを作成・実践。現在は作成したプログラムを地域指導者が使えるように改良点を検証する作業に入っている。プレゼンでの報告をご覧いただき、清里ミーティングに参加している皆様にアドバイスをいただく場とした。

◆エネルギーの選択における一考察

実施者： 富田 俊幸 (立教大学院 博士後期課程)

内容： 2005 年度、中学 2 年選択理科の時間に実践したエネルギー環境教育をもとにエネルギーの選択について考えた。3.11 以後、原発の継続か否かというエネルギー問題は日本社会にとって大きな課題となっている。我々は、将来に禍根を残すことがないように、正しい判断をしなければならぬ。では、議論の論点として冷静に判断する視点や基準はどのようなものなのだろうか。ESD の視点を取り入れた意思決定の方法を提案した。

◆エコ×エネ体験プロジェクトについてのご紹介

実施者： 小林 庸一 (J-POWER 電源開発株式会社)

内容： 「エコ×エネ体験プロジェクト」は、J-POWER グループが「エネルギーと環境の共生」をめざして取り組んでいる社会貢献活動である。環境教育の専門家と協働して「エコ×エネ体験ツアー」と「エコ×エネ・カフェ」を開催している。プレゼンでは今年実施した小学生親子・大学生対象ツアーとエコ×エネ・カフェの様子をスライドにて紹介した。また、次回開催 (11 月 22 日) のエコ×エネ・カフェの参加案内も行った。

◆地球を食い潰さない思考の基準としてのライフスタイル

実施者： 岩崎 三四朗 (どろんこ村小笠原農園)

内容： 自給自足の農的暮らしの可能性を ①消費生活に変わるライフスタイル、②他人と対等な関係を結ぶためのライフスタイル、③「育てて食べる暮らし」という命の現場、④地方分権の個人レベルの実践、という 4 つの観点から考えた。

◆あたらしくてなつかしい里山への挑戦!

実施者： 樋山 和恵 (柏崎・夢の森公園) 遠藤 亮 (ホールアース自然学校)

内容： 年間 8 万人が訪れる里山公園が行っている「自然が身近にある暮らし」の魅力発信活動をご紹介。セルフビルドの足湯・森のようちえん・自然農講座・市民による森づくりなど、なつかしくてあたらしい取り組みである。開園 5 周年を迎えた今年、これまでの取り組みが実を結んできた一方で「はたしてこの森や施設を十分活用できているのか」と原点に立ち返る想いも湧いてきた。そんな私たちの現状を紹介した。

◆ろうきん森の学校事業の今までとこれから

実施者： 津田 和英 (ホールアース自然学校)

内容： 2005年より開校した「ろうきん森の学校」は、日本の里山再生をテーマにしている森林環境教育事業である。活動の柱として「森を育む」「人を育む」「森で遊ぶ」の3つがあり、富士山、福島、広島の全国3地区で展開している。プレゼンテーションでは富士山地区の活動の紹介や将来の展望について紹介した。

◆「コミもり」ってなに？ねおすが取り組む森づくり

実施者： 佐藤 ふたみ (NPO法人ねおす 黒松内ぶなの森自然学校)

内容： わたしたちは現在「コミもり」という名の森づくりに取り組んでいる。森づくりの専門家ではない私たちがどのように人と人、人と森をつなげる森づくりに関わっているのかを紹介した。

2日目：11月18日(日) 夜の部

◆地域に根ざした学び (PBE) をテーマに

実施者： 大前 純一 (NPO法人エコプラス)

内容： 自然に親しみ、自然を学ぶことから始まった環境教育は、持続可能な社会づくりという概念と出会うことで、地域とのつながりが新たな課題になってきている。では、何がどうなれば、地域に根ざした環境教育になるのだろうか。自宅近くでの自然観察も地域に根ざした活動になるのか、地域とはどこまでが範囲なのか。内外の専門家による議論を紹介しつつ、今後の環境教育の方向性を考えた。

◆絵本と環境教育 ～図書館が取り組む新しいチャレンジ～

実施者： 徳永 豊 (スリーヒルズ・アソシエイツ)

内容： 図書館で実際に取り組んでいる事例を紹介。静かな環境を維持している図書館において、夜に図書館を開放し、チェロの演奏と読み語りを実践。題材は、宮沢賢治の「セロ弾きのゴーシュ」。その様子を紹介した。

◆環境教育を暮らしに直結させる！環境教育の真価を問う？

実施者： 佐々木 豊志 (くりこま高原自然学校)

内容： 「何のために環境教育があるのか？」・・・一緒に考え行動しよう。もういつまでもチーチーパッパをしている場合ではない。循環可能な地域資源を活かすことができるかどうか、これまでの環境教育の真価が問われている。東北で2度の震災を乗り越えてきた「くりこま高原自然学校」の取り組みの報告。震災からの復興には「環境異境の知恵」が生きるはず。このことを一緒に考える時間とした。

◆幼児環境教育のいまとこれから

実施者： 神田 浩行 (みどり環境共育事務所たのかんさあ (旧 K&K))

内容： 幼児の環境教育というと「森のようちえん」に関心が集まるが、幼児の多くが通うのは幼稚園、保育園。川崎市では、平成20年に市と私と幼稚園団体が協力して「つながりたのしむあそび集」という幼児環境教育プログラム集を作成した。市では、来年度より、保育園向けの環境教育をスタートさせる。幼稚園、保育園での環境教育はどうなっているかなど幼児の環境教育を俯瞰しつつ、問題点課題、今後の展望などについて考えた。

◆生物多様性とESD～ESDの10年・最終年に向けて

実施者： 福井 昌平 (株式会社コミュニケーション・デザイン研究所)

内容： 国連ESDの10年(2005年～2014年)の最終年に向けて、オールジャパンの草の根からの盛り上がりを創出し、様々なESDテーマ活動を実践している日本中のグッドプラクティスに光を当てる小会の取り組みの紹介をした。一例として「生物多様性とESD」テーマワークショップについて紹介した。

◆EEBE: EE for Business Education (セッションは英語にて実施)

実施者： ハーバード・ドノヴァン (立教大学経営学部国際経営学科)

内容： Environmental Education, Experiential Education, and Sustainability have become increasingly important components of the business education curriculum in the United States and other countries. This presentation will review those developments and give a chance to discuss how environmental issues play a growing role in Japanese business practice. (Presentation and discussion will be in English)

◆鹿児島大学演習林と大野ESD自然学校

実施者： 井倉 洋二（鹿児島大学演習林）

内容： 大隅半島に広がる3,000haの「大学の森」を活用して1999年から森林環境教育活動を実施している。森林で子どもたちと大学生がともに学ぶ体験学習プログラムや、2006年に地元集落の廃校を活用して誕生した自然学校、環境教育から持続可能な農山村の地域づくりへの展開など、これまでの取組と学生たちの多様な学びを紹介した。

◆この夏、日加学生のロッキー遠征から見たこと

実施者： 高野 孝子（NPO法人エコプラス）

内容： 8月、日本とカナダの大学生17名が、ロッキー山脈周辺にて、川を下り、山を歩きながら2週間をともに過ごす、野外・環境教育プログラムに参加した。日本人学生たちは本格的な野外での経験もなく、英語でのコミュニケーションにも不安を抱えながら、体当たりでの挑戦であった。環境への負荷を最小限にすることを意識しながらの旅の様子や、何が学びの要素だと彼らが考えたかを紹介した。

早朝ワークショップ

2日目(18日) 7:00~8:00

◆科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」

実施者：津田 和英 (ホールアース自然学校)

概要:静岡の地形や地層の成り立ちについて、パズルや実際の岩石を用いて理解を深めて行くワークショップを行った。それぞれ3~4人のグループに別れ、グループごとにパズルやクイズで競い合った。岩石を使ったクイズでは、静岡の東部、中部、西部、伊豆、それぞれの岩石の名前を、ルーペや科学薬品を使って当てていくなど、実験も混じえながら進めた。早朝にも関わらず、参加全員が楽しみながら、静岡のジオについて学んだ。

(参加者数：16名)



◆みどりともだちに！泥んこ遊び de 苔玉作り

実施者：和田 徳之 (みどりのともだちプロジェクト)

子どもから大人まで幅広い対象に行われている苔玉作りワークショップを実施した。参加者は、それぞれが苔玉作りキットの土をこねたあと、好きな苗を丸く包んでコケで覆い、目などをつけ、表情をつけてオリジナルの苔玉を完成させた。実施者からはこれまで実施してきた苔玉作りワークショップでのエピソードや、「苔玉を育てる」ことについての紹介があった。参加者からは「土にさわったのは久しぶり」「楽しかった」といった声が上がった。

(22名 (オブザーバー1名を含む ※定員超のためオブザーバー参加))



◆キープ協会「アニマルパスウェイ」見学ツアー

実施者：湊 秋作

(公益財団法人キープ協会 (やまねミュージアム))

まずは室内で、夜のアニマルパスウェイを通る動物たちの映像を見てから、外に出て実際にアニマルパスウェイを見学。パスウェイにはヤマネだけでなく、リスやモモンガが頻繁に通る、設置後3カ月で動物が1000回も通った。氷柱付かないように屋根をつけたり、動物が来やすいように木で森から道を作ったり、やまねミュージアムだけでなく、多くの企業との協力の中で生まれた工夫が活かされたパスウェイを見ることができた。

(参加者数：21名)



当日募集ワークショップ

◆白川郷に伝わるネソの技で橋をかけよう

実施者：黒坂 久美、太田 正満、千葉いづみ
(NPO 法人白川郷自然共生フォーラム)

ネソという白川郷に伝わる伝統の技術を使い、人が乗れる橋を作るWS。ネソとはマンサクの木であり、木と木を縛るために用いられ、この技術は合掌造りにも使われている。マンサクの木をまげて柔らかくしねじる、ネソねりをする事でロープ作る作業を行った。そして土台となる木々を、ネソを使い縛って行くことで完成させた。大人2名が乗っても大丈夫なほど頑丈なものであった。白川郷の伝統の素晴らしさを体感した2時間であった。

(参加者数：15名)



◆エコロジカル・シンキングゲーム

実施者：奥宮 健太 (BEANS BEE)

全参加者で1チームとなり、各自シロツメクサやイナゴ、モズなど生態系を後世する生物を1種ずつ担当し、生態系の設計ボードゲームを体験した。参加者は生態系を設計するために試行錯誤する必要のあるゲームであった。振り返りでは、ゲーム自体の発展の可能性や将来性など、これからの活用に期待するコメントがあった。ゲームの開始前は人間の目線で見えていたボードが、終了後には生物の目線となる奥の深いゲームを体験できた。

(参加者数：6名)



◆ジオ×環境教育 —生きている地球を伝えたい！でもどうやって？—

実施者：津田 和英(ホールアース自然学校)

ジオパークでの取り組みやホールアースでの取り組みの紹介や実施している防災教育を踏まえ、ジオと環境教育をどう結びつけているのかについてのWSであった。ビデオなどの様々な教材を使ったわかりやすい説明は、聞くうちに思わず地学に興味を抱かせるものだった。終盤で紹介された教材の赤色立体地図は6m×4mの大きさでとてもインパクトがあった。楽しさを交えながら、ジオを伝える可能性について考える時間であった。

(参加者数：10名)



◆ウィルダネス ファーストエイド～仲間を守るその技術

実施者：豊田 啓彰、横堀 勇 (WMA JAPAN)

前半は室内で、「ウィルダネス状況」や人体構造などウィルダネス ファーストエイドについての知識を学び、後半は外に出て実際に学んだことを体験した。参加者は、負傷者を傾いた地面から平らな地面に移すことだけでも苦労し、実際に救助することの大変さを身を持って知ることができるプログラムである。ウィルダネス ファーストエイドは都会での災害時にも大変役に立つものであり、山や川に行かない人も命を守るために必要な知識だ。

(参加者数：19名)



◆ESD(え(E)っ、そ(S)れから、ど(D)うするの?)学びのネットワークの活かし方

実施者：村井伸二（玉川大学 心の教育実践センター）

井上優子（日本エコツーリズムセンター）

今井達也（㈱小学館集英社プロダクション）

日暮真里子、中山元喜（国際自然環境アウトドア専門学校）

「清里ミーティングで感じたこと」をテーマに、持ち寄った自然物で1つの作品を作った。その後、その場にいたみんなの考えていること、実施していることをシェアした。そして、どうすれば次につなげることができるのかを、初めに作った作品から抽出したキーワードに沿って話し合った。実施者、参加者ともに若い世代がメインであったため楽しい雰囲気の中、清里ミーティングでの出会い、学びを体を動かしつつ共有した。

(参加者数：7名)



◆ハーブ&アロマCafé

実施者：村上 志緒（トトラボ植物療法の学校）

兼松 彩（公益財団法人キープ協会）

本ワークショップでは、植物療法を体験しつつその療法について考えた。植物療法は疲れを取り、風邪予防に効果がある。今回実施したことはモミの葉を使用し、その成分を抽出する蒸留実験を行った。さらに、モミの葉を切ってお湯につけて蒸気を浴びる体験もした。また、ジャーマンカモミールとペパーミントをブレンドしたハーブティの試飲を行った。参加者はハーブでリラックスするなど香りを楽しみながら、植物療法について考えた。

(参加者数：8名)



◆体験！小学校で実施した環境アクティビティ

実施者：平良木 茉梨恵（東京農工大学佐藤研究室）

佐藤 敬一（東京農工大学）

大石 智啓（東京農工大学環境資源科学科）

Project Learning Tree (PLT) というアメリカで開発された森林環境教育の日本版プログラムの実践を行った。PLTは、小学生を対象として木の構造と役割を理解するための体験型プログラムである。参加者の五感に働きかけ、体感を通して学ぶことができる。子どもたちにわかりやすく、そして興味を持ってもらえるようにするためにはどのように表現を工夫するか、言葉の説明や伝え方など具体的な話し合いがなされた。



◆みんなでつくる みんなで考えるWS～福島の森を取り戻すには…～

実施者：丸谷 聡（東北大学菜の花プロジェクト）

丸谷 聡子（明石のはらくらぶ）

西村和代（環境共育事務所カラーズ）

本ワークショップは、「福島の森を取り戻すために何ができるのか」というテーマで議論し、福島の森の新しい価値を考えていくという内容であった。前半では、実施者から福島の森の現状、放射能汚染の状況などが共有された。後半では、実施者・参加者全員でディスカッションが行われた。最後には、本ワークショップの場で出会った人々同士が今後も繋がり、情報を共有していくことが大切ではないかと締めくくられた。

(参加者数：10名)



◆都市型環境施設のノウハウお伝えします！！

実施者：松村 奈央、大越 智子、河盛 裕典
(東京ガス株式会社環境エネルギー館)

本ワークショップは東京ガス環境エネルギー館（以下、エネルギー館）の3名によって行われた。参加者はプログラム実施の流れに関して、カードゲーム等で体験し学んだ。企画（PLAN）・実施（DO）・評価（CHECK）・改善（ACT）の流れはPDCAサイクルとよばれ、エネルギー館で行われる「都市型環境教育」のプログラム開発の現場で実際に用いられている。

(参加者数：5名)



◆空を眺めてみよう ※早朝実施

実施者：小澤 龍馬（気象庁予報部予報課）

本ワークショップは天気の仕事について、地学や物理学の要素を交えながら詳しいガイドが行われた。屋外で実施されたワークショップでは、深呼吸をしたり気温を肌で感じたり五感を使って天気を体感した。雲がふとんの役割をはたし気温に影響していることや、雲が消えてしまうのは太陽の光が影響しているなどの説明もあり、天気をサイエンス的に知ることと感覚を使って感じる事ができたワークショップであった。

(参加者数：21名)



3 日目

全体会 3・閉会式

全体会 3・閉会式 総合司会：風と土の自然学校 梅崎 靖志

全体会 3
全員参加型 全体ディスカッション

閉会式
総括：(公社)日本環境教育フォーラム理事 徳永 豊

(敬称略)

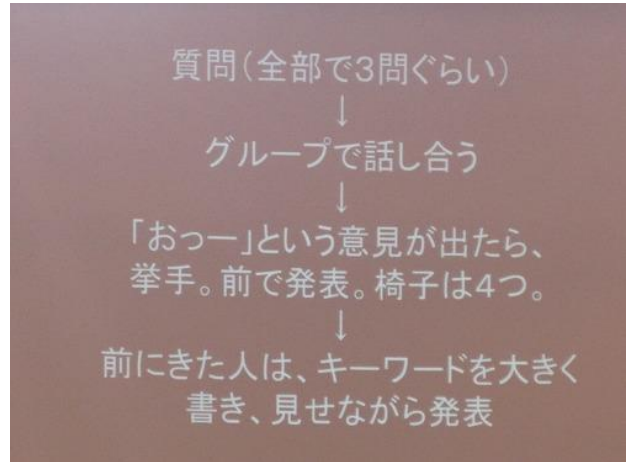


3 日目 全体会 3

司 会： 風と土の自然学校 梅崎 靖志

全体会3では、例年通り全員参加のパネルディスカッションを実施した。実施方法は、世代ですとか所属団体など多様で、今回あまり話が出来なかったという人と3~4人組みを作る。最初に、グループ内で簡単な自己紹介を行った。

その後、今回の清里ミーティングをふり返るための質問が1問ずつ出題され、各グループの中で1人50秒ずつ思ったことなどを発表し合った。その各グループの中で、全体の前でシェアをしたい回答があった参加者さんに挙手いただき、梅崎氏に指名された方には全体の前でキーワードを紹介しつつ1人1分程度で、その考えなどを紹介いただくという形式で、清里ミーティングを振り返る時間とした。



全員参加型 全体ディスカッション

第1問

今回の清里ミーティングで印象に残っていることは？

「各世代がいる」 笠倉 秀貴 (NPO 法人国際自然大学校)

「各世代」がいるとキーワード書かせてもらった。今回、初めて参加をした。神奈川出身だが、環境系のフォーラムやミーティングをすると、集まる場にはシルバー世代が多い。今回私が始めて参加させてもらったところ、各世代の人たちが満遍なく集まっているのが印象的だったのを感じたので発表させて頂いた。

「日常」 沼田 れいな (八丈島)

初めてこのミーティングに参加した。全く環境教育という言葉を使ったことはなかった。最初は入りにくい印象があったが、3日間参加して今までやってきたことは日常であると感じた。本当に全てのものは繋がっているということと、自分には関係ないと思っていたことが全て関係ある。また自分が過去に行ってきたこととこれから行っていくことが繋がっていくと感じた。なので、自分もそういう仕事をやっていくのか分からないけれど、日常的にそれらが繋がっているということが印象に残った。

「戦略をもつ」 湯本 高士 (自給農園 めぐみの)

キーワードは「戦略を持つ」ということ。例えば、私たちがどのような人をターゲットとし、そのターゲットたちにはどういったニーズがあり、環境に興味をもっているかということを知ることが大切。施設として集客に困っているところもあるかと思うが、誰に向けてどういったことを伝えていくのか、どういった方法で伝えていくのかといったマーケティングなど、伝えていくという戦略をもつて今後、活動をしていくべきだと感じた。

「やっぱ食事でしょ！美味」

村井 伸二 (玉川大学 心の教育実践センター)

「やっぱ食事でしょ！」って思ったら、「おお〜」って言ってもらえた。プログラムでないと行ってしまえばそうだが、やっぱり地産地消だったり美味しい。野菜だったり、フルーツだったり、その中にスタッフの愛を感じたり、裏でコックさんが自慢げに作ってるんだなあと感じた。それを食してみんなで会話を通して共有して、色々と考えて…。広がりを持っていたんだか大事なものだなんて思って発表した。

第2問

こんな出逢いがありました、こんなことが始まりそう

「プログラムします」

岩淵 渡 (ネイチャーガイドのニングル)

昨日の午前中の都市と自然の繋がりという話の中で、プログラムを最後に作り上げるワークショップだった。その時にプログラムが2つ良いものが出来た。そのプログラムを私のところに持ち帰って来年の夏に実施する。実際にするという話を昨夜しており、「じゃあ来ませんか?」と話をした人もいた。そのような繋がりができた。

「古きを知り、新しきを考える」

谷口 哲郎 (岩木山自然学校)

「古きを知り、新しきを考える」。白神山地にはマタギという狩猟をしている猟師さんの文化がある。今日の午前中のワークショップで、白川郷のネソの文化を少し習った。一つ感じたのが同じ世界遺産だが、文化遺産と自然遺産で全く目指しているものが違った。ただ白神もここ数年来られる方がかなり減少している。では、白神ってどういうところなのかと考えたときに文化的価値が非常に高い。近年それがクローズアップされていてそういう部分の取り組みをしていかねばならない。そこで、白川郷でネソの文化を伝えていくように、白神でもマタギに関して保存しつつ、さらに一歩進めた私たちが山の付き合い方を考えていくために古きを知り新しきを考えて行きたい。

「某県内自治体での森づくり活動」

河野 格 (NPO 法人都留環境フォーラム)

これは、山梨県内の某自治体で実際に自治体側からこういう仕事で森づくりをしてくれないかという、仕事の依頼のような形で日本の森バイオマスネットワークのメンバーと仕事として森づくりができるようになるぞという感じ。

「来年は、3.5hWS 白神山地とコラボレーション」

黒坂 久美 (NPO 法人白川郷自然共生フォーラム)

白川郷からネソという技を持ってきてワークショップを実施したが、のっぽさんに参加いただいて、「おもしろいから来年は白神山地の文化ネタとコラボして3.5hワークショップをやるよ」と言って頂き、恐れ多いと思っていたが、ぜひやってみようと思った。そのような出会いがあったのが一番印象的だった。当日募集のワークショップだったが、自分にできるのかとずっと不安だったが実施して良かった。まだ、実施していない方はしてみた方がよい。



第3問

アジアの一員として、日本ができること。 この1年で自分がやりたいこと？

「ジオ」

津田 和英（ホールアース自然学校）

「ジオ」という言葉を1年間言い続けてきた。なぜかという、ジオと環境教育を混ぜると防災教育になると思う。それを教育で達成していきたいと思っており、掘り下げたいと思っている。足元を見つめて、アジアと日本も地続きでつながっているというところも発信して行きたいと思っている。日本には、中国、台湾、韓国、たくさんの方が来ているのでそういったところを感じながら活動を続けて行きたい。

「本でツナガル」

坂井 まさみ（ライブラリアン）

フリーで図書館司書、ライブラリアンをやっている。皆さんと分野が違うかとも思い参加した。皆さんの自然学校とか企業に環境教育に関係するたくさんのお本をお持ちだと思うが、その本でつながってお互いの組織を知るというサービスがフェイスブックと連動している。無料でリブライズというサービスが9月3日にオープンした。こちらをご使用いただくと、皆さんがお持ちの本をフェイスブック上にUPして知ることができる。本があるということで集客にもつながると思うし、フリーなので無料でご利用いただけるので、アジアの中でもシンガポールの日本人街で日本語に餓えている方たちが、本を登録し、そこに行けば本が読めるということでリブライズを登録し始めていただいている。日本に多くある環境教育に携わっている人たちが本を公開することによって、海外で環境教育を行っている組織と繋いでいく。フェイスブックの普通の友達が環境教育に興味を持つきっかけになると思うので、リブライズにアクセスしていただき、ぜひ本を通じてみんなの輪を広げていただきたい。

「日本を知る」

武井 泉（日能研）

アジアの中で考えた時に、自分のいる日本のことをよく知らないなと思ったことが1つあった。先程、振り返りで話した3人の方たちもそれぞれの地域で素敵なことをなさっているが、毎年このミーティングに来て、「ぜひ伺います」と空約束を何度もして、「今年も清里ミーティング来ちゃった。ごめんなさい。行ってない」って方がいて毎年すごく恥ずかしい。なので、今年はお約束した場所は少なくとも一箇所は行こうと思っている。自分の近くで仕事をされている現場を見て伝えて行きたいと思う。

「自然共生のココロをまずは、

インターナショナルスクールへ」

和田 徳之（みどりのともだちプロジェクト）

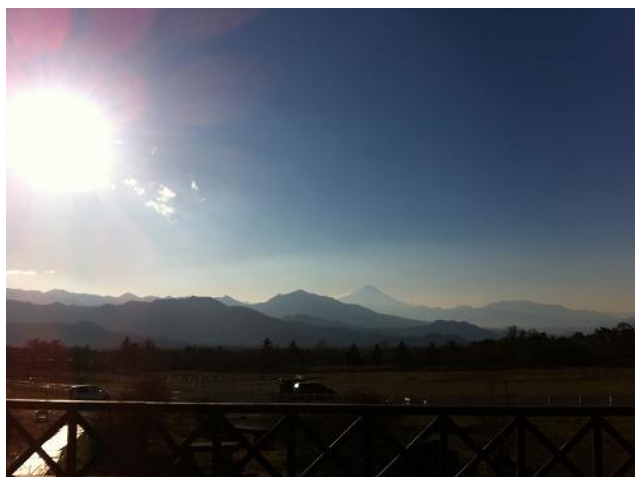
苔球作りを通じた活動をしている。全体会であった日本の優位性の話で1つ思い浮かぶのは、和を通して尊しとするような色々な文化を取り入れるような心根が優位性の1つであると思っている。その1つ自然というキーワードだと、自然共生というところがあるのではないかと思う。苔球にあえて目をつけて、みどりと友達になろうという心を伝えたいと思い、活動している。アジアを含めた世界の話で行いたいのが、検疫の問題で実施が難しいので、まずは国内の多くの人にやってほしいと思ってい、インターナショナルスクールや大使館でやりたいと思っている。国内でもトップの西麻布にある西町インターナショナルスクールにラブレターを送ったところ、すぐに電話がかかってきて、「今度、校長が会いたがっているからプレゼンに来い」と言われた。このチャンスを1年かけて育てていこうと思っている。

閉会挨拶

(公社) 日本環境教育フォーラム理事 徳永 豊

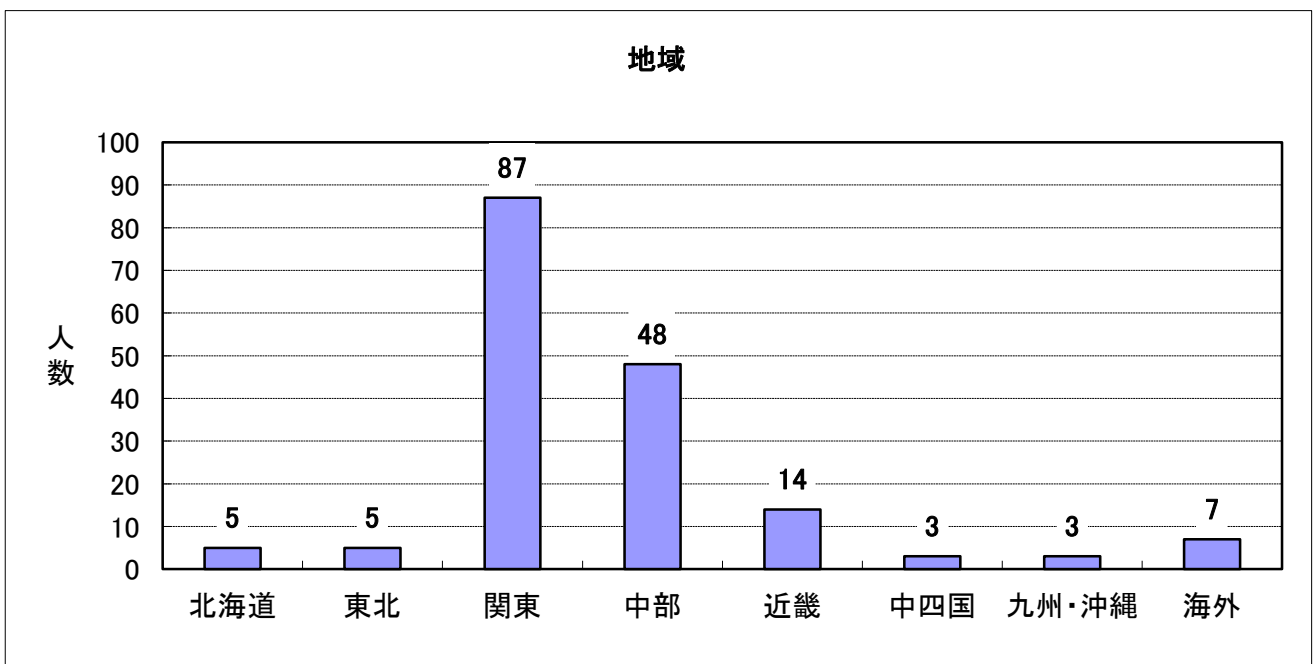
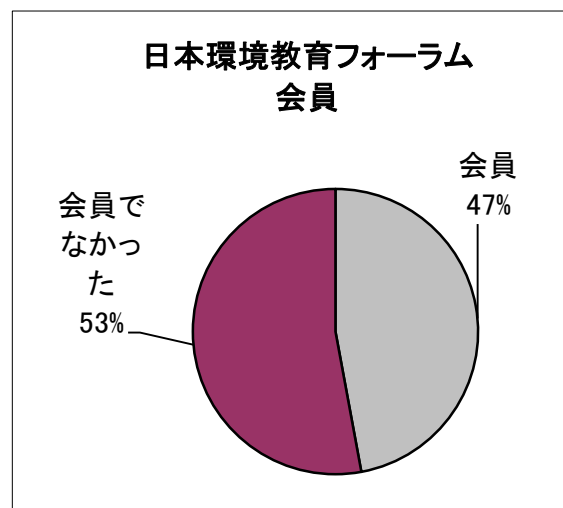
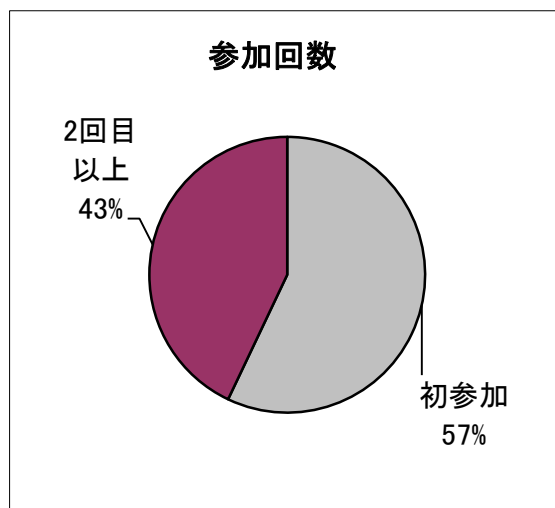
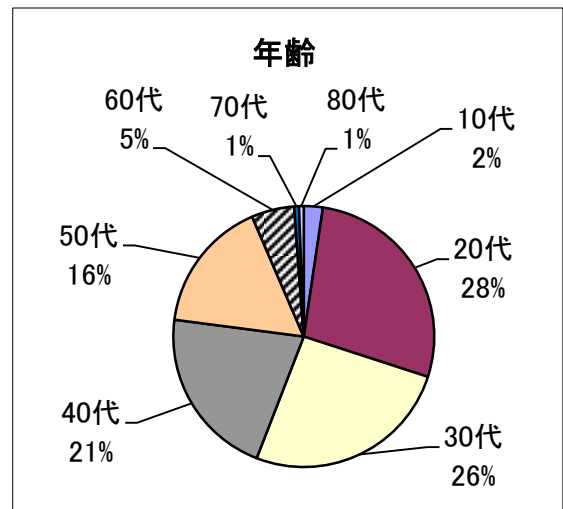
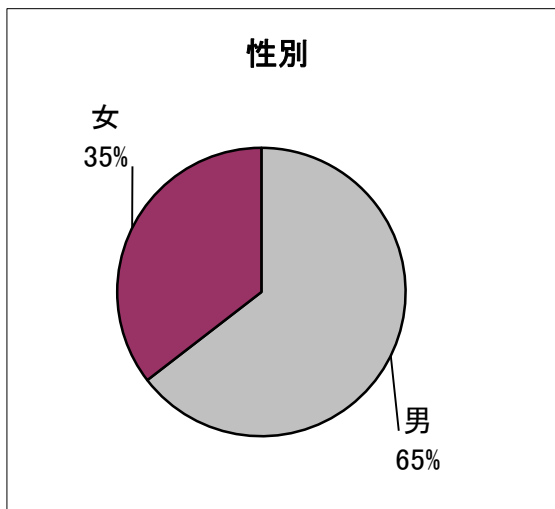
閉会の挨拶は、山口県の図書館の館長も現在している理事の徳永から行った。

来年は、徳永が山口県の図書館で行っている、読み語りとチェロの演奏が出来るようなワークショップを清里ミーティングで実施し、今までにない清里ミーティングにしたいと考えていると述べた。自分たちの世代は少なくなり寂しい思いもあるが、若い人がどんどん来てくれるのは嬉しいので、この環境教育ミーティングを次の新しい出会いを作り、また紡いでいくという場にして欲しい。また、来年お会いできたらと思っていると語り、最後を締めくくった。



参加者データ

～データに見る清里ミーティング 2012～



清里ミーティング 2012 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム

※この報告書および清里ミーティングに関するお問い合わせは下記まで。

〒160-0022

東京都新宿区新宿 5-10-15 ツインズ新宿ビル 4F

公益社団法人日本環境教育フォーラム

TEL:03-3350-6770 FAX:03-3350-7818

URL : <http://www.jeef.or.jp/>